

2023年10月2日

アジア研究図書館

アジア研究図書館の蔵書について	1
はじめに (河原 弥生)	
アジア研究図書館の蔵書 (河原 弥生)	
1 アジア (徳原 靖浩) 2 東アジア (板橋 暁子) 3 東南アジア (澁谷 由紀)	
4 南アジア (河崎 豊) 5 中央ユーラシア (河原 弥生) 6 西アジア (徳原 靖浩)	
東京大学アジア研究図書館蔵「辛島昇文庫」について (足立 享祐)	57
辛島昇先生のご研究と教育について (澤田 彰宏)	61
アジア研究図書館活動報告	66
「アジアの資料をすすび、ひらくー デジタルコレクションの可能性ー」開催報告 (荒木 達雄)	
アジア研究図書館利用案内	
次号の予定	
編集後記	

編集・発行: 東京大学附属図書館アジア研究図書館研究開発部門
(RASARL)

〒113-0033

東京都文京区本郷7-3-1

東京大学附属図書館 アジア研究図書館担当

asialib@lib.u-tokyo.ac.jp

<https://www.lib.u-tokyo.ac.jp/ja/library/asia>

アジア研究図書館の蔵書について

<はじめに> 河原 弥生 (RASARL 准教授)

アジア研究図書館は、2020年10月に総合図書館の一施設として開館し、今月で4年目を迎えた。新しいアジア研究を生み出す研究拠点の形成を目指し、アジア研究に関する資料を広く収集している。蔵書は、学内の他の図書館・図書室からの移管資料を基盤としつつ、購入資料や、研究者・研究機関等からの寄贈資料が加わることによって徐々に構築されつつある。本記事では、現時点でのアジア研究図書館の蔵書について分析し、その特徴を紹介したい。

アジア研究図書館の蔵書は、総合図書館4階のアジア研究図書館開架フロアと、保存書庫、自動書庫に分かれて配架されている。開架フロアには、参考図書、参照頻度の高い研究書、研究入門書、学史上重要な研究書、研究入門書が優先的に配架されている。保存書庫には、資料状態、形態などにより、保全に注意を要する資料が配架されている。自動書庫には、開架フロアおよび保存書庫に配架しない資料が収められている。

新しい図書館を開館し、蔵書をしかるべき場所に配架して運営を始めるためには、当然ながら膨大な準備作業が必要であった。アジア研究図書館の設置構想においては、学内各部局図書館・室に分散して所蔵されてきたアジア研究資料を開架フロアに配架して効率的に利用に供することに加え、学内各部局図書館・室の所蔵スペースの逼迫を解決することを目指して新たに建築された自動書庫も活用し、アジア研究資料を集約して所蔵することが計画された。その両方を円滑に実現するため、各部局図書館・室には初めに開架フロアに配架すべき基本的な研究書を選定して移管してもらい、その作業完了後に自動書庫入庫資料の移管を開始する計画が立てられた。しかし実際には、コロナ禍の影響や様々な作業上の困難により計画の延期を余儀なくされ、開館前に完了すべきだった開架フロアへの移管は2年半遅れて2023年4月に完了した。自動書庫への移管は2022年度から開始され、現在は2029年度までの自動書庫初期入庫計画に従って部局からの移管事業を進めているところである。

また、アジア研究図書館が新しいアジア研究の拠点となるためには、移管事業と並行して、蔵書の偏りや不足を補いつつ、最新の研究成果を継続的に収集していく必要がある。このため、開館準備期から各地域の資料を購入している。

資料の移管と購入に加えてアジア研究図書館では開館前よりいくつもの貴重な大型コレクションの寄贈を受けている。しかし、アジア諸言語で書かれた資料の書誌の登録には多大な労力と時間がかかるため、これまでに登録が完了して利用が可能になったコレクションは一部にとどまっている。このほか、アジア研究図書館には、附属図

書館と台湾国家図書館との学術交流協定により台湾漢学リソースセンター (TRCCS) が設置されており、台湾国家図書館から定期的に受け入れる寄贈資料 (TRCCS 資料) は開架フロアの一角に別置されている。

一方でこの3年の間にアジア研究図書館の運営体制の整備が進められてきた。2021年度には「アジア研究図書館資料収集基準」が策定されたほか、アジア研究図書館選書委員会が発足し、附属図書館事務部との協働により、アジア研究図書館研究開発部門 (RASARL) およびアジア研究図書館上廣倫理財団寄付研究部門 (U-PARL) に所属する教員・研究員がアジア研究図書館の各地域担当の選書委員となって移管資料の分類、購入資料の選定、寄贈資料の受入等を担う体制が整ってきた。

このようにして、アジア研究図書館の運営は次第に軌道に乗ってきており、蔵書も少しずつではあるが着実に豊かになってきている。そこで本記事では、開架フロアへの移管完了時点でのアジア研究図書館の蔵書について、資料の分類基準や他のいくつかの観点から分析をおこなった。ベースとなる蔵書数は、アジア研究図書館所蔵資料として2023年5月1日時点で東京大学 OPAC に登録されている53,804 点にユネスコ・アジア文化センター識字教育資料 (ACCU 識字教育資料) 3,487 点を加えた57,291 点である。ACCU 識字教育資料は重要な寄贈コレクションの一つであるものの特殊な形態 (ポスター、玩具など) の資料が多いために東京大学 OPAC に登録しておらず、その目録¹は東京大学学術機関リポジトリで公開している。蔵書の全体像を把握することは、今後の資料収集の方針を策定するための重要な指標ともなるであろう。

本記事では、蔵書をアジア研究図書館全体および各地域単位で、(1)地域、(2)言語、(3)主題、(4)出版年、(5)出版国、(6)由来の6つの観点から分析する。このうち(1)から(3)は、アジア研究図書館独自の資料の分類方法に基づく分析である。(4)および(5)は東京大学 OPAC に登録された関連データに基づく。(6)は資産としての資料の由来を分析するものである。

アジア研究図書館の蔵書は、原則として「アジア研究図書館分類表」²に従って分類されるが、一般図書、参考図書、一部の寄贈資料は分類体系が異なる。このため、分析項目によって対象範囲が異なる場合がある。

(1) 地域別の構成

蔵書の地域別の構成を分析する。蔵書のうち一般図書は、「地域 (大区分)」記号により「1 アジア」「2 東アジア」「3 東南アジア」「4 南アジア」「5 中央ユーラシア」「6 西アジア」に分類され、1~4 の地域は下位で「地域 (小区分)」に細分される。参考図

¹ 『アジア研究図書館所蔵ユネスコ・アジア文化センター識字教育資料目録』(1: 河原弥生・鈴木舞編、2: 河原弥生編、3: 河崎豊編)、東京大学附属図書館アジア研究図書館研究開発部門、2022-2023、アジア研究図書館叢書 1-3。

² アジア研究図書館分類表については、U-PARL 編『図書館がつなぐアジアの知: 分類法から考える』(東京大学出版会、2020年)の第3章「アジア研究のための書架分類—アジア研究図書館分類法の成り立ちと思想」に詳細に解説されているので、参照されたい。

書は、別置記号「R」と上記の1から6の「地域（大区分）」記号の組み合わせで分類される。このため、アジア研究図書館全体の分析に際しては、各地域の一般図書と参考図書を合計した「地域（大区分）」単位の蔵書構成を、1～4の地域の分析に際しては、一般図書の「地域（小区分）」の構成を分析する。5～6の地域では地域別構成の分析は行わない。

(2) 言語別の構成

蔵書の言語別の構成を分析する。一般図書は、地域により分類された後、各地域内で定められた「言語分類記号」により分類される。基本の言語分類記号は「J 日本語」「W 西洋諸語」³「X アジア諸語・その他」⁴の3種であるが、2～6の地域の言語分類はそれぞれの地域の必要に応じた言語記号を追加して展開する。一方、参考図書の言語は、MARC21 Code List for Languages に準拠した3文字の言語コードによって分類される。このように分類体系が異なるため、一般図書と参考図書について別々に分析している。

(3) 主題別の構成

蔵書の主題別の構成を分析する。一般図書は、地域分類と言語分類がなされた後、主題により分類される。主題分類は、日本十進分類法新訂9版（NDC9）を基本としつつ、アジア研究に必要な細分を加えた分類表を採用している。本分析は一般図書のみを対象とし、「1-01 アジア・世界」にまとめて分類される平凡社東洋文庫は独自の巻号記号によって分類され、「2 東アジア」「3 東南アジア」に含まれる漢籍は四部分類によって分類されるため、分析対象には含めない。

(4) 出版年別の構成

アジア研究図書館ではいつ頃の出版物を多く所蔵しているのかを分析する。東京大学 OPAC に登録される出版年情報に基づき、原則として20年を単位とし、～1900年、～1920年、～1940年、～1960年、～1980年、～2000年、2001年～の7期に区分し、出版年不明の区分を加えて分析する。東京大学 OPAC に登録されている全資料、すなわち一般図書、参考図書、TRCCS 資料を分析対象としている。

(5) 出版国別の構成

(1)～(3)で資料の研究対象を基準に分析したのに対し、資料がどこで刊行されたのか、すなわちどこで行われてきたアジア研究資料なのかを分析する。ただし、東京大

³ 西洋諸語とは、英語、フランス語、ドイツ語、オランダ語、ロシア語、イタリア語、スペイン語、ポルトガル語、ラテン語、ギリシア語のみを指し、他の西洋諸言語（例えばハンガリー語やポーランド語）はその他に含まれる。なお、中央ユーラシアにおいてのみロシア語が西洋諸語とは区別されて独自に分類される。

⁴ 本記事では、「X アジア諸語・その他」には言語分類記号「漢」に分類される漢籍も含んでいる。

学 OPAC が依拠している NACSIS-CAT では、出版時期にかかわらず最新の出版国コードが登録されるため、現存しない国家の単位で資料を分析することはできない点には留意する必要がある。例えば、ロシア帝国期にタシケントで出版された資料の出版国コードはウズベキスタンとなるため、ロシア帝国期の中央ユーラシア研究をこの分析項目によって絞り込んで知ることはできないし、同様にソ連、満州国、英領インドなどの国家単位で出版物を絞り込むこともできない。東京大学 OPAC に登録されている全資料、すなわち一般図書、参考図書、TRCCS 資料を分析対象とする。

(6) 資料の由来別の構成

上述のように、アジア研究図書館の蔵書は学内の各部局図書館・室からの移管資料を基盤とし、購入、寄贈の受入によって成り立っている。ここではまず移管資料に関して、移管元部局によって資料が研究対象とする地域や分野には偏りがあることから、他の分析基準とあわせて蔵書の全体像をより正確に把握するための情報になると考え、分析基準とした。また、大型コレクションの寄贈受入は関連地域の蔵書構成に大きな影響を与える。このため、寄贈資料の由来についても分析の対象とした。アジア研究図書館全体の蔵書構成における本分析項目では、東京大学 OPAC に登録されている全資料に加え、独自に国別の通し番号を付して保存書庫に別置されている ACCU 識字教育資料も併せて分析の対象とした。ただし、各地域においては、ACCU 識字教育資料は分析の対象とはならない。

本記事においては、蔵書数は書誌の件数ではなく資料の物理的な点数を示している。冊子体の図書以外の形態の資料も所蔵しているため、単位は「冊」ではなく「点」で統一した。

<アジア研究図書館の蔵書> 河原 弥生 (RASARL 准教授)

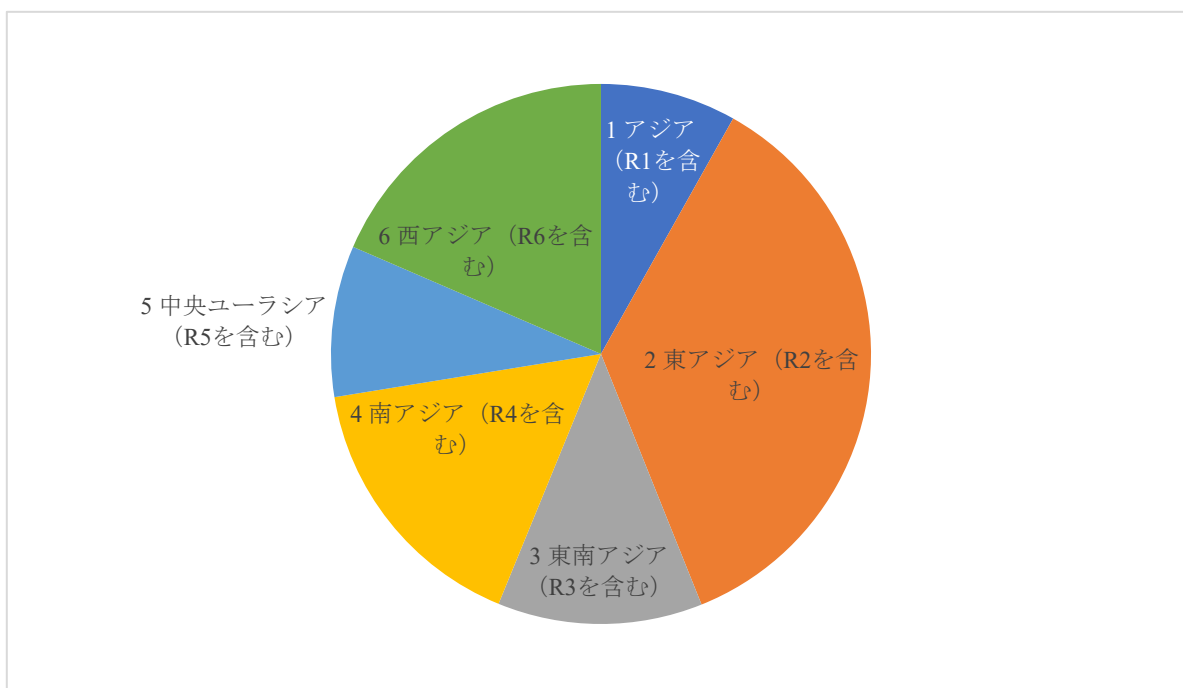
1. 地域別の構成

アジア研究図書館の蔵書のうち、「1 アジア」「2 東アジア」「3 東南アジア」「4 南アジア」「5 中央ユーラシア」「6 西アジア」の地域記号を用いて分類される一般図書は 51,658 点、参考図書は 1,365 点を占める。最も大きな割合を占めている地域は、東アジアであり、一般図書と参考図書を合わせて 18,972 点 (約 35.8%) を所蔵している。次いで、西アジア、南アジア、東南アジアが多いが、どの地域も相当数の蔵書があり、全体としてバランスのとれた構成比となっている。

なお、「はじめに」でも言及したように、アジア研究図書館の全蔵書数は、これら一般図書、参考図書、TRCCS 資料 (781 点)、ACCU 識字教育資料 (3,487 点) を合わせた 57,291 点である。

(表 1) 地域別の構成

一般図書の地域	点数	参考図書の地域	点数	小計	割合 (%)
1 アジア	4,288	R1 参考図書・アジア	30	4,318	8.1
2 東アジア	18,569	R2 参考図書・東アジア	403	18,972	35.8
3 東南アジア	6,266	R3 参考図書・東南アジア	239	6,505	12.3
4 南アジア	8,306	R4 参考図書・南アジア	310	8,616	16.2
5 中央ユーラシア	4,639	R5 参考図書・中央ユーラシア	158	4,797	9.0
6 西アジア	9,590	R6 参考図書・西アジア	225	9,815	18.5
一般図書の合計	51,658	参考図書の合計	1,365	53,023 (合計)	100.0



2. 言語別の構成

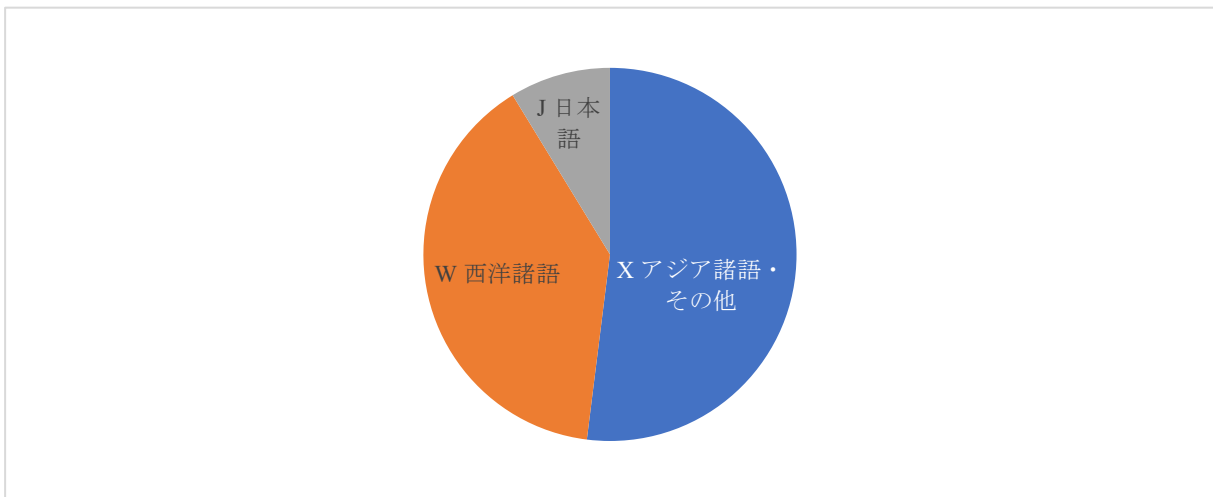
一般図書と参考図書では言語の分類体系が異なるため、個々に分析する。

一般図書については、「はじめに」で述べた通り、地域によって言語分類の細分方法が異なる。そのため、ここでは「J 日本語」「W 西洋諸語」「X アジア諸語・その他」の基本分類に従って点数と割合を示した（「漢」として別個に分類される漢籍も便宜的に「X アジア諸語・その他」

(表 2-1) 一般図書の言語別の構成

言語	点数	割合 (%)
X アジア諸語・その他	26,851	52.0
W 西洋諸語	20,296	39.3
J 日本語	4,511	8.7
合計	51,658	100.0

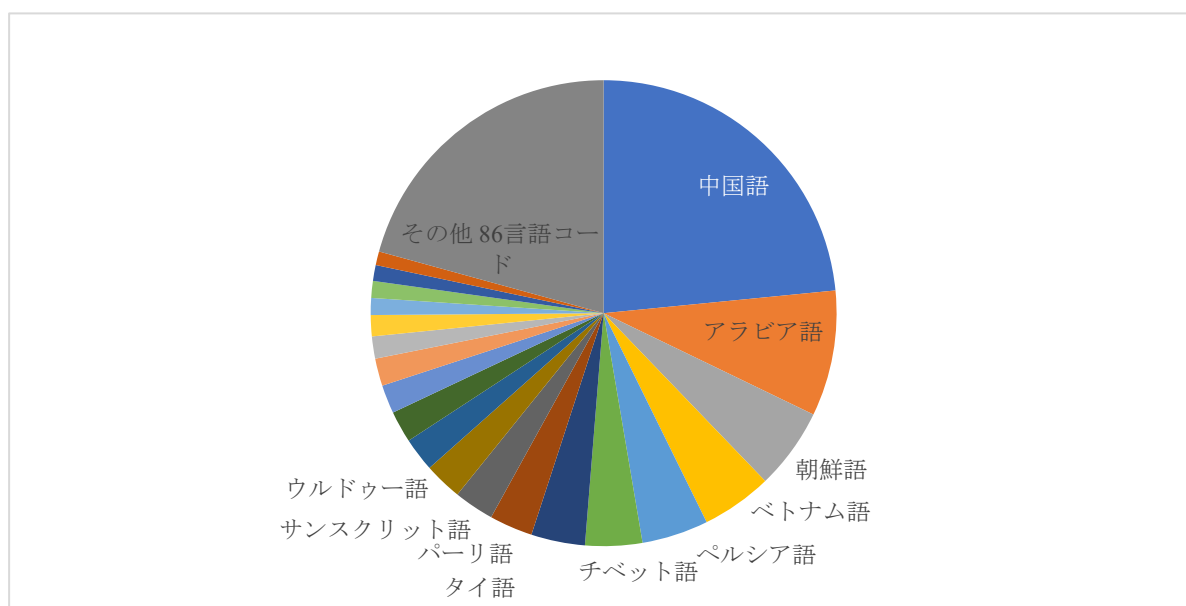
に含んで集計している)。全 51,658 点のうち、「X アジア諸語・その他」(26,851 点)が半分以上を、「W 西洋諸語」(20,296 点)が 4 割弱を占め、「J 日本語」(4,511 点)は 1 割に満たない。表には示されていないが、「X アジア諸語・その他」の中では中国語の 13,216 点(約 49.2%)が最も多く、2位の朝鮮語 4,241 点(約 15.8%)とともに大きな割合を占めている。次いでベトナム語 1,640 点(約 6.1%)、アラビア語 1,626 点(約 6.0%)、ペルシア語 1,553 点(約 5.8%)、タイ語 1,024 点(約 3.8%)が多い。ベトナム語については「桜井由躬雄文庫」と「古田元夫文庫」の受入が、タイ語については「末廣昭文庫」の受入が(東南アジアの項にて後述)、アラビア語とペルシア語については移管資料が多数に上ったことが要因として考えられる。「W 西洋諸語」の中では英語(15,511 点、76.4%)が突出している。



参考図書全体(1,365 点)では 106 種類の言語コードが使われている。最も数が多いのは中国語の 320 点(参考図書全体の約 23.4%)である。続いてアジア諸言語が上位 13 位までを占めているが、その背景として、西洋諸語の言語辞典は主な収集対象ではないという事情がある。

(表 2-2) 参考図書と言語別の構成

言語	点数	割合 (%)
中国語	320	23.4
アラビア語	119	8.7
朝鮮語	77	5.6
ベトナム語	67	4.9
ペルシア語	63	4.6
チベット語	54	4.0
タイ語	51	3.7
パーリ語	41	3.0
サンスクリット語	38	2.8
ウルドゥー語	36	2.6
タミル語	32	2.3
ヒンディー語	30	2.2
インドネシア語	27	2.0
英語	26	1.9
ウイグル語	21	1.5
マレー語	20	1.5
モンゴル語	16	1.2
ブラークリット諸語	16	1.2
パンジャーブ語	15	1.1
マラヤーラム語	13	1.0
その他 86 言語コード	283	20.7
合計 106 言語コード	1,365	100.0



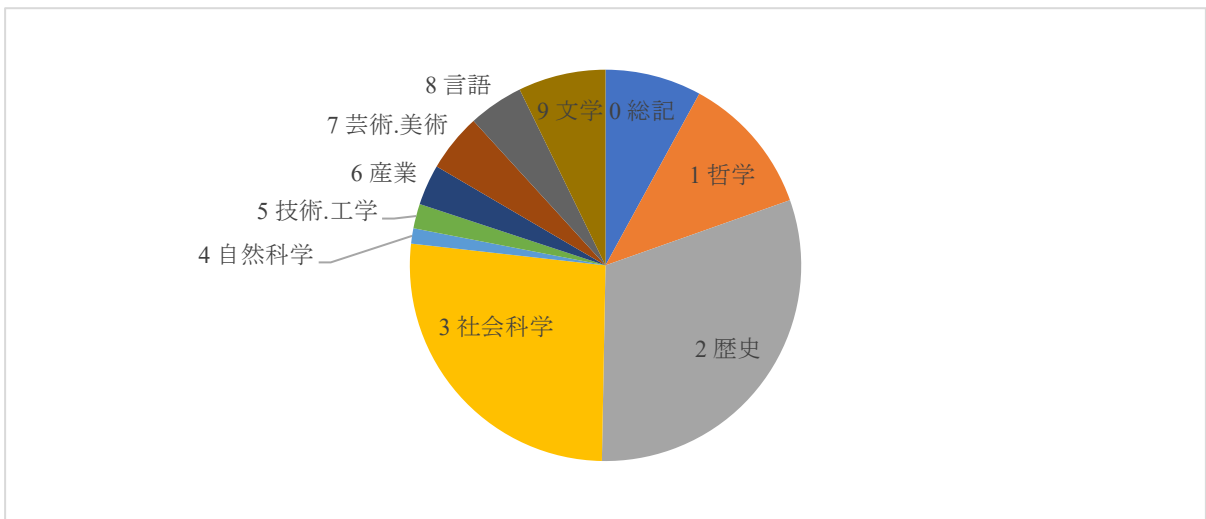
3. 主題別の構成

ここでは一般図書 51,658 点のうち、主題分類がなされない「1-01 アジア・世界」の平凡社東洋文庫 907 点、「2 東アジア」の漢籍 36 点、および「3 東南アジア」の漢籍 53 点は分析の対象外とし、主題によって分類される 50,662 点を分析する。

最多の分野は「2 歴史」(15,542 点、約 30.7%) である。そのなかでは、歴史(11,887 点)だけでなく、地理・地誌・紀行(2,224 点)、伝記(1,431 点)も充実している。「3 社会科学」(13,446 点、約 26.5%) も多く、政治(3,707 点)、経済(2,511 点)、法律(2,389 点)を筆頭に幅広い分野の資料を揃えている。この傾向は、6 で述べるように、人文社会系研究科・文学部、東洋文化研究所、社会科学研究所から多くの資料が移管されたことに起因している。次の「1 哲学」のなかでは、イスラーム(1,138 点)や仏教(1,038 点)などの宗教研究、東洋思想(982 点)の数が多い。「0 総記」には書誌目録や百科事典、全集などが多く収められている。このほか、全体に占める「6 産業」分野の割合は高くはないが、そのなかの農業(1079 点)の資料数が多いのは特徴的である。反面、「4 自然科学」や「5 技術・工学」などの理工系の資料は少ない。

(表 3) 主題別の構成

主題	点数	割合 (%)
0 総記	4,030	8.0
1 哲学	5,888	11.6
2 歴史	15,542	30.7
3 社会科学	13,446	26.6
4 自然科学	640	1.3
5 技術・工学	1,029	2.0
6 産業	1,700	3.4
7 芸術・美術	2,422	4.8
8 言語	2,305	4.5
9 文学	3,660	7.2
合計	50,662	100.0



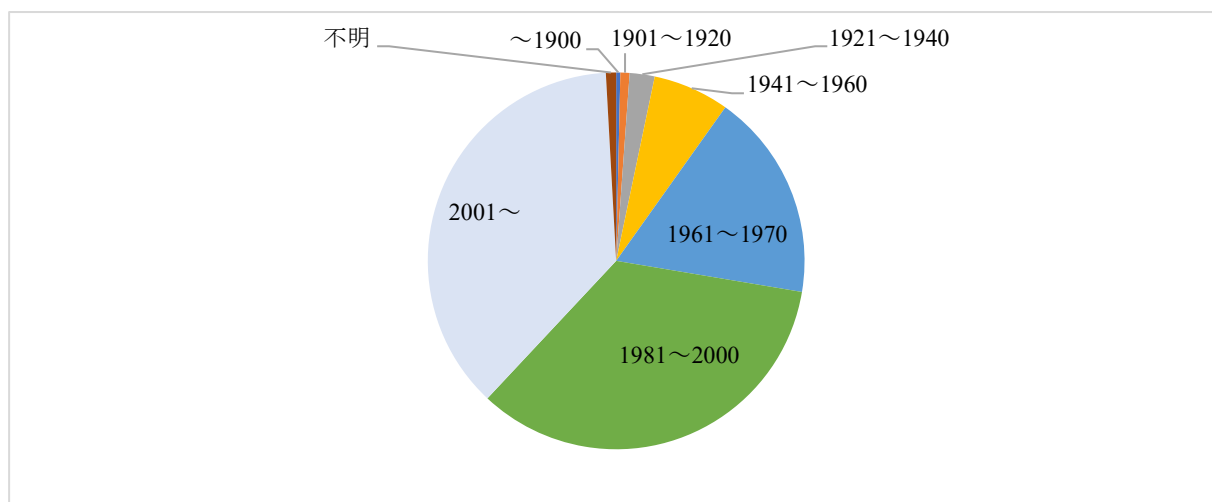
4. 出版年別の構成

蔵書の出版年は 1828 年から 2023 年にまたがるが、新しい資料ほど割合が高い傾向にある。この背景には、部局によっては出版年の新しい資料を優先的にアジア研究図書館への移管の対象としたところもあるほか、6 で後述するように、近年の国際交換

資料や購入資料の数が多いという事情もある。(ここでは、東京大学 OPAC に登録されている一般図書、参考図書、TRCCS 資料を分析の対象とする。)

(表 4) 出版年別の構成

出版年	点数	割合 (%)
～1900	191	0.4
1901～1920	424	0.8
1921～1940	1,154	2.1
1941～1960	3,526	6.6
1961～1970	9,577	17.8
1981～2000	18,474	34.3
2001～	19,987	37.1
不明	471	0.9
合計	53,804	100.0

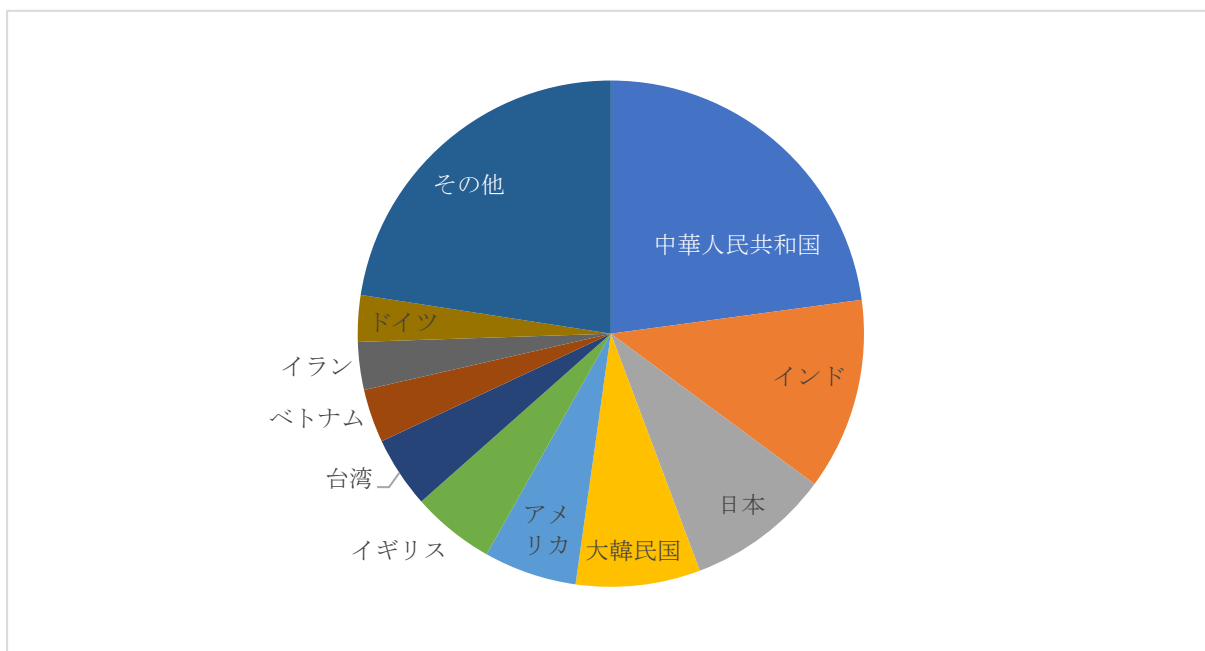


5. 出版国別の構成

出版国別では中華人民共和国の出版物が最も多い。蔵書に占める東アジア資料、とりわけ「2-03 中国」の割合が高いことと(東アジアの項にて後述)、後述するように、中国国家図書館からの定期的な国際交換資料の受入数が多いことが大きく影響している。インド、ベトナム、イランが上位に位置しているのは特徴的であるが、人文社会系研究科・文学部からこれらの地域の資料が多く移管されたことと、これらの地域に関する研究者の旧蔵資料の受入が要因として考えられる。(ここでも東京大学 OPAC に登録されている一般図書、参考図書、TRCCS 資料を分析の対象とする。)

(表5) 出版国別の構成

出版国	点数	割合 (%)
中華人民共和国	12,301	22.9
インド	6,594	12.3
日本	4,932	9.2
大韓民国	4,274	7.9
アメリカ	3,195	5.9
イギリス	2,851	5.3
台湾	2,447	4.5
ベトナム	1,837	3.4
イラン	1,642	3.1
ドイツ	1,598	3.0
その他	12,133	22.5
合計	53,804	100.0



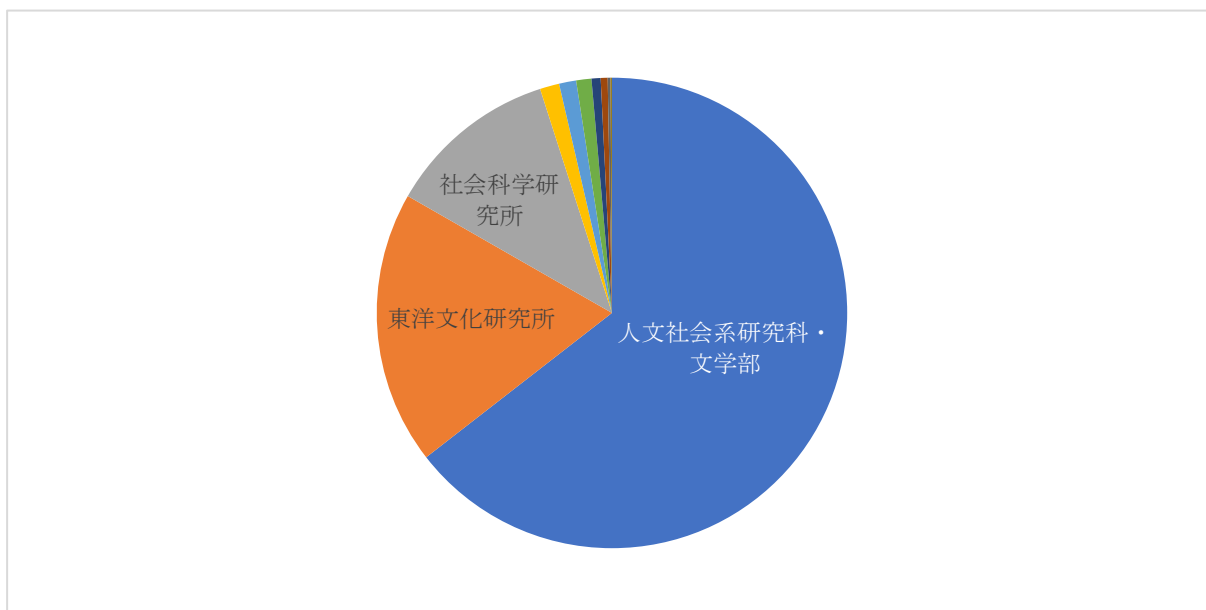
6. 資料の由来別の構成

アジア研究図書館の全蔵書 57,291 点の由来の内訳は、学内からの移管資料が 34,339 点 (約 60.0%)、購入資料が 9,414 点 (約 16.4%)、寄贈資料が 13,538 点 (ACCU 識字教育資料 3,487 点を含む。約 23.6%) である。

移管資料の由来を見ると、人文社会系研究科・文学部からが最多で 22,144 点に上り、移管資料全体の約 64.5% を占めている。これに次ぐ東洋文化研究所の 6,452 点 (約 18.8%) と社会科学研究所の 4,046 点 (約 11.8%) を合わせると、3 部局だけで移管資料の約 95.1% を占める。

(表 6-1) 移管資料の由来別の構成

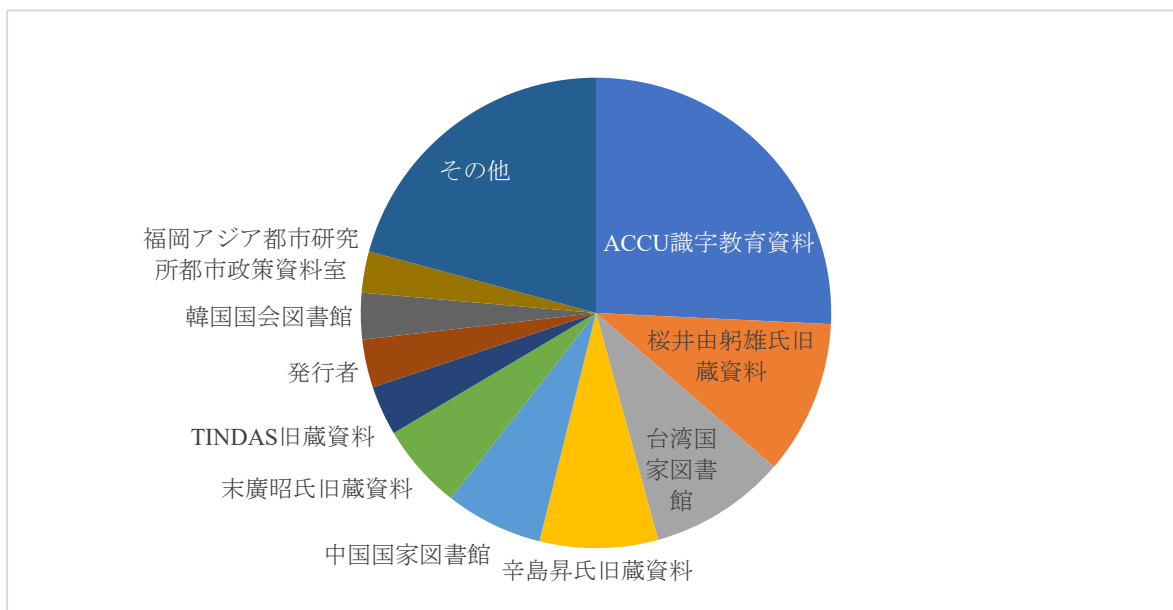
部局名	点数	割合(%)
人文社会系研究科・文学部	22,144	64.5
東洋文化研究所	6,452	18.8
社会科学研究所	4,046	11.8
法学政治学研究科・法学部	457	1.3
経済学研究科・経済学部	403	1.2
史料編纂所	359	1.0
総合文化研究科・教養学部	215	0.6
教育学研究科・教育学部	163	0.5
農学生命科学研究科・農学部	66	0.2
工学系研究科・工学部	32	0.1
情報学環・学際情報学府	2	0.0
合計	34,339	100.0



寄贈資料の由来を見ると、ACCU 識字教育資料が大きな部分を占めるが、「桜井由躬雄文庫」、「辛島昇文庫」、「末廣昭文庫」などの研究者の旧蔵資料の受入が蔵書に大きな影響を及ぼしていることがわかる。また、中国、台湾、韓国からの定期的な国際交換資料の受入も蔵書の重要な一部になっている。台湾国家図書館からは、国際交換以外とは別に毎年 TRCCS 資料としても寄贈を受けている。このほか、TINDAS(人間文化研究機構プロジェクト「南アジア地域研究」東京大学拠点)のような学内プロジェクトの旧蔵資料も受け入れている。

(表 6-2) 寄贈資料の由来別の構成

寄贈元	点数	割合 (%)
ACCU 識字教育資料	3,487	25.8
桜井由躬雄氏旧蔵資料	1,433	10.6
台湾国家図書館 (TRCCS 資料 781 点を含む)	1,273	9.4
辛島昇氏旧蔵資料	1,099	8.1
中国国家図書館	907	6.7
末廣昭氏旧蔵資料	800	5.9
TINDAS 旧蔵資料	461	3.4
発行者	448	3.3
韓国国会図書館	432	3.2
福岡アジア都市研究所都市政策資料室	385	2.8
その他	2,813	20.8
合計	13,538	100.0



全体として、アジア研究図書館の蔵書は主として学内からの移管資料を基盤としているものの、決してそればかりではないことがわかる。今後数年間は各部局図書館から自動書庫への移管が計画的に進められるため、移管資料の数は増加すると見込まれるが、購入や寄贈の受入による資料収集は、今後のアジア研究図書館の蔵書構築のために一層重要な役割を果たすであろう。

<1 アジア> 徳原 靖浩 (U-PARL 特任助教)

1. 地域別の構成

アジア研究図書館分類表における地域(大区分)「1 アジア」は、アジア全体や複数のアジア地域にまたがる主題や、アジアの範疇を超える地域を扱う資料などを含む「1-01 アジア・世界」、日本とアジアの関係やアジアにおける日本研究を扱う「1-02 日本」、地域的な主題を持たない方法論や理論を扱う「1-91 一般・その他」の小区分に分かれる。

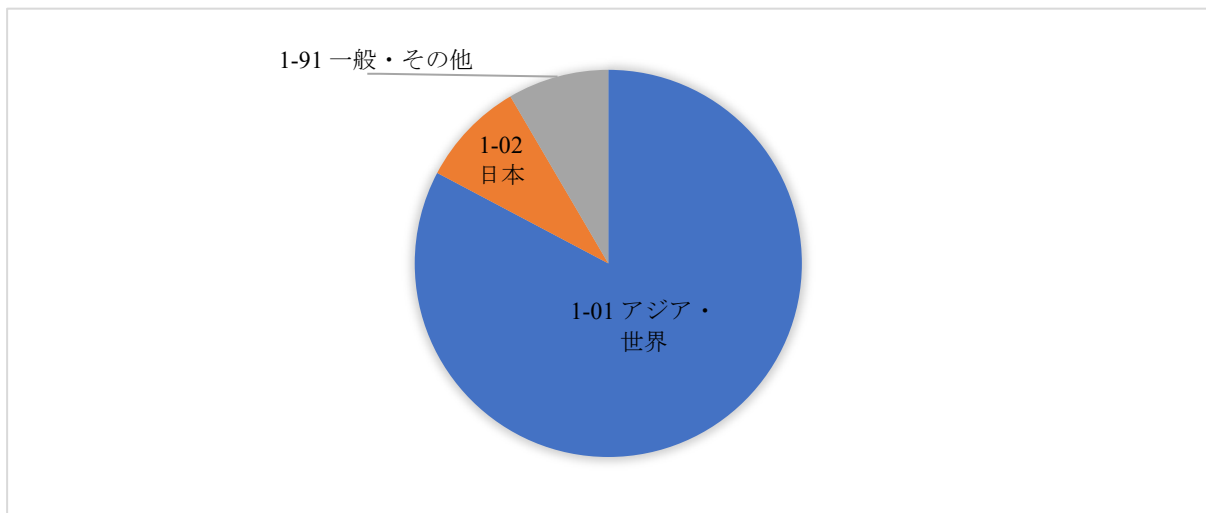
(表1) 地域別の構成

地域(小区分)	点数	割合(%)
1-01 アジア・世界	3,548	82.7
1-02 日本	378	8.8
1-91 一般・その他	362	8.4
合計	4,288	100.0

最も蔵書数が多い小区分は「アジア・世界」3,548点で、大区分の82.7%を占める。この内、日本語図書(言語記号J)は1,458点で、この中には平凡社東洋文庫(907点)が含まれる。西洋諸言語の図書(言語記号W)は1,329点、「アジア諸語・その他」(X)が761点である。Xに含まれる外国語の内、本文言語が中国語のみのものは654点で、約86パーセントを占めている。

「日本」に分類される378点の内、約半数は日本語図書(199点)であり、中国語や韓国語を含むアジアの諸言語やその他の言語(言語記号X)で書かれたものが152点(40.2パーセント)であり、西洋諸言語のものは少ない。

「一般・その他」の中では、アジアの諸言語他が285点と最も多く、78.7パーセントを占める。



2. 言語別の構成

大区分「アジア」全体の言語別構成を見ると、分類記号上は日本語(J)が1,673点で最も多い。その内、上述の東洋文庫を除くと、漢訳大蔵経の日本語訳『國譯一切經』が246点と大部を占める。西洋諸言語(W)は1,417点であり、その内1,250点(約88パーセント)は英語で書かれたものである。「アジア諸語他」(X)1,198点の内1,014点は中国語資料である。

(表 2-1) 一般図書の言語別の構成

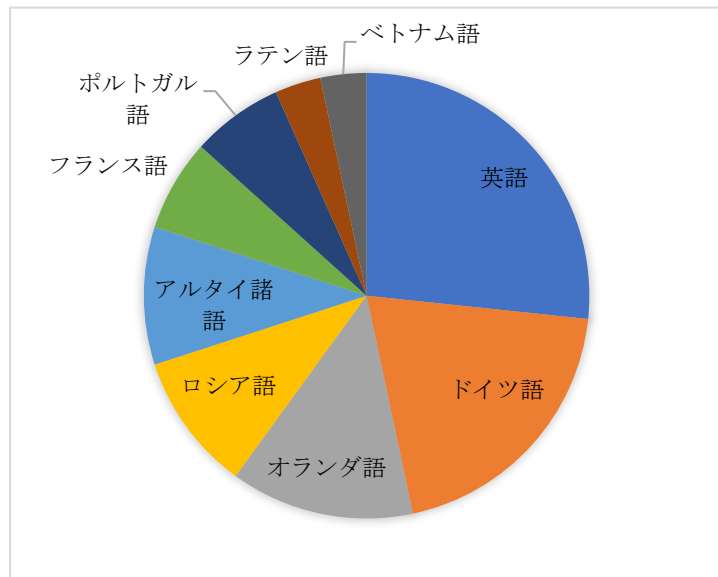
言語記号	点数	割合 (%)
J 日本語	1,673	39.0
W 西洋諸言語	1,417	33.0
X アジア諸語・その他	1,198	27.9
合計	4,288	100.0



参考図書 (R 1) は 30 点であり、ここには基本的にアジアの諸言語でない辞書が収められるため、殆どが西洋諸言語である。その内、日本で出版されたものが 23 点であり、日本語と西洋言語との辞書である。

(表 2-2) 参考図書の言語別の構成

言語	点数	割合 (%)
英語	8	26.7
ドイツ語	6	20.0
オランダ語	4	13.3
ロシア語	3	10.0
アルタイ諸語	3	10.0
フランス語	2	6.7
ポルトガル語	2	6.7
ラテン語	1	3.3
ベトナム語	1	3.3
合計	30	100.0

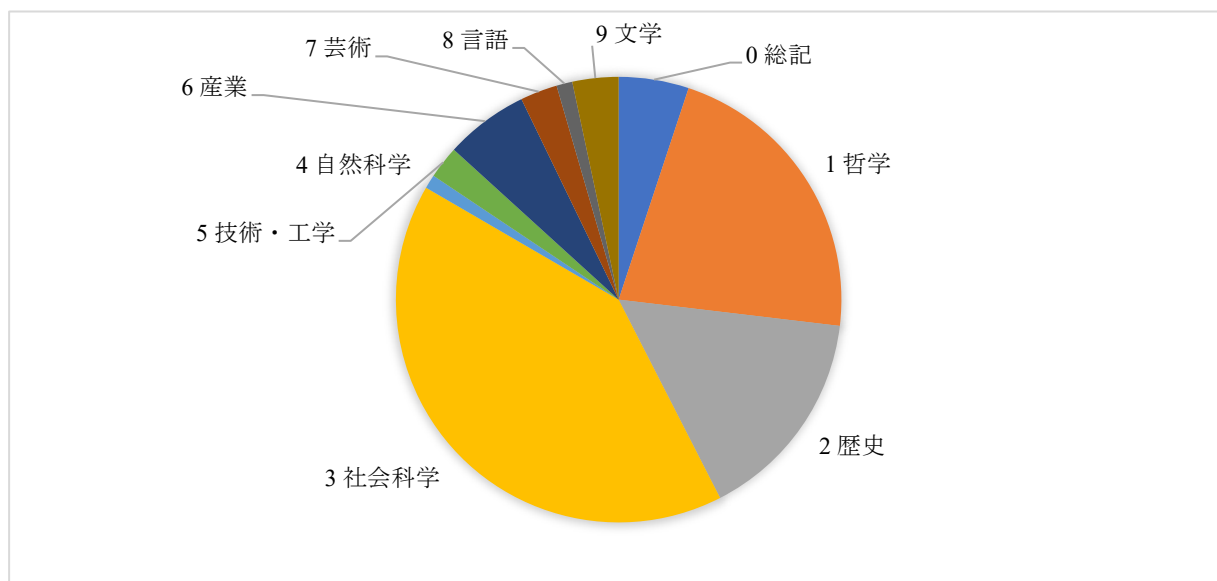


3. 主題別の構成

主題分類で最も多いのは 3 類の社会科学であり、1,383 点 (約 32%) を占める。特に多いのが「330 経済」(424 点) であり、その約半分 (231 点) は英語で書かれたものである。次に多いのは「200 歴史」(357 点) で、「320 法学」(350 点)、「183 経典 (仏教)」(282 点)、「310 政治」(266 点) と続く。「183 経典」は上述の『國譯一切經』を含んでいる。社会科学分野では多国間・地域間比較を行うものが多いため、アジア大区分内でこの分野の比率が高まったと考えられる。これと対照的に、「800 言語」は 39 点と少ない。

(表3) 主題別の構成

主題	点数	割合 (%)
0 総記	172	5.1
1 哲学	737	21.8
2 歴史	527	15.6
3 社会科学	1,383	40.9
4 自然科学	34	1.0
5 技術・工学	80	2.4
6 産業	205	6.1
7 芸術	91	2.7
8 言語	39	1.2
9 文学	113	3.3
合計	3,381	100.0

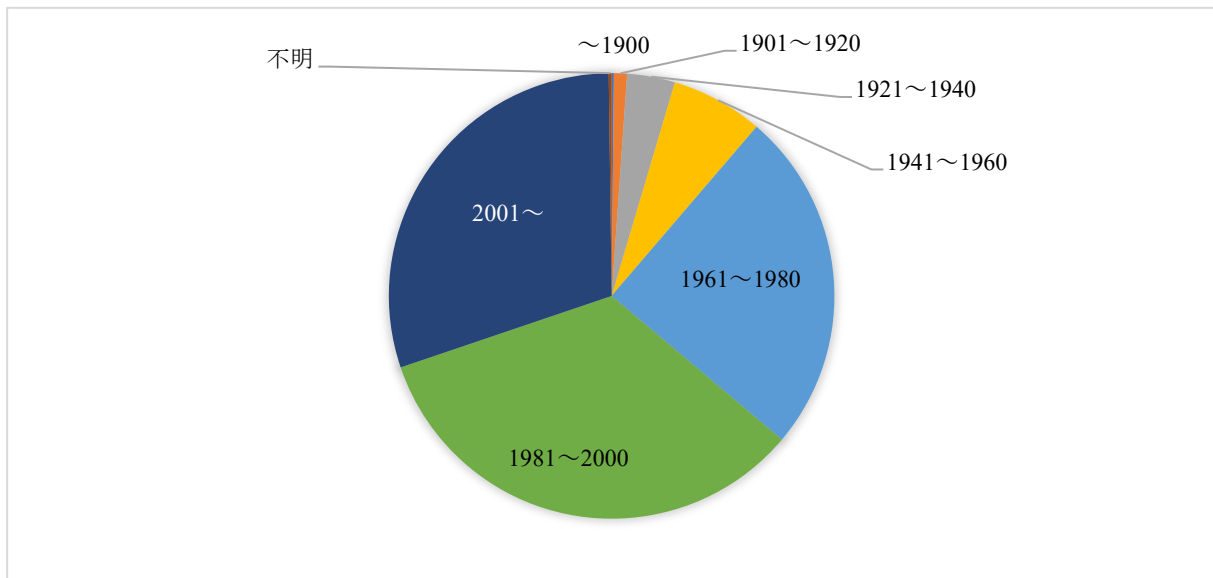


4. 出版年別の構成

出版年別に見てみると、1981年～2000年に出版されたものが1,453点、2001年以降に出版されたものが1,295点であり、合わせて約63%を占める。年毎の点数では2020年が129点と一番多く、上位8位までが1990年代以降である。

(表 4) 出版年別の構成

出版年	点数	割合 (%)
～1900	7	0.2
1901～1920	41	0.9
1921～1940	150	3.5
1941～1960	289	6.7
1961～1980	1,074	24.9
1981～2000	1,453	33.6
2001～	1,295	30.0
不明	9	0.2
合計	4,318	100.0

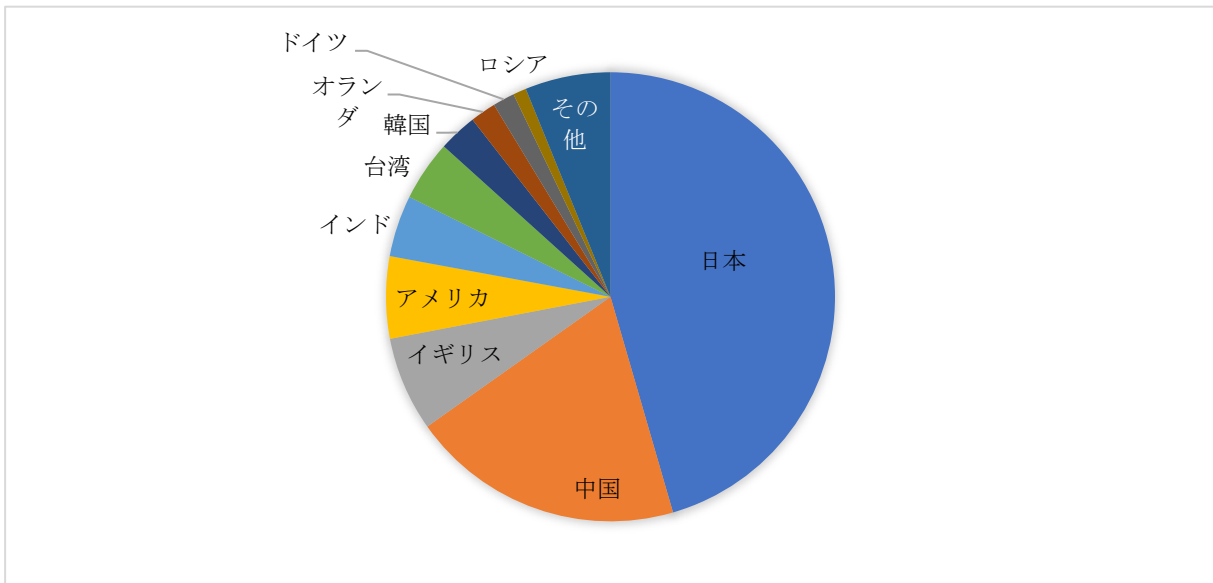


5. 出版国別の構成

出版国別では、日本が圧倒的に多く、1,965 点で 45.5% を占める。ただし、平凡社東洋文庫と『國譯一切經』の分を差し引くと 812 点である。次に中国 (850 点)、イギリス (294 点)、アメリカ (255 点)、インド (191 点)、台湾 (188 点)、韓国 (120 点) と続く。中国で出版された図書には、大部のコレクションは含まれていないが、社会科学研究所から移管された社会科学分野の図書が多く含まれる。5 位のインドで出版された図書には、F. Max Müller 編 *The Sacred Books of the East* シリーズのうち 50 点を一括して「1-01 W」に分類したものが含まれており、個々のタイトルは必ずしも超域的な主題を持つわけではない。

(表 5) 出版国別の構成

出版国	点数	割合 (%)
日本	1,965	45.5
中国	850	19.7
イギリス	294	6.8
アメリカ	255	5.9
インド	191	4.4
台湾	188	4.4
韓国	120	2.8
オランダ	80	1.9
ドイツ	68	1.6
ロシア	41	0.9
その他	266	6.2
合計	4,318	100.0



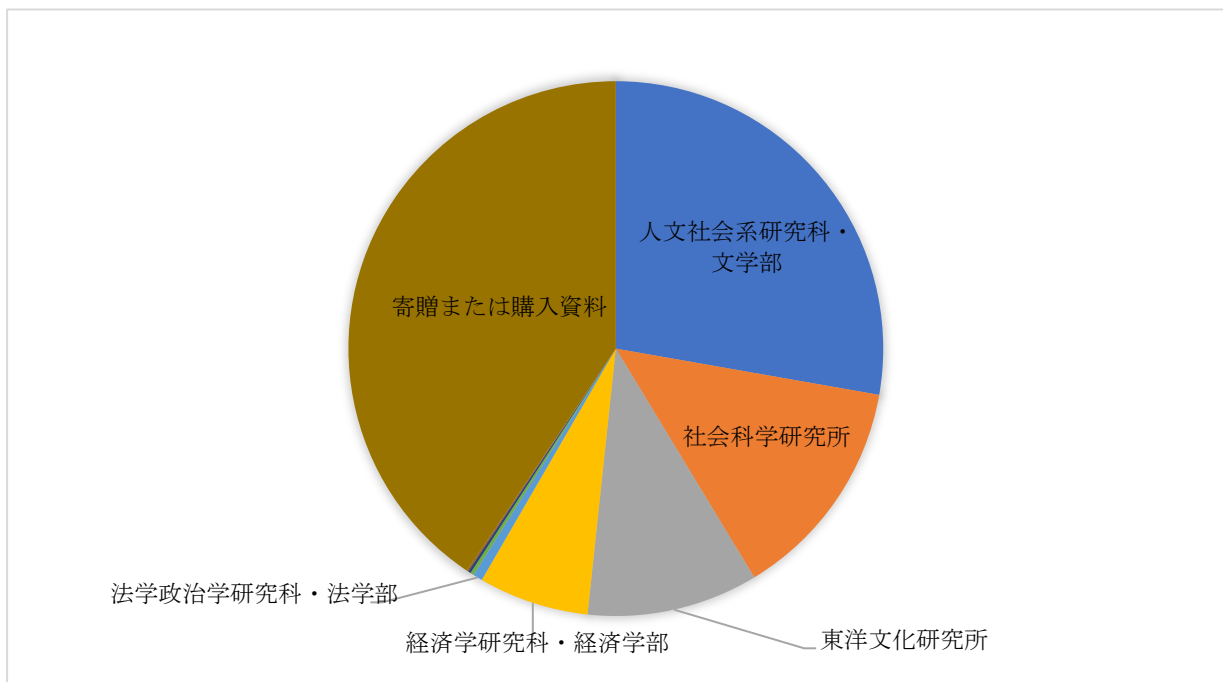
6. 資料の由来別の構成

アジア大区分の図書のうち、部局からの移管資料は 2,565 点である。移管元は、文学部が 1,199 点 (47%) と最も多い。他の地域と異なり、東洋史学、中国思想文化学、考古学、中国語中国文学、イスラム学、インド哲学仏教学、宗教学、国文学、韓国朝鮮文化、美学と幅広い研究室から提供されているのが特徴である。次に多い社会科学研究所からの移管資料 (586 点) の内、約 79% (464 点) が中国語資料であり、約 15% (93 点) が英語資料である。東洋文化研究所からの移管資料は 447 点あり、日本語が

271点と6割を占める。このように、移管元によって言語や主題の比率に違いが見られる。

(表6) 資料由来別の構成

部局	点数	割合 (%)
人文社会系研究科・文学部	1,199	27.8
社会科学研究所	586	13.6
東洋文化研究所	447	10.4
経済学研究科・経済学部	288	6.7
法学政治学研究科・法学部	25	0.6
教育学研究科・教育学部	9	0.2
史料編纂所	7	0.2
工学系研究科・工学部	3	0.1
農学生命科学研究科・農学部	1	0.0
寄贈または購入資料	1,753	40.6
総計	4,318	100.0

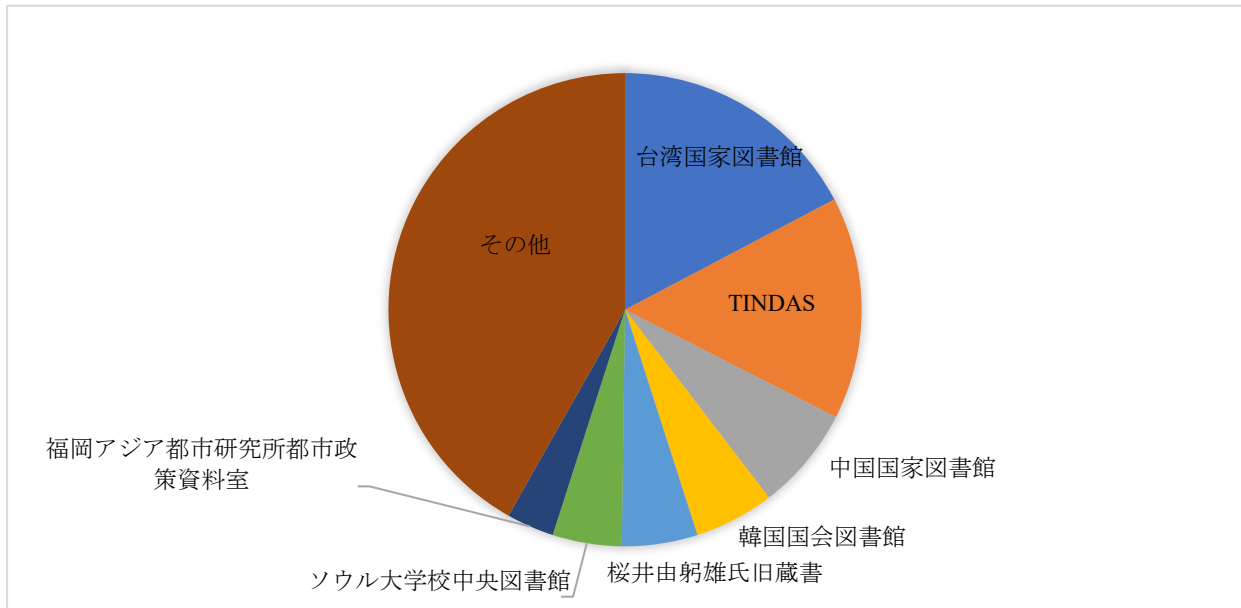


「寄贈または購入資料」に分類される資料には、平凡社東洋文庫が含まれており、906点を占める。その殆どは総合図書館内からアジア研究図書館に配置換えされたものである。また、寄贈資料には、部局から通常の移管とは別のルートで寄贈された、実質上の移管資料が109点含まれている。

これらを除く純粋な寄贈資料の主な寄贈元は、台湾国家図書館、人間文化研究機構現代インド地域研究プログラム東京大学拠点(TINDAS)、中国国家図書館、韓国国会図書館、桜井由躬雄氏旧蔵書などである。

(表 6-2) 寄贈資料の主な寄贈元

寄贈元	点数	割合 (%)
台湾国家図書館	117	17.3
TINDAS	103	15.2
中国国家図書館	48	7.1
韓国国会図書館	37	5.5
桜井由躬雄氏旧蔵書	35	5.2
ソウル大学校中央図書館	32	4.7
福岡アジア都市研究所都市政策資料室	22	3.2
その他	283	41.8
合計	677	100.0



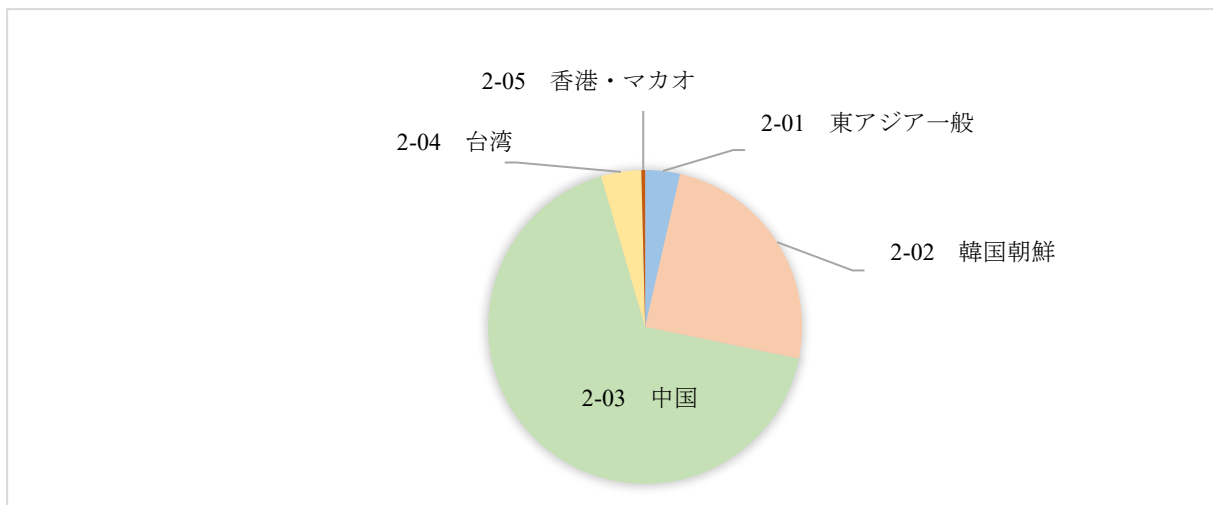
<2 東アジア> 板橋 暁子 (RASARL 助教)

1. 地域別の構成

東アジアは、韓国朝鮮、中国、台湾、香港・マカオに関する資料を対象とする。資料の7割近くを「2-03 中国」が占めるが、「2-02 韓国朝鮮」も2割以上を占める。

(表1) 地域別の構成

地域	点数	割合 (%)
2-01 東アジア一般	665	3.6
2-02 韓国朝鮮	4,582	24.7
2-0 中国	12,480	67.2
2-04 台湾	769	4.1
2-05 香港・マカオ	73	0.4
総計	18,569	100.0



2. 言語別の構成

東アジア地域は、人口の膨大さや面積の広大さに比して、一般の刊行物で使用される書記言語がごく少数の言語に集約されているという特徴があり、本項目で扱う東アジア資料も例外ではない。参考図書を除く東アジア資料のうち最も多くを占める言語は、表2-1のとおり「X アジア諸語他」約16,000点であるが、その内訳の圧倒的多数は中国語（約12,000点）・朝鮮語（約4,000点）であり、ほかにベトナム語（4点）および台湾の少数民族言語（2点）がある。なお、本学OPAC上の分類表記に従い、本稿では韓国朝鮮の言語を朝鮮語と呼称する。

(表2-1) 一般図書の言語別の構成

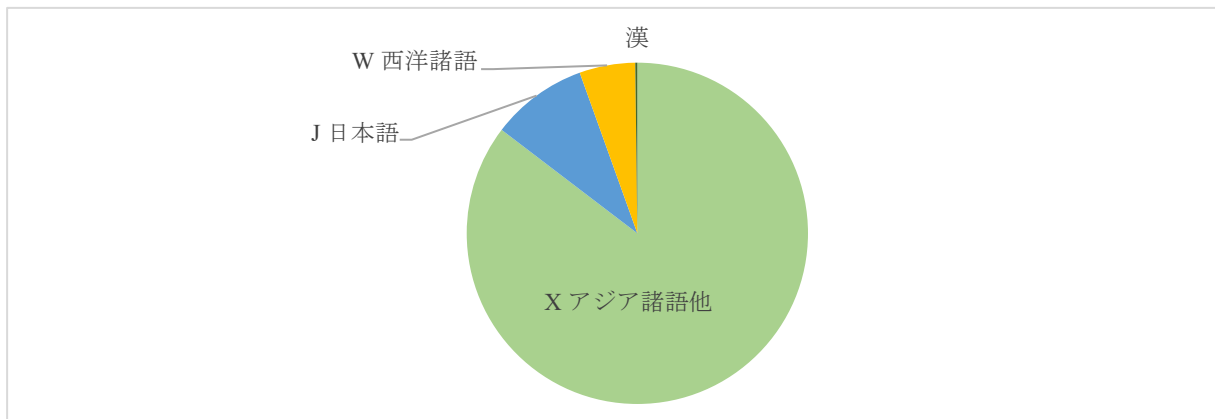
言語	点数	割合 (%)
J 日本語	1,699	9.1
W 西洋諸語	982	5.3
X アジア諸語他	15,852	85.4
漢	36	0.2
合計	18,569	100.0

Xに次ぐのが「J 日本語」約1700点である。最も少ない「W 西洋諸語」982点の内訳は、英語が942点と突出しているが、ドイツ語・フランス語・ラテン語・ロシア語資料も所蔵されている。

また、36点と少数ではあるが、別置記号「漢」が付される漢籍の所蔵もあり、中国語資料とは別にカウントされる。

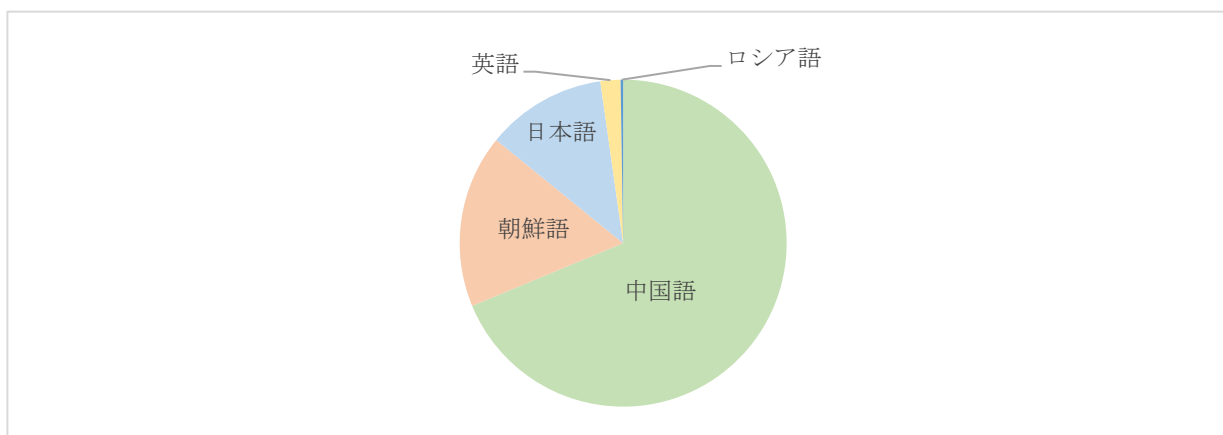
ただし、当館所蔵の漢籍の大部分は TRCCS（台湾漢学リソースセンター）寄贈のものであり、東アジアからは独立したカテゴリであるため、TRCCS 資料としての通し番号を付されるのみで、「漢」とはラベリングされない。

東アジア参考図書の言語は表 2-2 のとおり、中国語が約 7 割、朝鮮語が約 2 割、日本語が約 1 割というように、一般図書と同じく東アジア主要 3 言語のみでほぼ占められている。



(表 2-2) 参考図書の言語別の構成

言語	点数	割合 (%)
中国語	277	68.7
朝鮮語	69	17.1
日本語	48	11.9
英語	8	2.0
ロシア語	1	0.2
合計	403	100.0



3. 主題別の構成

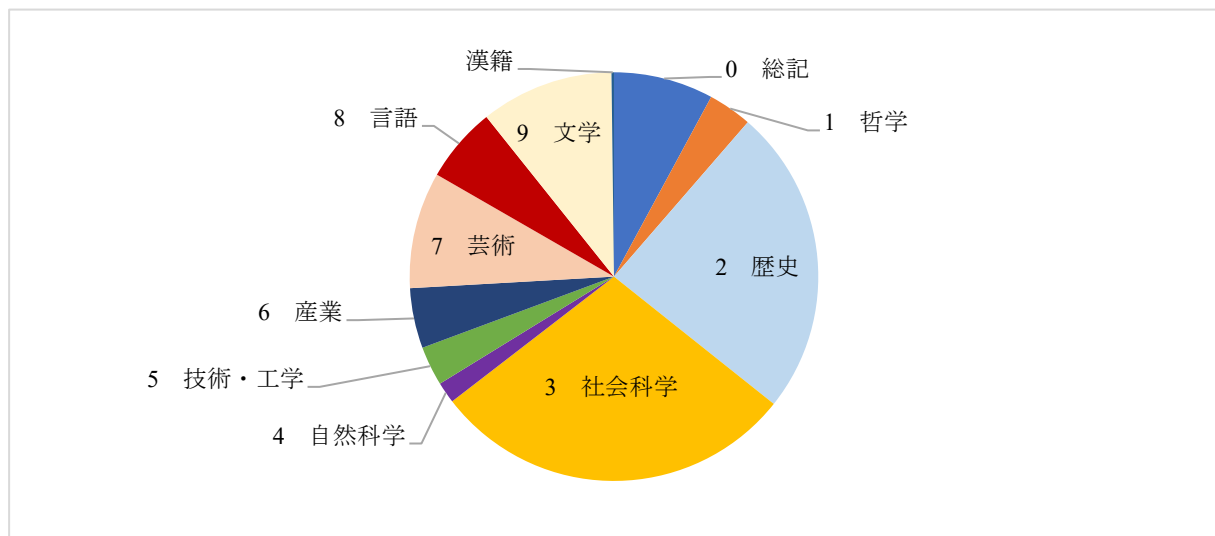
歴史の割合が高いのは他地域と同様の傾向であるが、東アジアでは「3 社会科学」と「2 歴史」の合計が全体の半数以上を占めており、かつ社会科学が歴史を上回っていることが特徴的である。このことは、＜アジア研究図書館全体の蔵書構成＞「6. 資料の由来別の構成」で示されたとおり、当館資料の由来としては人文社会系研究科・文学部、東洋文化研究所、社会科学研究所からの移管が突出して多く、それらの部局では韓国朝鮮と中国語圏に関する社会科学分野の研究の蓄積も大きいことが影響していると考えられる。東アジアの社会科学資料 5,356 点のうち、社会科学研究所からの移管が 2,121 点と最大を占める。

一方、「2 歴史」4,519 点のうち人文社会系研究科・文学部からの移管が 2,791 点と半数以上を占めるが、内訳の筆頭は考古学研究室 1,462 点であり、次点の東洋史学研究室 555 点を大幅に上回る。歴史関連資料の中でも考古学資料が充実しており、その大多数が中国語・朝鮮語資料であることは、当館東アジア資料の特色であるといえる。

表 3 には漢籍（「漢」）が含まれないが、「漢」の主題分類には四部分類を用いる。ただし「経」「史」「子」「集」部より下の細分はおこなわず、通し番号（および必要に応じて年代・巻号記号）のみを付す。

（表 3）主題別の構成

主題	点数	割合 (%)
0 総記	1,466	7.9
1 哲学	645	3.5
2 歴史	4,519	24.4
3 社会科学	5,356	28.9
4 自然科学	311	1.7
5 技術・工学	579	3.1
6 産業	883	4.8
7 芸術	1,712	9.2
8 言語	1,106	6.0
9 文学	1,956	10.6
漢籍	36	0.2
合計	18,569	100.0



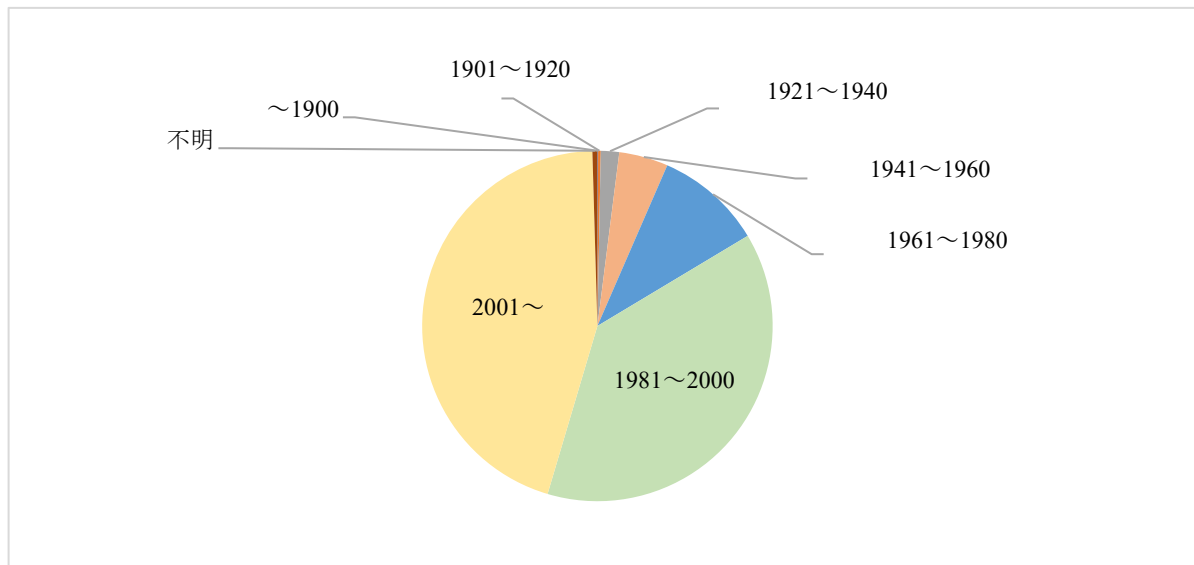
4. 出版年別の構成

2001年以降刊行の資料（以下、近刊と略称）と1981～2000年刊行の資料を合わせて8割以上を占める。ただし、近刊8,528点の内訳は移管4,182点、寄贈3,105点、購入1,241点であり、直近約20年以内の刊行物であってもアジア研究図書館予算（U-PARL・RASARL 予算）で購入した資料の割合がかなり低いのは東アジアの特徴であろう（なお、1981～2000年刊行の資料7,245点の内訳では移管が5,698点を占め、寄贈1,086点・購入461点に比して圧倒的に多い）。

近刊の中で移管資料が多くを占めるのは、移管資料の全体点数がそもそも多く、そのうち東アジアの占める割合が高いためといえるが、寄贈資料が多いのも東アジア特有の事情による（「6. 資料の由来別の構成」で後述）。現在まで継続している中国国家図書館・台湾国家図書館・韓国国会図書館からの寄贈資料（国際交換資料）の大半は寄贈時点から数年以内に刊行された資料であるため、東アジア近刊における寄贈資料の割合も必然的に高くなるといえる。

（表4）出版年別の構成

出版年	点数	割合 (%)
～1900	12	0.1
1901～1920	46	0.2
1921～1940	321	1.7
1941～1960	860	4.5
1961～1980	1,873	9.9
1981～2000	7,245	38.2
2001～	8,528	45.0
不明	87	0.5
合計	18,972	100.0



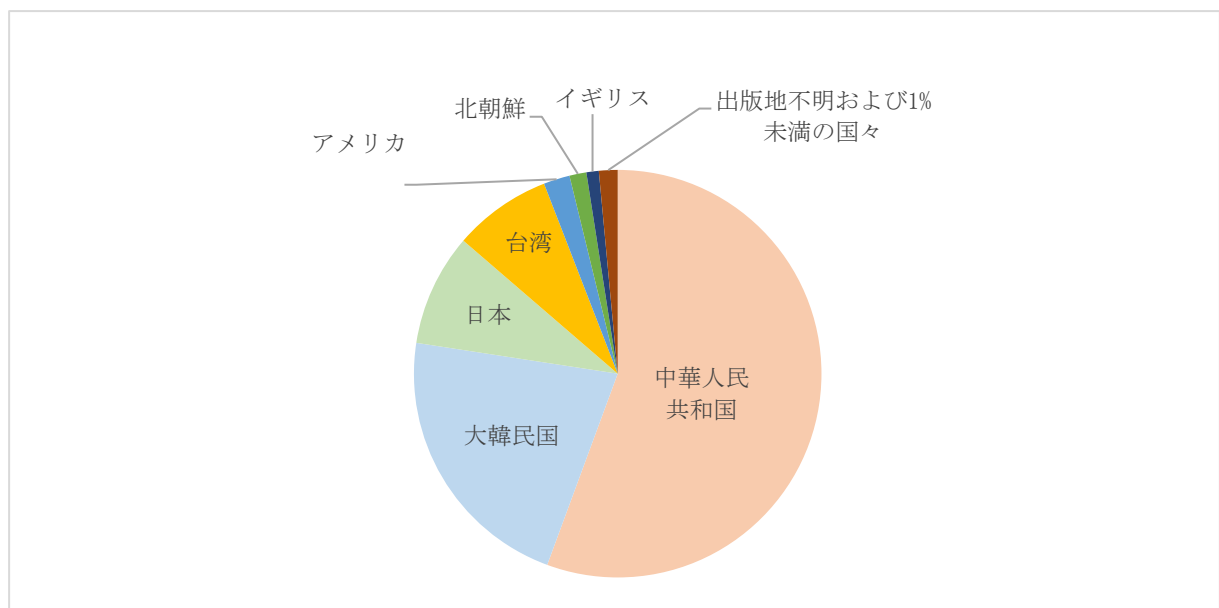
5. 出版国別の構成

中国のみで東アジアの6割近くを占め、韓国が約2割、日本と台湾が1割未満ずつでそれにつづく。朝鮮民主主義人民共和国＝北朝鮮刊行の資料も1%以上（255点）を占めているが、そのうちの47点は日本語資料である（大部分は「外国文出版社」から刊行）。20世紀後半の刊行物ながら、現在では入手が難しいものも多いとみられ貴重である。

なお、「はじめに」の「2. その他の分析基準」で述べられたとおり、「OPAC が依拠している NACSIS-CAT では、出版時期にかかわらず最新の出版国コードが登録されるため、現存しない国家の単位で資料を分析することはできない」。ゆえに、表・グラフ中の「中華人民共和国」の資料は、共和国成立前にあたる 1949 年以前の刊行物も含めて、中国大陸で刊行された資料であることを示す。ただし、この場合の中国大陸には、1997 年／1999 年の返還前後を問わず香港／マカオで刊行された資料も原則として含まれる。同様に「台湾」は、日本統治時代・中華民国復帰後など 1949 年以前の刊行物も含めて、台湾域内で刊行された資料であることを示す。「大韓民国」「北朝鮮」は、大韓帝国時代・日本統治時代・独立後など 1948 年両国成立以前の刊行物も含めて、大韓民国域内・朝鮮民主主義人民共和国域内で刊行された資料であることを示す（ただし現状、「北朝鮮」資料で 1948 年より前の刊行物は当館に所蔵されていない）。

(表 5) 出版国別の点数

出版国	点数	割合 (%)
中華人民共和国	10,553	55.6
大韓民国	4,135	21.8
日本	1,689	8.9
台湾	1,478	7.8
アメリカ	395	2.1
北朝鮮	255	1.3
イギリス	186	1.0
出版地不明および 1%未満の国々	281	1.5
合計	18,972	100.0



6. 資料の由来別の構成

東アジア資料の由来は、移管資料が 14,417 点（約 76.0%）、購入資料が 1,716 点（約 9.0%）、寄贈資料が 2,839 点（約 15.0%）である。

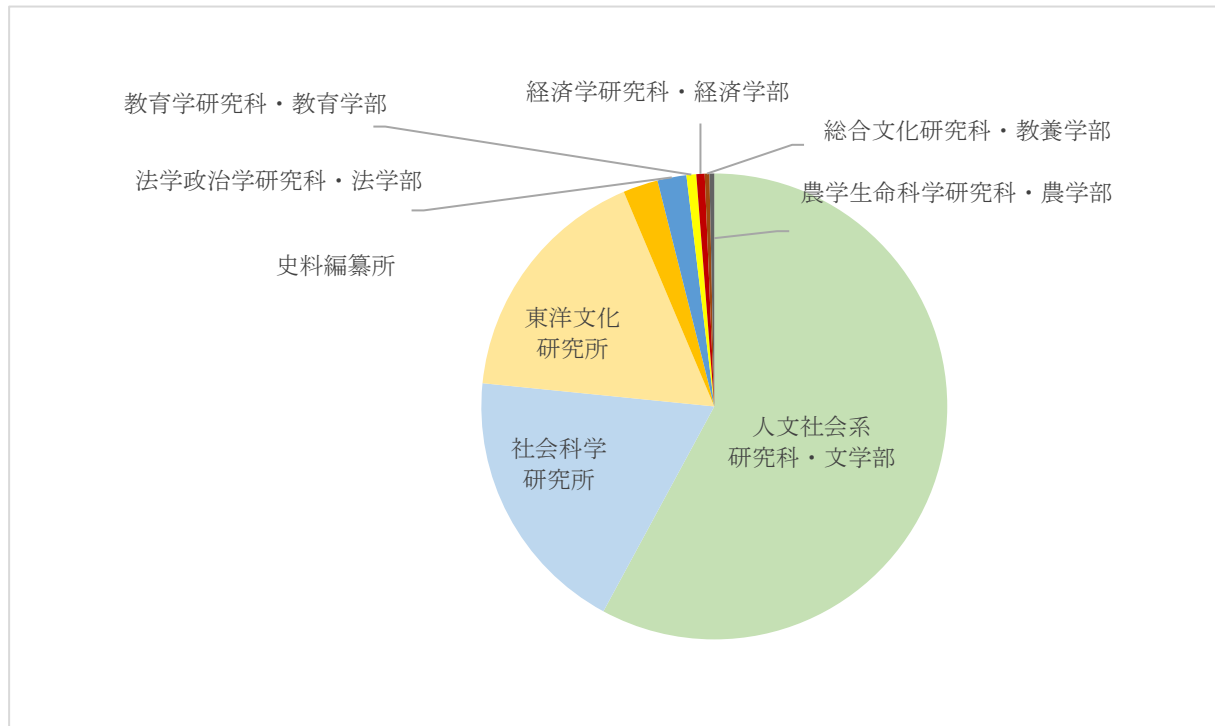
他地域と同様に東アジアも、移管元部局の中では人文社会系研究科・文学部が最多を占め、社会科学研究所・東洋文化研究所がそれに次ぐ。他方、史料編纂所から当館に移管された資料 359 点のうち 350 点を東アジアが所蔵していることは、他地域に

はない特色の一である。

また、寄贈資料が購入資料を大幅に上回るのも、東アジア固有の傾向であるといえる。個人や研究機関からの寄贈資料は東アジア以外の各地域においても不定期に発生するが、日本の国会図書館に相当する外国の主要図書館から定期的に大規模な寄贈がおこなわれるのは東アジアのみであることが、この数値の背景にある。当館は年に数回、①中国国家図書館・②韓国国会図書館・③台湾国家図書館から国際交換資料として寄贈を受けており、そのうちの大半は東アジア資料として所蔵され、累計では①834点、②393点、③366点にのぼる。これら以外の寄贈資料の中では、発行者（出版元）からの寄贈が334点、生越直樹氏からの寄贈が322点、福岡アジア都市研究所都市政策資料室からの寄贈が145点にのぼり、その他多くの本学教員・元教員ならびに学外の個人・諸機関より寄贈資料を受領している。

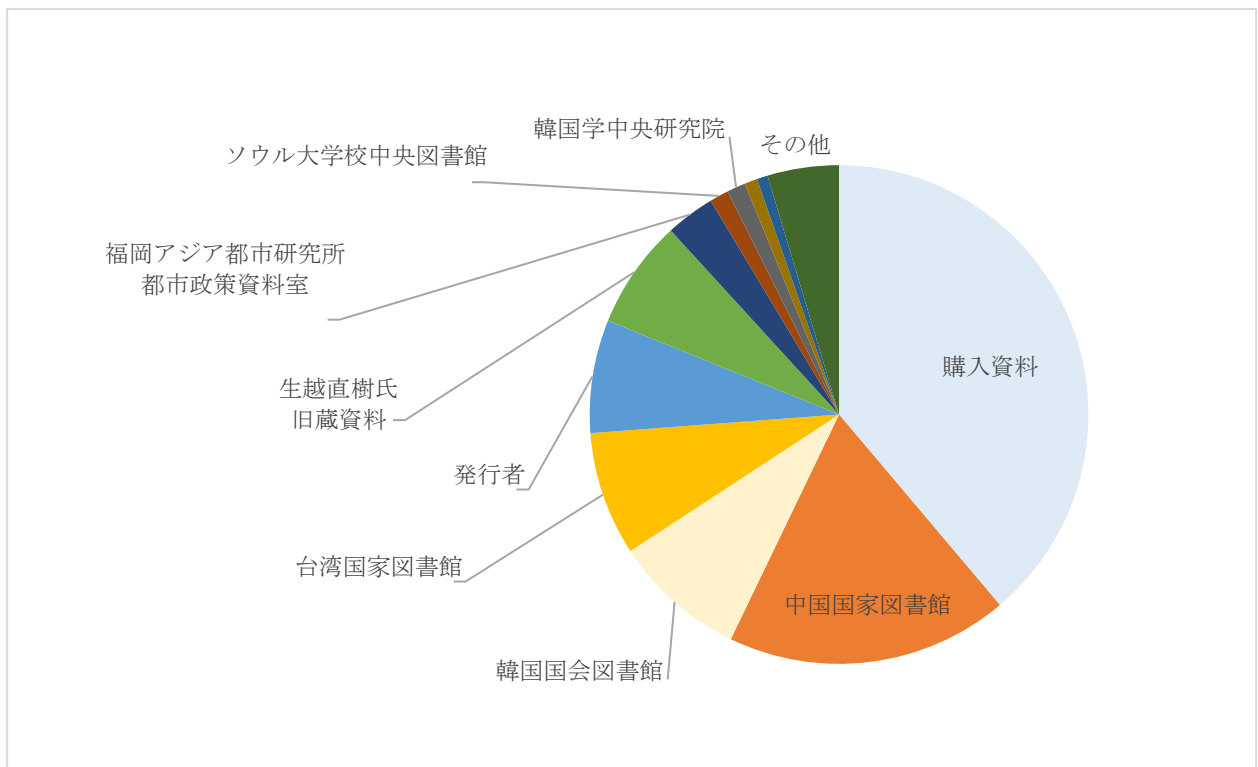
(表 6-1) 移管資料の由来別の構成

移管資料の由来（部局等）	点数	割合（％）
人文社会系研究科・文学部	8,347	44.0
社会科学研究所	2,695	14.2
東洋文化研究所	2,459	13.0
史料編纂所	350	1.8
法学政治学研究科・法学部	290	1.5
教育学研究科・教育学部	98	0.5
経済学研究科・経済学部	83	0.4
総合文化研究科・教養学部	47	0.2
農学生命科学研究科・農学部	46	0.2
工学系研究科・工学部	1	0.0
情報学環・学際情報学府	1	0.0
合計	14,417	100.0



(表 6-2) 購入・寄贈の別

購入・寄贈の別	総点数		割合 (%)	
購入資料	1,769		38.8	
寄贈資料	2,786	寄贈資料の内訳	点数	
		中国国家図書館	834	18.3
		韓国国会図書館	393	8.6
		台湾国家図書館	366	8.0
		発行者	334	7.3
		生越直樹氏旧蔵資料	322	7.1
		福岡アジア都市研究所 都市政策資料室	145	3.2
		ソウル大学校中央図書館	56	1.2
		韓国学中央研究院	55	1.2
		桜井由躬雄氏旧蔵資料	38	0.8
		龍泉寺図書館	32	0.7
		その他	211	4.6
合計	4,555		100.0	



<3 東南アジア> 澁谷 由紀 (U-PARL 特任研究員)

1. 地域別の構成

東南アジア地域の小区分は原則として現存の国民国家単位に基づいている（「3-03 ベトナム」「3-04 カンボジア」「3-05 ラオス」「3-06 タイ」「3-07 ミャンマー」「3-09 シンガポール」「3-10 マレーシア」「3-11 ブルネイ」「3-12 インドネシア」「3-13 東ティモール」「3-14 フィリピン」）。この他に現存の国民国家単位に基づかない小区分として、「3-01 東南アジア一般」のほか、「3-02 インドシナ一般」および「3-08 マレー一般」という二つの歴史圏が中間区分として存在する。さらに、ポリネシア、メラネシア、ミクロネシア、すなわち第二次世界大戦以降に一般化した「東南アジア」概念に含まれない地域の資料を収めるための小区分として「3-91 東南アジア その他」がある。

分析対象の全資料点数6,505点のうち、「3-01 東南アジア一般」から「3-91 東南アジア その他」の小区分に分類されて

いる資料（いわゆる一般図書）が6,266点（約96.3%）、「R 3」（東南アジア地域に関するいわゆる参考図書）が329点（約3.7%）を占める。前者の内訳を（表1）に示す。

（表1）から、各小区分に分類された資料数の割合を見ると、「3-03 ベトナム」（1,982点、約31.6%）および「3-06 タイ」（1,422点、約22.7%）が突出し、次に「3-12 インドネシア」（699点、約11.2%）、「3-01 東南アジア一般」（537点、約8.6%）、「3-14 フィリピン」（420点、約6.7%）が続く。「3-03 ベトナム」の多さは「桜井由躬雄文庫」と「古田元夫文庫」の受入が、「3-06 タイ」の多さは「末廣昭文庫」の受入が要因である。「3-12 インドネシア」については一般的に研究者数が多いことやローマ字表記出版物の購入および新規書誌の作成の容易さが背景に、「3-14 フィリピン」についてもローマ字表記出版物の多さの点で購入および新規書誌が容易であることが背景にあるだろう。

一方、「3-04 カンボジア」（165点、約2.6%）、「3-05 ラオス」（75点、約1.2%）、「3-07 ミャンマー」（257点、約4.1%）、「3-09 シンガポール」（110点、約1.8%）、「3-10 マレーシア」（213点、約3.4%）、「3-11 ブルネイ」（15点、約0.2%）、「3-13 東ティモール」（31点、約0.5%）についてはそれぞれ300点を下回る資料点数しか所蔵されていない。これらの諸地域を主題とする資料については記述言語が何であるか、

（表 1）地域別の構成

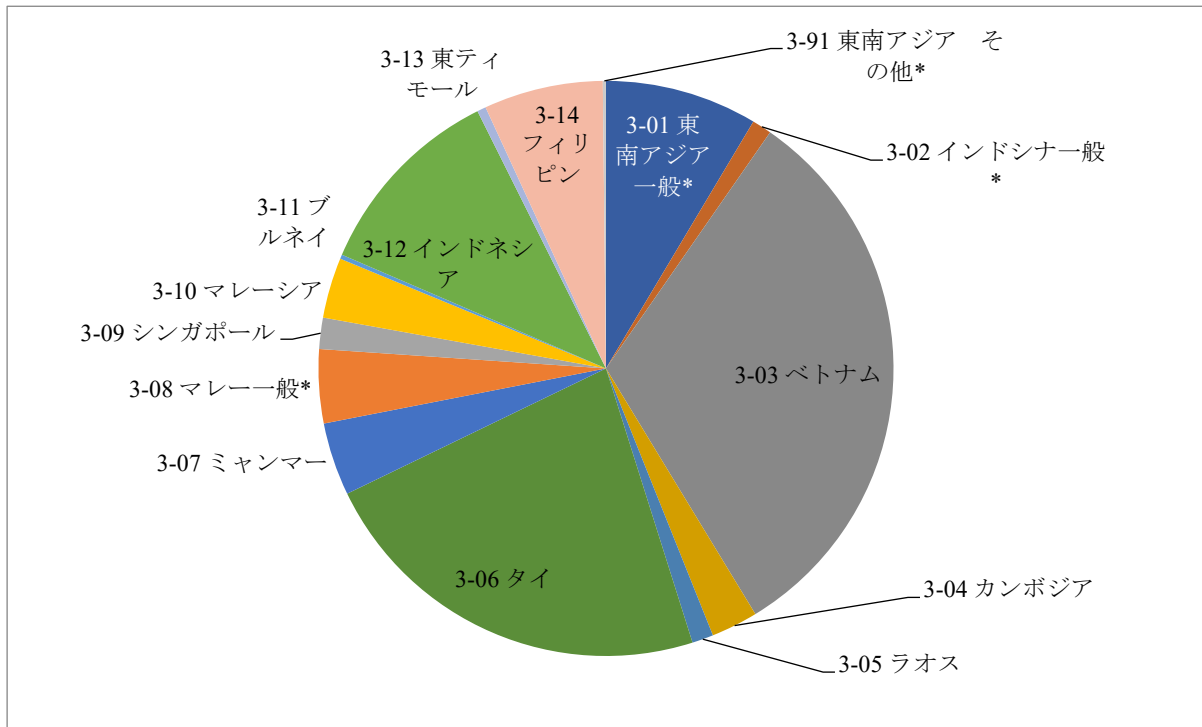
地域（小区分）	点数	割合（%）
3-01 東南アジア一般*	537	8.6
3-02 インドシナ一般*	69	1.1
3-03 ベトナム	1,982	31.6
3-04 カンボジア	165	2.6
3-05 ラオス	75	1.2
3-06 タイ	1,422	22.7
3-07 ミャンマー	257	4.1
3-08 マレー一般*	260	4.1
3-09 シンガポール	110	1.8
3-10 マレーシア	213	3.4
3-11 ブルネイ	15	0.2
3-12 インドネシア	699	11.2
3-13 東ティモール	31	0.5
3-14 フィリピン	420	6.7
3-91 東南アジア その他*	11	0.2
総計	6,266	100.0

注：

*は現存の国民国家単位に基づかない小区分

出版国がどの国であるかに関わらず収集に力を入れているが、いまだコレクションの蓄積は不十分である。

現存の国民国家単位に基づかない小区分については、「3-01 東南アジア一般」は537点（約8.6%）と存在感がある。一方、「3-02 インドシナ一般」および「3-08 マレー一般」に区分される資料はそれぞれ69点、260点と多くない（それぞれ約1.1%および約4.1%）。「3-91 東南アジア その他」は11点（約0.2%）と極めて少数である。

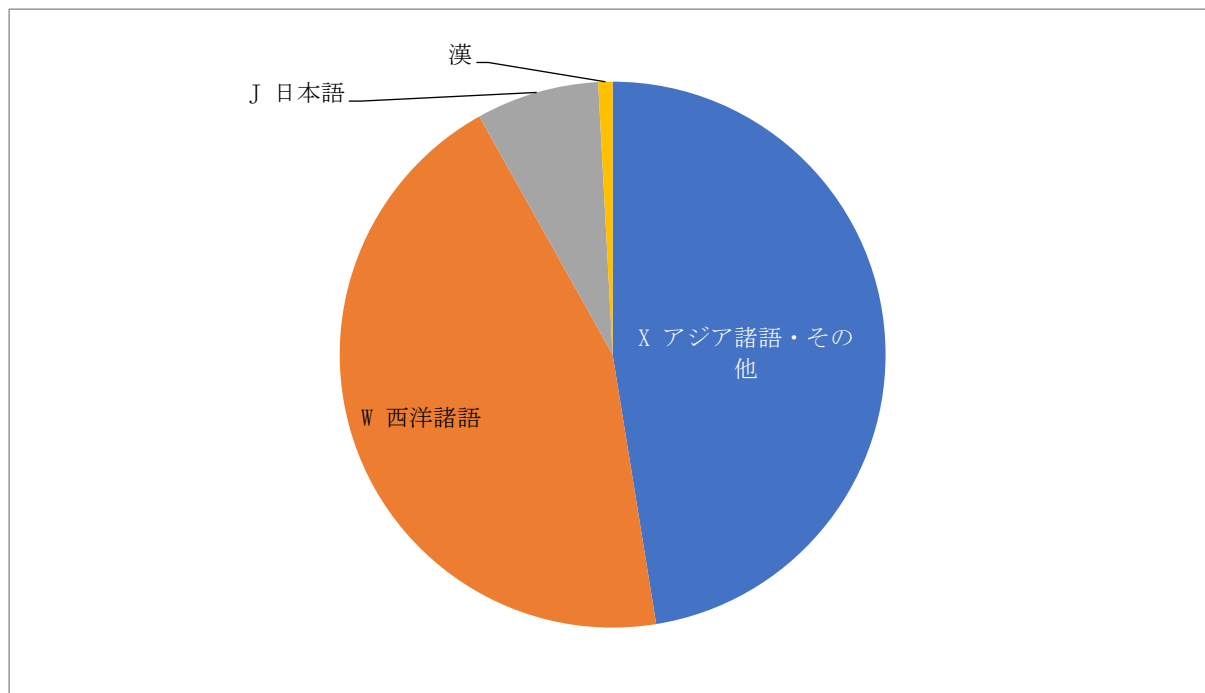


2. 言語別の構成

アジア研究図書館の言語分類別にみると、およそ半数の2,973点（約47.4%）がX（アジア諸語・その他）、4割強の2,784点（約44.4%）がW（西洋諸語）、1割弱の456点（約7.3%）がJ（日本語）という構成である。これらの分類のほか、漢（漢籍）に分類される資料が53点（約0.8%）ある（表2-1）。東南アジアに設定された言語分類はこれらの4種類のみだが、東南アジア地域では多様な言語が使用されていることから、詳細な言語別構成については（表2-3）で詳述する。

（表 2-1）一般図書の言語別の構成

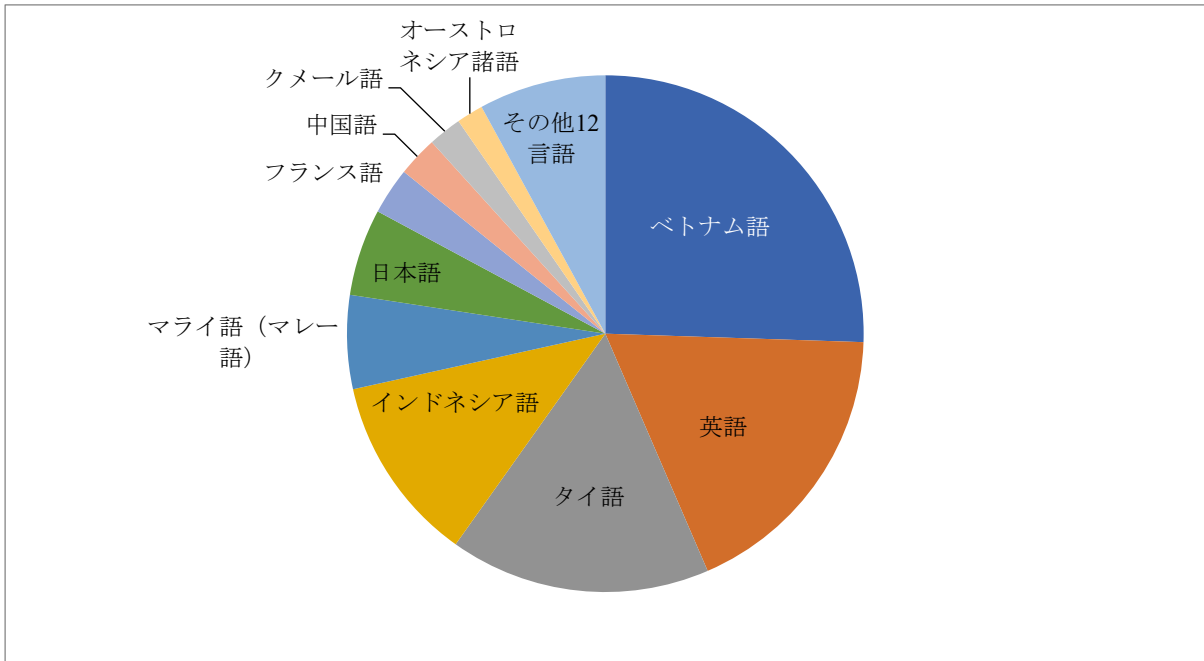
言語分類	点数	割合 (%)
X アジア諸語・その他	2,973	47.4
W 西洋諸語	2,784	44.4
J 日本語	456	7.3
漢	53	0.8
合計	6,266	100.0



合計で 239 点ある参考図書は 22 言語にわたるが、その中ではベトナム語（61 点、約 25.5%）、英語（43 点、約 18.0%）、タイ語（39 点、約 16.3%）、インドネシア語（28 点、約 11.7%）、マライ語（マレー語、14 点、約 5.9%）、日本語（13 点、約 5.4%）が多い（表 2-2）。ただし参考図書については 2 言語以上で記述されている資料が多いことに留意すべきである。

（表 2-2）参考図書の言語別の構成

言語	点数	割合
ベトナム語	61	25.5
英語	43	18.0
タイ語	39	16.3
インドネシア語	28	11.7
マライ語（マレー語）	14	5.9
日本語	13	5.4
フランス語	7	2.9
中国語	6	2.5
クメール語	5	2.1
オーストロネシア諸語	4	1.7
その他 12 言語	19	7.9
合計	239	100.0



詳細な言語別構成を（表2-3）に示す（分析対象は一般図書に参考図書を加えた6,505点）。

W（西洋諸語）の中では、英語資料が突出して多い（2,690点、蔵書全体の約41.4%）。英語資料の多さの背景には、代表的な国際共通語であり多くの研究書の記述言語である、東南アジアの一部の地域では英語が教育言語として用いられたり事実上の国語として用いられたりしている、東南アジアの一部の地域がかつてイギリスの植民地であった、といった事情が想定される。フランス語、オランダ語等、植民地期の宗主国の国語で記述された資料はそれぞれ100点以下（1%前後）と極めて低率である。この要因の一つとして、後述するように、分析対象資料のうち1940年までに刊行された資料が大変少ないことが挙げられる。

X（アジア諸語・その他）の資料では、「桜井由躬雄文庫」（分析対象資料のうち1,355点）と「古田元夫文庫」（同258点）の受入が行われたベトナム語資料が1,684点、「末廣昭文庫」（同800点）の受入が行われたタイ語資料が1,063点と突出して多く（それぞれ蔵書全体の約25.9%、約16.3%）、東南アジア島嶼部の伝統的国際共通語としての性格を持ち現在はローマ字で記述されるインドネシア語（244点、約3.8%）およびマライ語（マレー語、57点、約0.9%）が続く。

インド系文字を用いる言語によって記述された資料については、担当特任専門職員が在籍しているタイ語資料を除きごく少数にとどまる。その中でもカンボジアの公用語であるクメール語は比較的多いが（41点、蔵書全体の約0.6%）、ラオスの公用語であるラオ語（ラオス語）は13点（約0.2%）に過ぎず、ミャンマーの公用語であるビルマ語（ミャンマー語）は0点である。インド系文字を用いる言語については選書や新規書誌の作成に多大な労力を要するため、「各地域の土着言語の資料をアジア研究図書館単館でどの程度カバーすべきか」というのは難しい問題である。しかしながら現在

の所蔵数はタイ語を除けばきわめて少なく、大陸部の一部地域に関しては、アジア研究図書館は研究基盤としての役割を果たせていない。

J（日本語）の少なさについて、物理的に同じ建物にある総合図書館に日本語資料が多く蓄積されていることを考えれば、この偏りを是正すべきかどうかは議論が必要であろう。

(表 2-3) 言語別の構成

言語	点数	割合 (%)	言語分類	点数	割合 (%)			
日本語	474	7.3	J 日本語	474	7.3			
英語	2,690	41.4	W 西洋諸語	2,840	43.7			
フランス語	92	1.4						
オランダ語	37	0.6						
ロシア語	10	0.2						
ドイツ語	5	0.1						
スペイン語	4	0.1						
ポルトガル語	2	0.0						
ベトナム語	1,684	25.9				X アジア諸語・その他	3,190	49.0
タイ語	1,063	16.3						
インドネシア語	244	3.8						
マライ語（マレー語）	57	0.9						
中国語	48	0.7						
クメール語	41	0.6						
ジャワ語	18	0.3						
ラオ語	13	0.2						
タガログ語	5	0.1						
オーストロネシア諸語	4	0.1						
チャム語	4	0.1						
アチュー語	1	0.0						
アラビア語	1	0.0						
エスペラント語	1	0.0						
ササク語	1	0.0						
バタク語	1	0.0						
フィリピン語	1	0.0						
マカッサル語	1	0.0						
ミンカバウ語	1	0.0						
朝鮮語	1	0.0						
多言語	1	0.0	—	1	0.0			
合計	6,505	100.0	合計	6,505	100.0			

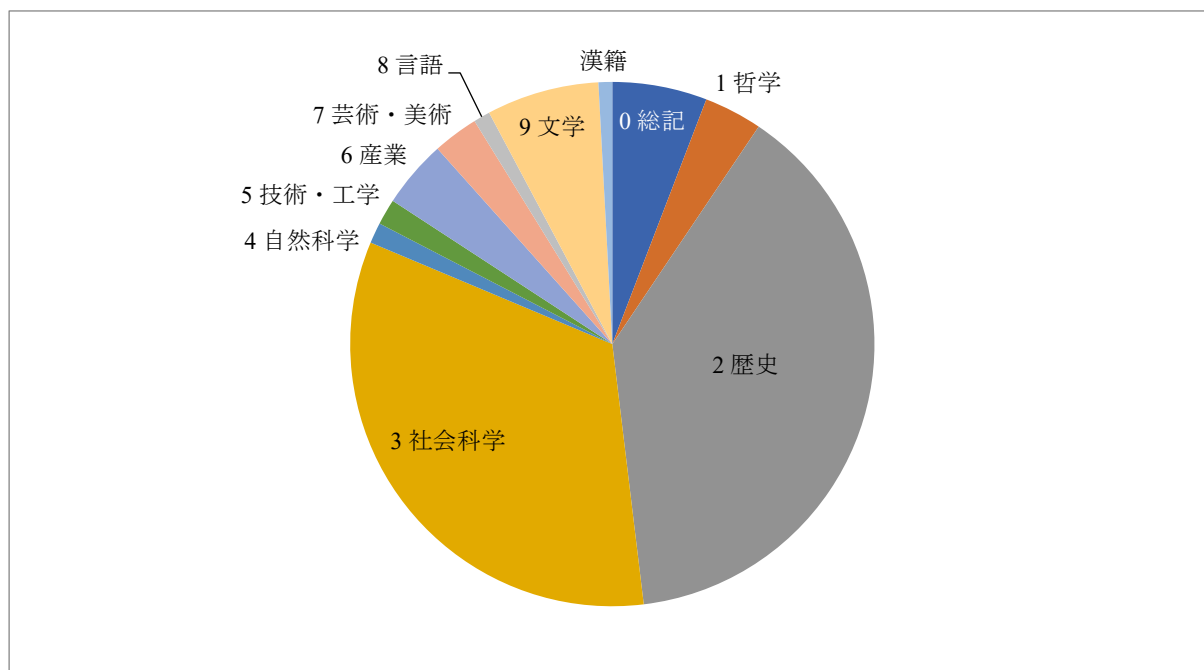
3. 主題別の構成

概要を（表3）に示した。主題分類別では、「2 歴史」が2,422点（約38.7%）と最多であり、次に多いのが「3 社会科学」の2,083点（約33.2%）である。人文社会科学分野の中でも「1 哲学」は225点（約3.6%）と数が限られる。

一方、「4 自然科学」「5 技術・工学」「6 産業」はあわせて442点（約7.1%）、「9 文学」もほぼ同数（435点、約6.9%）である。

（表 3）主題別の構成

主題分類	点数	割合 (%)
0 総記	366	5.8
1 哲学	225	3.6
2 歴史	2,422	38.7
3 社会科学	2,083	33.2
4 自然科学	80	1.3
5 技術・工学	100	1.6
6 産業	262	4.2
7 芸術・美術	176	2.8
8 言語	64	1.0
9 文学	435	6.9
漢籍	53	0.8
合計	6,266	100.0



4. 出版年別の構成

出版年は1835年～2022年に分散し、出版年不明の資料が37点（約0.6%）ある（表4）。1940年までの出版物は131点（約2.0%）で極めて少量であるのに対し、1941年以降の出版物は6,337点（約97.4%）でほぼ全量に近い。タイを除く東南アジア諸地域は欧米諸国によって植民地化された歴史的経験を持つが、この数字は他部局からの移管資料を含めてもなお、前植民地期および植民地期に刊行された資料の点数が極めて限定的であることを示唆する（表には記載していないが、前述の1940年までの出版物131点のうち他部局からの移管資料は53点である）。1945年までの出版物についても186点（約2.9%、うち他部局からの移管資料は95点）にとどまる。

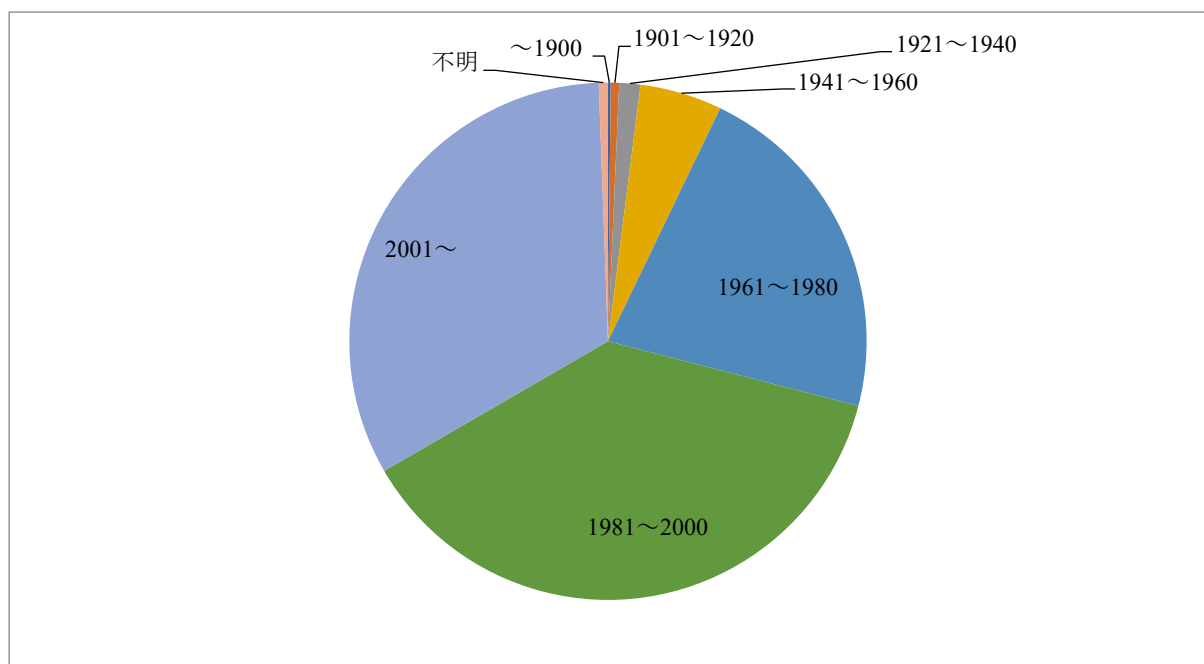
（表4）出版年別の構成

出版年	点数	割合 (%)
～1900	11	0.2
1901～1920	34	0.5
1921～1940	86	1.3
1941～1960	334	5.1
1961～1980	1,423	21.9
1981～2000	2,447	37.6
2001～	2,133	32.8
不明	37	0.6
合計	6,505	100.0

同じく表には記載していないが、1940年～1945年、すなわち東南アジア全体が日本の支配下におかれた時期におおむね相当する間に刊行された出版物は72点で、うち日本および東南アジア域内で刊行された資料は68点、他部局からの移管資料は43点である。

前述の通り全6,505点のうち（日本語）ないし日本で刊行された資料が少ないことも想起すれば、世界各国のアジア研究関係の図書館に対し、本学のアジア研究図書館が差異化できているとは言い難い。

1961年以降資料点数が増加しているが、これは1960年代以降日本の東南アジア研究が興隆したことと共時性を持つ。



5. 出版国別の構成

とくに英語で記述された図書については出版地が複数存在することは珍しくないが、ここではそれぞれの資料について代表的な出版地を一つに限定したうえで示した(表5)。

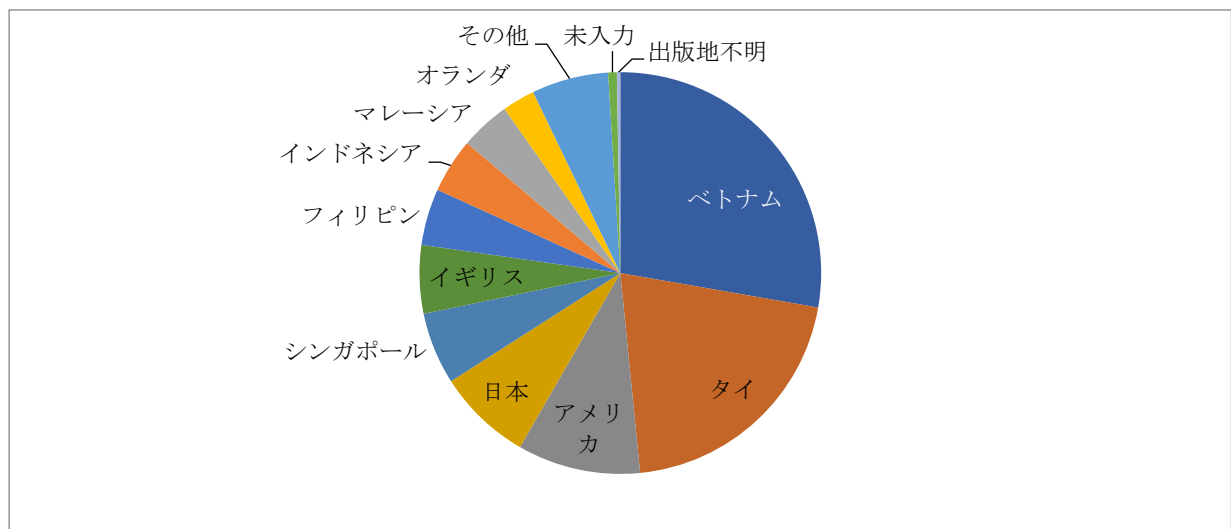
(表5)の元データを分析すると、蔵書の7割弱(4,482点、約68.9%)が東南アジア域内で出版されたものである。前述のように蔵書の4割強(約44.4%)が西洋諸語資料であるにもかかわらず、東南アジア域内で出版された資料の割合が高い。これは東南アジア諸国の一部では西洋諸語(とくに英語)資料の刊行が盛んなことが要因と考えられる。たとえばシンガポールを主題とする資料点数(一般図書および参考図書)は全体の約1.7%(110点)にも関わらずシンガポールで出版された資料が全体の約5.8%(377点)に達することはその推測の正しさを裏付ける。ベトナム、タイ(それぞれ1,805点、1,345点)の割合の高さ(それぞれ約27.7%、約20.7%)は寄贈文庫の存在に起因する。

オセアニア、アメリカ(ここではアメリカ合衆国およびカナダ)、ヨーロッパで出版された資料はそれぞれ38点(約0.6%)、648点(約10.0%)、670点(約10.3%)である。複数出版地の問題を考慮すれば、オセアニア、アメリカ(アメリカ合衆国およびカナダ)、ヨーロッパで流通している研究書の収集はある程度達成できていると考えられる。

一方、コレクションの蓄積が薄いのは日本で出版された資料であり、496点と全体の約7.6%を占めるに過ぎない。

(表5) 出版国別の構成

出版国	点数	割合(%)
ベトナム	1,805	27.7
タイ	1,345	20.7
アメリカ	644	9.9
日本	496	7.6
シンガポール	377	5.8
イギリス	358	5.5
フィリピン	296	4.6
インドネシア	286	4.4
マレーシア	262	4.0
オランダ	171	2.6
その他	402	6.2
未入力	45	0.7
出版地不明	18	0.3
合計	6,505	100.0



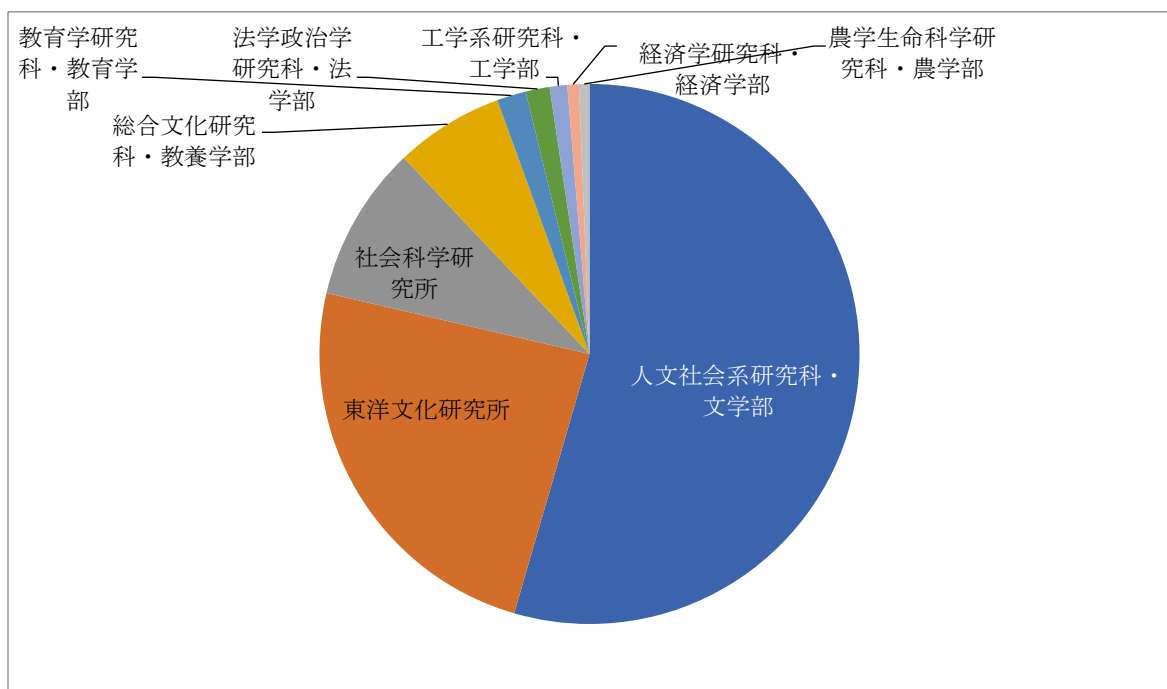
6. 資料の由来別の構成

東南アジア資料の由来は、移管資料が 2,578 点（約 39.6%）、購入資料が 1,301 点（約 20.0%）、寄贈資料が 2,626 点（約 40.4%）である。寄贈資料の割合が高いこと、移管資料-購入資料-寄贈資料の 3 種のバランスが程よくとれていることが東南アジアの特徴である。

(表 6-1) 移管資料の由来別の構成

部局名	冊数	割合 (%)
人文社会系研究科・文学部	1,405	54.5
東洋文化研究所	622	24.1
社会科学研究所	240	9.3
総合文化研究科・教養学部	168	6.5
教育学研究科・教育学部	45	1.7
法学政治学研究科・法学部	37	1.4
工学系研究科・工学部	27	1.0
経済学研究科・経済学部	18	0.7
農学生命科学研究科・農学部	16	0.6
合計	2,578	100.0

移管資料の概要を（表6-1）に示した。移管元部局の中で資料点数が最大であるのは人文社会系研究科・文学部で1,405点（約54.5%）が移管された。東洋文化研究所からは622点（約24.1%）、社会科学研究所からは240点（約9.3%）移管された。

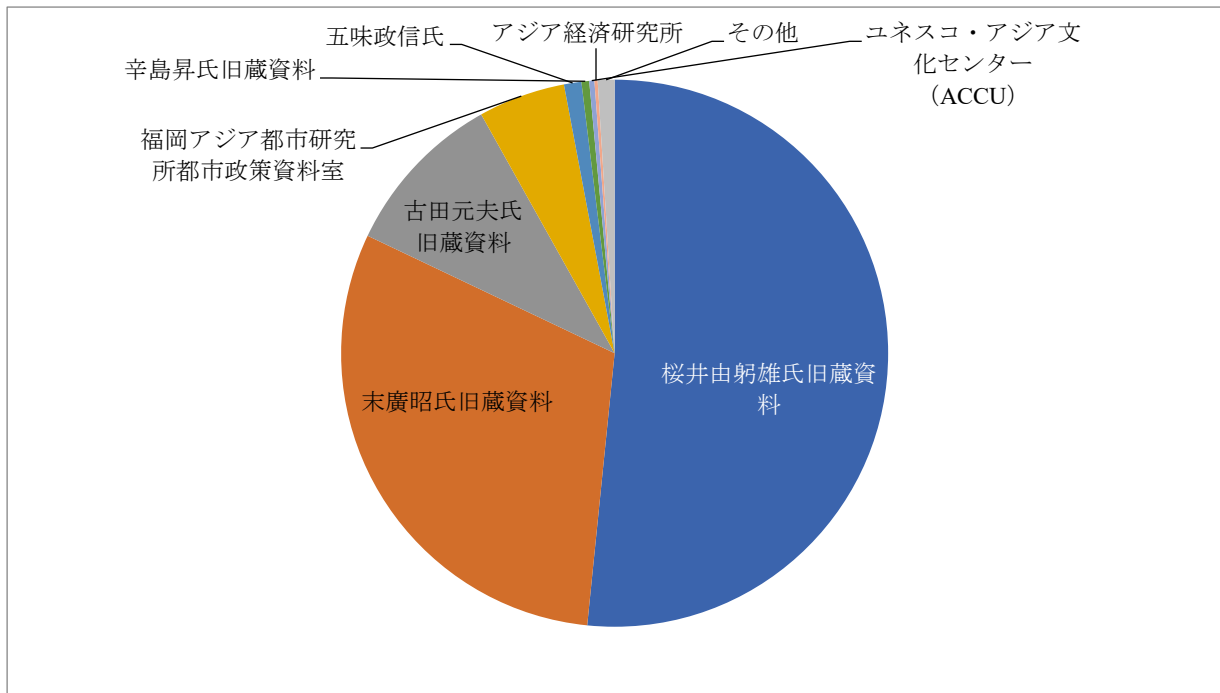


寄贈資料については、「桜井由躬雄文庫」(1,355点、約51.6%)、「末廣昭文庫」(800点、約30.5%)、「古田元夫文庫」(258点、約9.8%)および「辛島昇文庫」(インドの項参照)の受入の影響が大きい。

(表 6-2) 寄贈資料の由来別の構成

寄贈者	点数	割合(%)
桜井由躬雄氏旧蔵資料	1,355	51.6
末廣昭氏旧蔵資料	800	30.5
古田元夫氏旧蔵資料	258	9.8
福岡アジア都市研究所都市政策資料室	135	5.1
五味政信氏	27	1.0
辛島昇氏旧蔵資料	12	0.5
ユネスコ・アジア文化センター (ACCU) *	8	0.3
アジア経済研究所	5	0.2
その他	26	1.0
合計	2,626	100.0

* 寄贈者は ACCU であるが ACCU 識字教育資料ではなく参考図書である



<4 南アジア> 河崎 豊 (RASARL 助教)

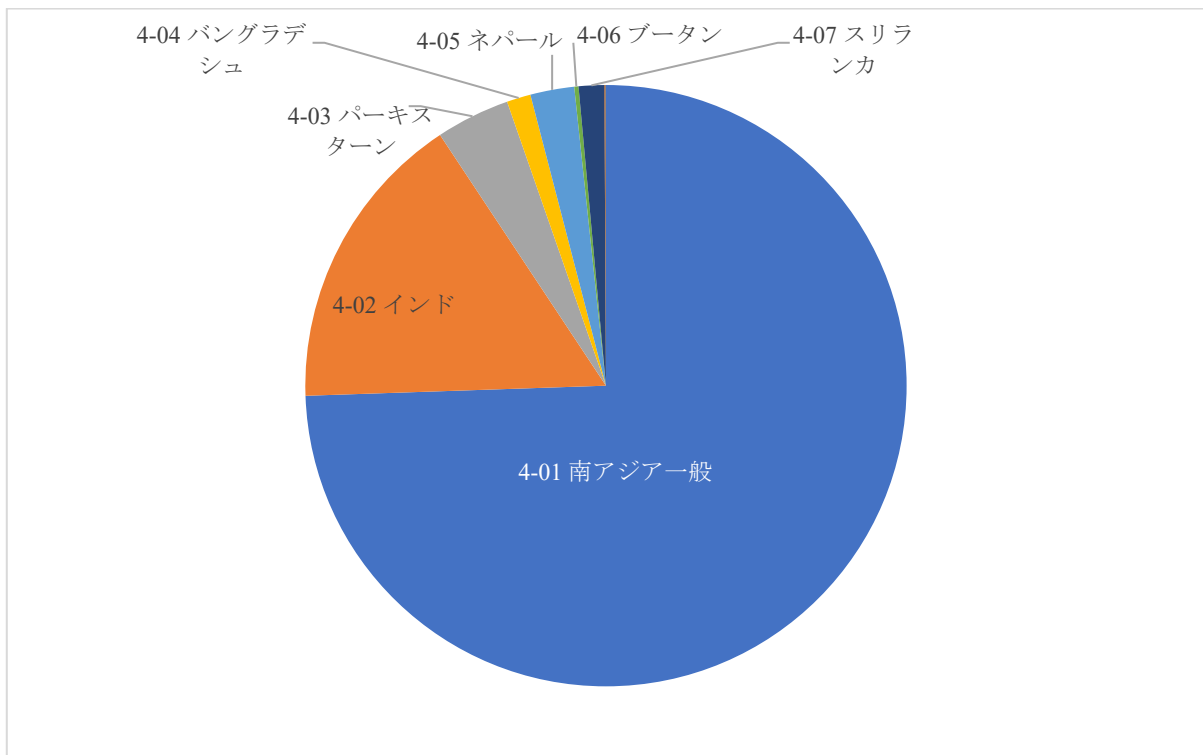
1. 地域別の構成

地域分類は国民国家成立以前と以後で二分される。「4-01 南アジア一般」は国民国家成立以前の、インド洋世界を含む歴史的南アジア世界を指す。U-PARL編『図書館がつなぐアジアの知 分類法から考える』(東京大学出版会、2020)が言うように、「南アジアの図書分類において・・・言語や宗教など国民国家の境界を越える主題が数多く存在する」(61頁)からである。国民国家成立以降の各地域に関する資料を収める項目として、4-02以下で順にインド、パーキスタン、バングラデシュ、ネパール、ブータン、スリランカ、モルディヴを設ける。「4-91 南アジア その他」はモーリシャス、イギリス領、フランス領、オーストラリア領のインド洋世界の資料を収める(参考図書の言語別構成については後述)。

(表1) 地域別の構成

地域	点数	割合 (%)
4-01 南アジア一般	6,185	74.5
4-02 インド	1,348	16.2
4-03 パーキスタン	330	4.0
4-04 バングラデシュ	107	1.3
4-05 ネパール	196	2.4
4-06 ブータン	19	0.2
4-07 スリランカ	114	1.4
4-08 モルディヴ	5	0.1
4-91 その他	2	0.0
合計	8,306	100.0

地域別資料数では南アジア一般が70%以上を占め、次にインド、パーキスタンが続くことが特徴的である。南アジア一般に資料が偏ることは、上で記した事情に大きく起因する。一方で、パーキスタン以下各国の資料が占める割合がかなり低い。これは、本学の南アジア研究における傾向をある程度反映する可能性もある。

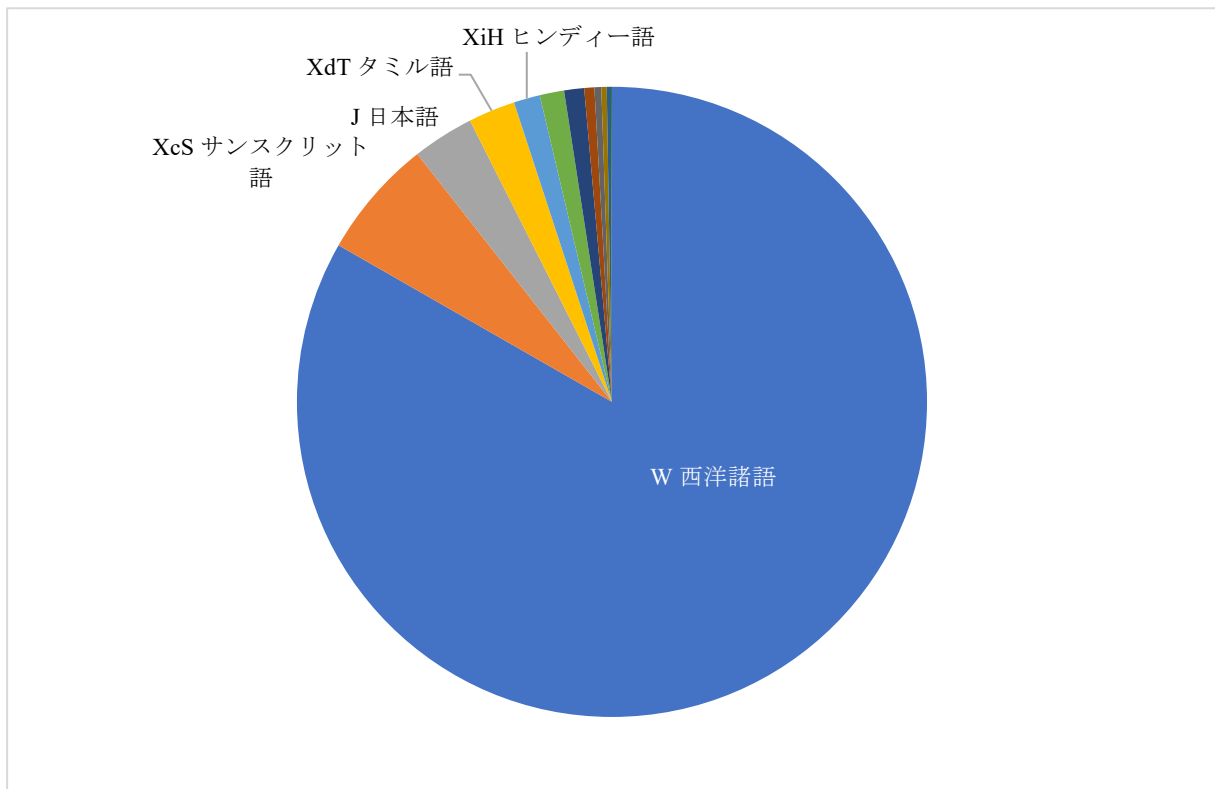


2. 言語別の構成

蔵書の80%強を、英語をはじめとする西洋諸語のそれが占める。これは、研究や翻訳、ガゼッタといった所謂の二次文献資料が、南アジア資料の大半を占めることを意味する。南アジア諸語では、サンスクリットが最も多く、次にタミル語やプラークリット諸語の割合が多いことが特徴的である。これは、所謂の一次文献、就中古典語文献の割合が大きい事実を示している。もっとも、二次文献資料の数の突出ぶりと比べれば、その数は貧弱の感を免れえないであろう。また、タミル語以外のドラヴィダ諸語や、ヒンディー語、ベンガル語、ネパール語といった現代南アジア諸語の数はさらに少ない。これらの諸資料を扱う学科を有する他部局の収書方針との兼ね合いもあるが、上で示した地域別構成の偏りと合わせ、是正の余地がある。

(表2-1) 一般図書館の言語別の構成

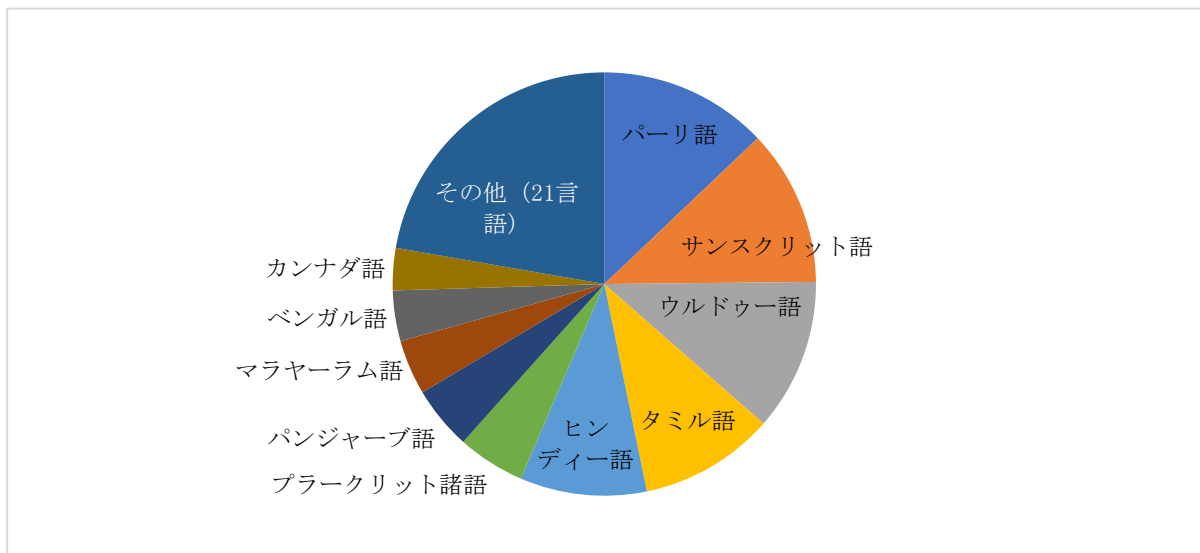
言語	点数	割合 (%)
W 西洋諸語	6,917	83.3
XcS サンスクリット語	509	6.1
J 日本語	262	3.2
XdT タミル語	200	2.4
XiH ヒンディー語	112	1.3
XiX その他の新期インド・ア ーリア諸語	104	1.3
XcX パーリ語以外のプラーク リット諸語	85	1.0
XX その他	43	0.5
XdX その他のドラヴィダ諸語	29	0.3
XiB ベンガル語	23	0.3
XiU ウルドゥー語	18	0.2
XcP パーリ語	4	0.0
合計	8,306	100.0



参考図書（言語辞典）ではパーリ語やサンスクリット語が多い。特にパーリ語辞典の多さは突出する。蔵書中パーリ語資料が0点であることを見ると異様さを感じるかもしれないが、このような点数の多さは当該言語の辞典の多くが分冊形式であることに起因し、パーリ語辞典の種類が多いわけではない。上位を占めるサンスクリット語やウルドゥー語、タミル語、ヒンディー語といった諸言語辞典の事情も同様である。このほか、古～中期インド・アリア諸語やドラヴィダ諸語、また現代南アジア諸語まで含め現時点で30言語にわたる言語辞典を収集し、南アジア世界の多様な言語事情に可能な限り対応するよう尽力している。

(表2-2) 参考図書の言語別の構成

言語	点数	割合 (%)
パーリ語	40	12.9
サンスクリット語	37	11.9
ウルドゥー語	36	11.6
タミル語	32	10.3
ヒンディー語	30	9.7
プラークリット諸語	16	5.2
パンジャープ語	15	4.8
マラヤーラム語	13	4.2
ベンガル語	12	3.9
カンナダ語	10	3.2
その他21言語	69	22.3
合計	310	100.0

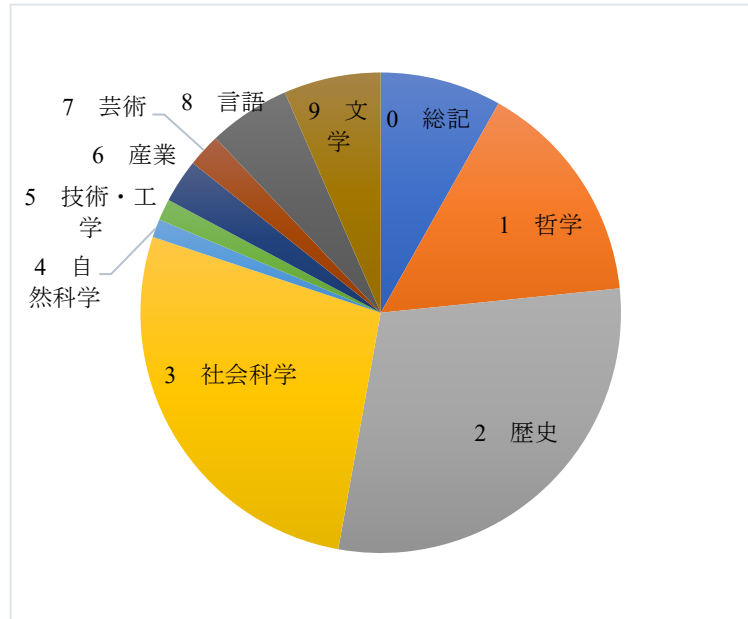


3. 主題別の構成

全体の70%強を、哲学・歴史・社会科学に収まる資料が占める。このことは、移管元部局の大半が人文社会系研究科・文学部の東洋史学、インド哲学仏教学、考古学の各研究室と東洋文化研究所、社会科学研究所であり、そこでの研究傾向を一定程度反映していると推測される。また、南アジアにかかわる寄贈資料の多くが、歴史学か社会科学にかかわる研究者（辛島昇氏旧蔵書資料：1069点）や学内プロジェクト（人間文化研究機構プロジェクト「南アジア地域研究」東京大学拠点（TINDAS）寄贈資料：349点）であることに由来する可能性もある。一方、いわゆる文系分野でも芸術や言語、語学を主題とする資料、またいわゆる理系分野の資料は、南アジア伝統医学や天文学といった資料の移管や新規購入の余地があるが、現状では僅少である。

(表3) 主題別の構成

主題	点数	割合 (%)
0 総記	678	8.2
1 哲学	1,264	15.2
2 歴史	2,446	29.4
3 社会科学	2,266	27.3
4 自然科学	102	1.2
5 技術・工学	119	1.4
6 産業	244	2.9
7 芸術	186	2.2
8 言語	458	5.5
9 文学	543	6.5
合計	8,306	100.0

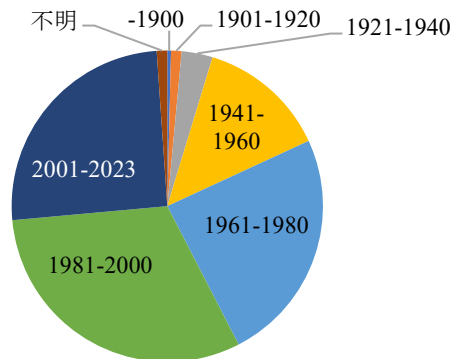


4. 出版年別の構成

1940年までの出版物は5%に満たない。それ以降の出版年の資料は、各年代を満遍なく収集しているといつてよく、比較的バランスが取れている。古い出版年の資料が少ない理由は、移管元部局の方針によるところもあると思しく、確かなことは言えない。今後、自動書庫への他部局からの移管過程においては、相応に古い出版年の資料が多数移管される可能性もある。一方で、積極的に古資料を収集するか否かは、検討に値する課題である。また「6」で示すように、南アジア資料の60%以上が寄贈資料か購入資料で占められる点は、1941年以降の出版物の割合を説明する理由のひとつとして想定することができるであろう。

(表4) 出版年別の構成

出版年	点数	割合 (%)
～1900	33	0.4
1901～1920	94	1.1
1921～1940	278	3.2
1941～1960	1156	13.4
1961～1980	2094	24.3
1981～2000	2683	31.1
2001～	2184	25.3
不明	94	1.1
合計	8616	100.0

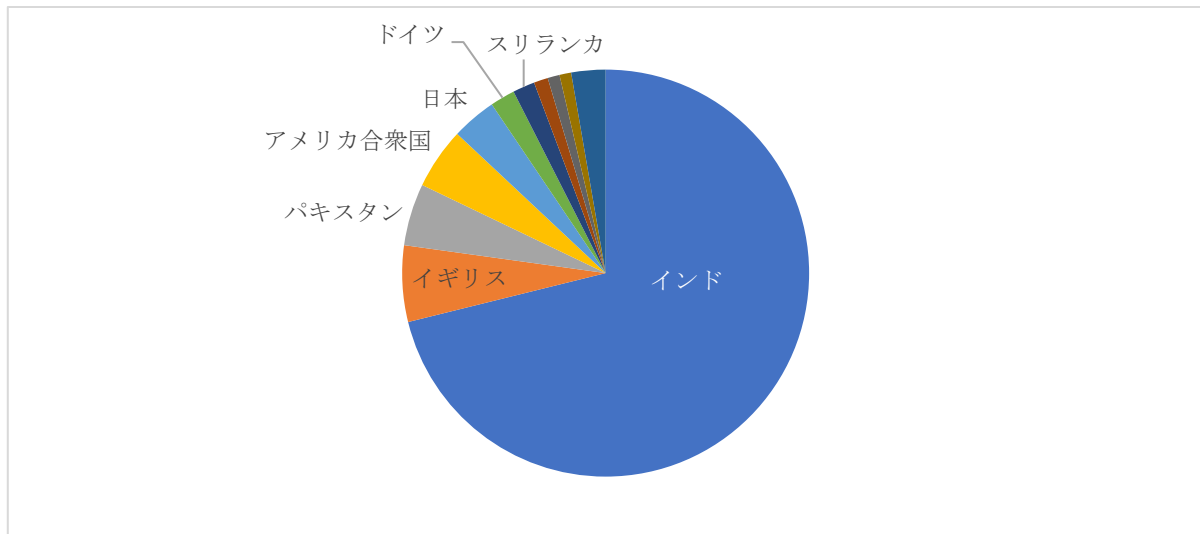


5. 出版国別の構成

インドで出版された資料が全体の70%強を占めることは、大きな特徴のひとつである。これは、「4-02 インド」だけでなく、「4-01 南アジア一般」などに関しても、一定数の資料がインドから出版されていることに由来する。一方、ブータンで出版された資料は2点、モルディヴに至っては皆無であり、入手ルートの構築から手をつける必要がある。両地域の専門家を招聘し打開策について議論する、といった機会をもつことも有効であろう。欧米諸国についてはイギリス、アメリカ、ドイツ、オランダが上位を占める。これら各国が南アジア研究に果たす役割からすれば、想定内の結果である。一方で、フランス(44点)やオーストラリア(41点)など、イギリスやドイツなどと同様にこれまで南アジア研究を牽引してきた欧米諸国の資料が少ないことには、是正の余地がある。

(表5) 出版国別の構成

出版国	点数	割合 (%)
インド	6,129	71.1
イギリス	522	6.1
パーキスタン	425	4.9
アメリカ	419	4.9
日本	307	3.6
ドイツ	170	2.0
スリランカ	151	1.8
バングラデシュ	97	1.1
オランダ	82	1.0
ネパール	80	0.9
その他	234	14.8
合計	8616	100.0



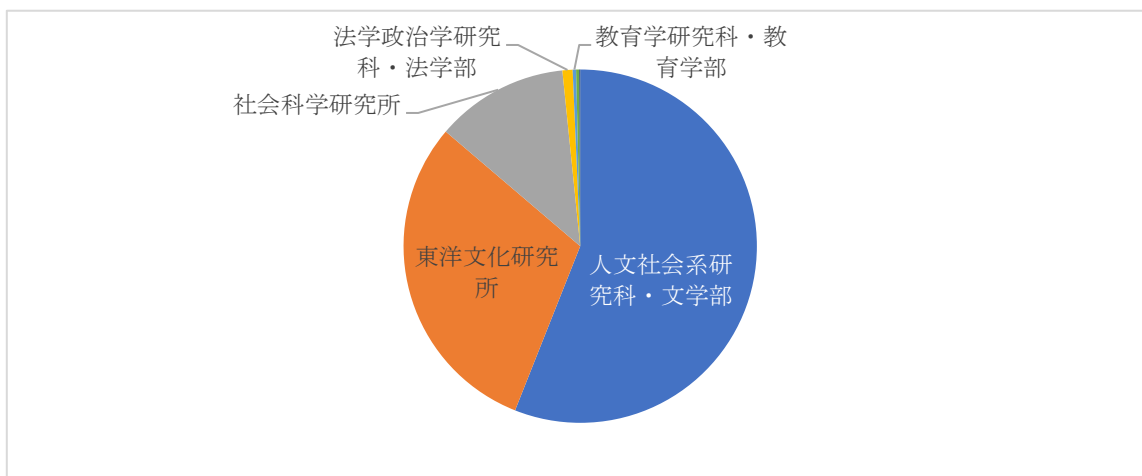
6. 資料の由来別の構成

南アジアの資料は購入資料3,595点(約41.7%)、移管資料3,217点(約37.3%)、寄贈資料1,804点(約21.0%)からなる。移管資料については、人文社会系研究科・文学部、東洋文化研究所、社会科学研究所からのものでほぼ100%を占める。人文社会系研究科・文学部からの移管資料の大半は、東洋史(902点)とインド哲学仏教学(579点)と考古学(202点)の各研究室からのものである。移管資料は蔵書総数の40%未満にすぎず、それ以外は購入資料か寄贈資料で占められ、購入資料の割合は寄贈資料の倍近い。現状での南アジア資料の種々の特質は、移管資料のもつ性質と同等に、歴代の選書担当

者の収書方針に起因する部分があり、また寄贈資料の性質も一定程度寄与していると思しい。ただし、今後も陸続と資料が移管されること、各年の移管資料数と同程度の購入資料数を担保しえない可能性が高いことを鑑みれば、短～中期的には南アジアの資料の性質は、移管資料のもつそれに相当程度左右されるであろう。

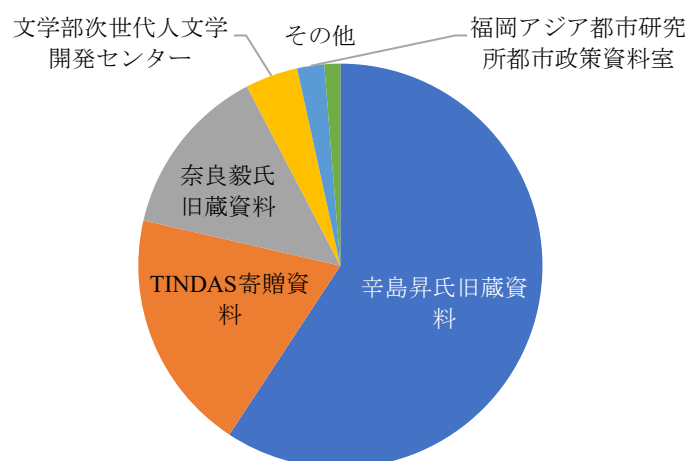
(表6-1) 移管資料の由来別の構成

部局名	点数	割合 (%)
人文社会系研究科・文学部	1,802	56.0
東洋文化研究所	972	30.2
社会科学研究所	391	12.1
法学政治学研究科・法学部	30	0.1
教育学研究科・教育学部	10	0.0
経済学研究科・経済学部	9	0.0
農学生命科学研究科・農学部	3	0.0
合計	3,217	100.0



(表6-2) 寄贈資料の由来別の構成

内訳	点数	割合 (%)
辛島昇氏旧蔵資料	1,069	59.3
TINDAS 寄贈資料	349	19.3
奈良毅氏旧蔵資料	248	13.7
文学部次世代人文学開発センター	76	4.2
福岡アジア都市研究所都市政策資料室	39	2.2
その他	23	1.3
合計	1,804	100.0



<5 中央ユーラシア> 河原 弥生 (RASARL 准教授)

1. 地域別の構成

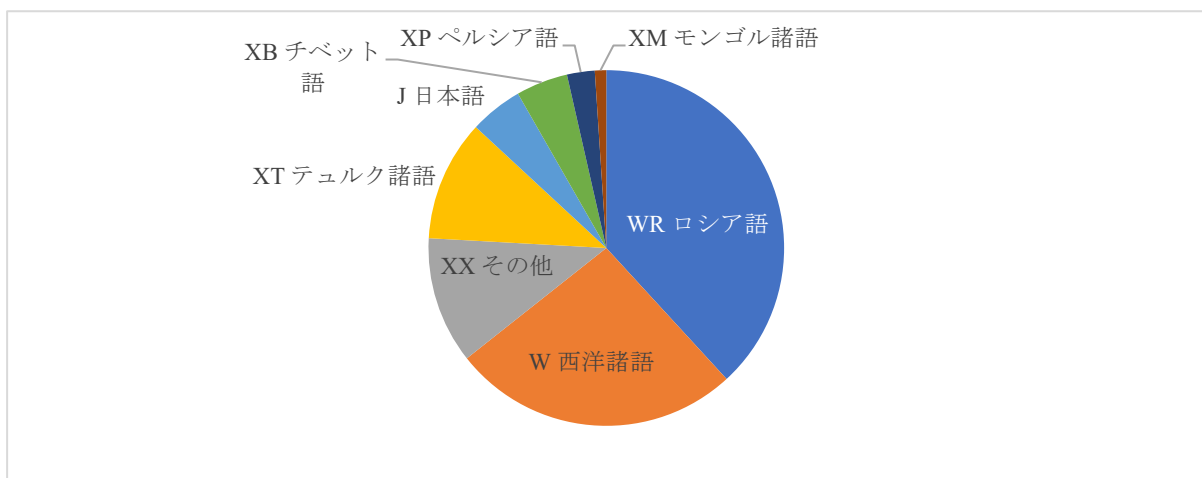
アジア研究図書館分類表における「5 中央ユーラシア」は、いわゆる中央アジア（旧ソ連中央アジア5カ国、中華人民共和国新疆ウイグル自治区、アフガニスタン）、チベット高原（中華人民共和国チベット自治区のほかアムド、カムを含む）、モンゴル高原（モンゴル国、中華人民共和国内モンゴル自治区）、シベリア・極東ロシア、ヴォルガ・ウラル（タタルスタン、バシコルトスタン、チュヴァシ、カルムイク、アストラハンなど）、コーカサス（ジョージア、アルメニア、アゼルバイジャンなどの南コーカサスの旧ソ連諸国のほか、ダゲスタン、チェチェン、チェルケスなどの北コーカサス）、クリミアー帯に関する資料を対象としている。地域別の細分はなされない。分析対象全4,797点のうち、一般図書が4,639点、参考図書が158点を占めている。

2. 言語別の構成

中央ユーラシアの一般図書の言語別構成を見ると、「WR ロシア語」(1,771点、約38.2%)が突出して多い。これは、中央ユーラシアのかなりの地域がロシア帝国とソ連邦に組み込まれていた歴史的経緯により、多くの研究がロシア語でおこなわれてきたことに起因する。アジア研究図書館の他の地域ではロシア語を「W 西洋諸語」に含めるのと異なり、中央ユーラシアにおいてのみロシア語を独立の言語分類としているのはそのためである。「W 西洋諸語」においては、英語資料(899点)、ドイツ語資料(186点)、フランス語(106点)がほぼすべてを占める。「XX その他」のうちのほとんどは中国語資料(502点)である。「XT テュルク諸語」の資料も充実しており、最も数が多いのはウズベク語資料(306点)である。

(表 2-1) 一般図書の言語別の構成

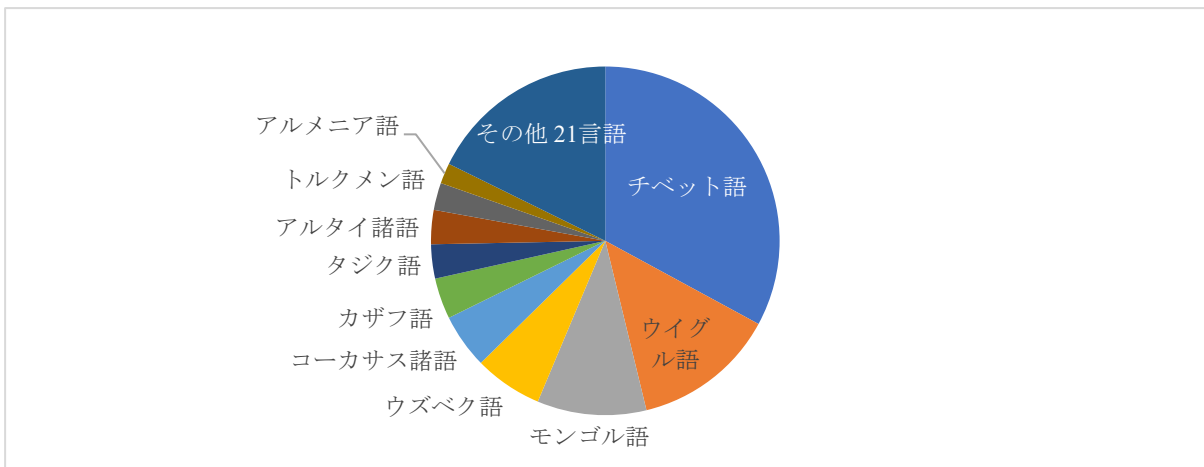
言語	点数	割合 (%)
WR ロシア語	1,771	38.2
W 西洋諸語	1,214	26.2
XX その他	535	11.5
XT テュルク諸語	511	11.0
J 日本語	224	4.8
XB チベット語	219	4.7
XP ペルシア語	117	2.5
XM モンゴル諸語	48	1.0
合計	4,639	100.0



参考図書の中では、チベット語の辞典（52点）が多い。16巻本のチベット語・サンスクリット語辞典である Negi, J. S. and Rinpoche, Samdhong 編 *Bod skad dang legs sbyar gyi tshig mdzod chen mo* (R5:tib:neg1-16) や 11巻本のサンスクリット語併記チベット語・ロシア語・英語辞典である Roerich 編 *Tibetsko-russko-angliiskii slovar' s sanskritskimi paralleliami* (R5:tib:roe1-11) などの多巻からなる辞書が多いという事情もあるが、これらを除いてもチベット語辞典は充実している。次に数が多いウイグル語も、中国語、ロシア語、英語との対訳辞典のほか、正書法辞典や方言辞典、アラビア文字のほか新文字（ラテン文字）の辞典を所蔵している。旧ソ連圏の各言語の辞典も多様なものを揃えている。

(表 2-2) 参考図書の言語別の構成

言語	点数	割合 (%)
チベット語	52	32.9
ウイグル語	21	13.3
モンゴル語	16	10.1
ウズベク語	10	6.3
コーカサス諸語	8	5.1
カザフ語	6	3.8
タジク語	5	3.2
アルタイ諸語	5	3.2
トルクメン語	4	2.5
アルメニア語	3	1.9
その他 21 言語	28	17.7
合計	158	100.0

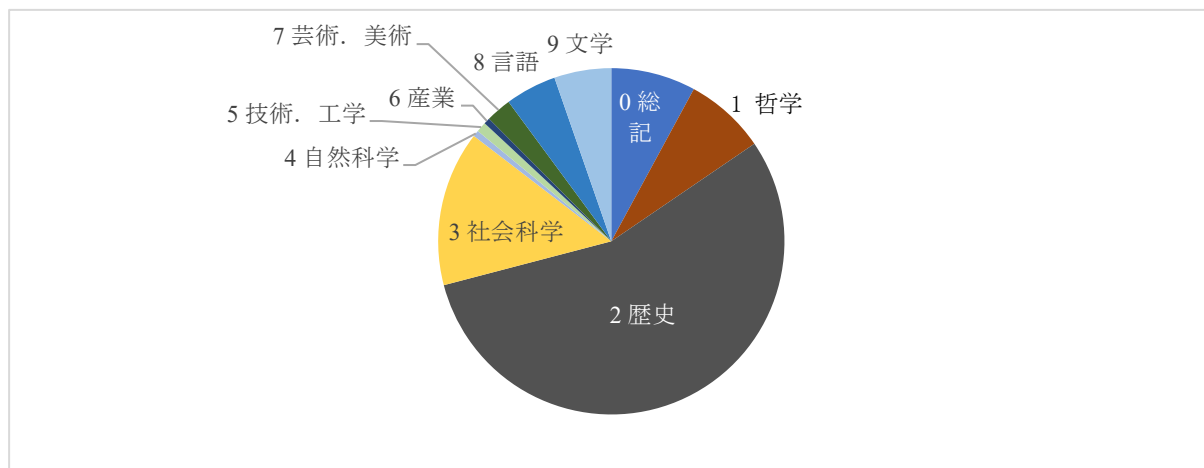


3. 主題別の構成

全体の半分以上を「2 歴史」が占めている。このことは、6で述べるように、人文社会系研究科・文学部の東洋史学研究室から中央アジア研究資料が多く移管されたことと大きく関係している。とりわけ「200c 中央アジア史」（旧ソ連中央アジア 5カ国、中華人民共和国新疆ウイグル自治区、アフガニスタンの歴史）の資料が 1338 点あり、一大コレクションを形成している。また、「3 社会科学」のうち「310 政治」（225 点）や「380 風俗習慣・民俗学・民族学」（218 点）、「900 文学」（247 点。下位の細分含む、以下同様）、「800 言語」（222 点）、「1 哲学」のうち「167 イスラーム」（122 点）も一定数あるのは、東洋史学研究室からの移管資料の主題が歴史にとどまらず、隣接分野に広範囲に及んでいるためである。このほか、「0 総記」の「020 図書・書誌学」（131 点）に分類される写本目録などのカタログ類も充実している。他方で、理工系分野の蔵書はごくわずかである。

(表3) 主題別の構成

主題	点数	割合 (%)
0 総記	367	7.9
1 哲学	351	7.6
2 歴史	2,572	55.4
3 社会科学	672	14.5
4 自然科学	27	0.6
5 技術・工学	44	0.9
6 産業	27	0.6
7 芸術	110	2.4
8 言語	222	4.8
9 文学	247	5.3
合計	4,639	100.0

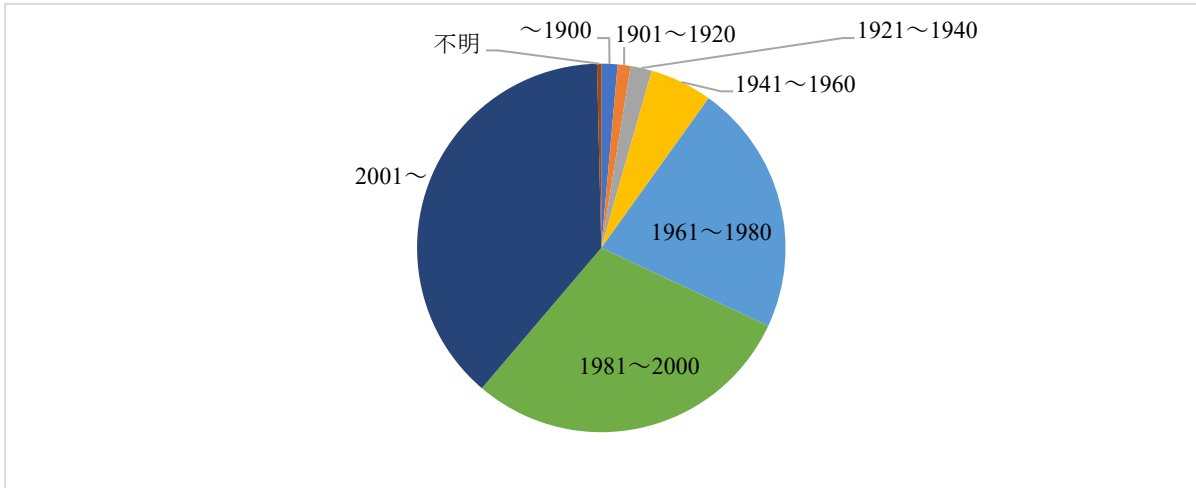


4. 出版年別の構成

最も古い資料は1828年にロシアで刊行された *Opisanīe Tibeta : v nynīēshnem ego sostoiānīi : s kartoīū dorogi iz Chen"-du do Khlassy : perevod s Kitaīskago* (5 WR:200 a:imp) であり、これはアジア研究図書館のなかで最も古い出版物でもある。このほかに19世紀に出版された資料は68点あるが、後代になるにつれ資料数は飛躍的に増加してくる。とりわけ2001年以降に刊行された新しい資料が4割近くを占めるが、これには6で述べるように、アジア研究図書館配架用に購入した資料が多いことが大きく影響している。

(表4) 出版年別の構成

出版年	点数	割合 (%)
～1900	68	1.4
1901～1920	54	1.1
1921～1940	90	1.9
1941～1960	263	5.5
1961～1980	1,058	22.1
1981～2000	1,404	29.3
2001～	1,842	38.4
不明	18	0.4
合計	4,797	100.0

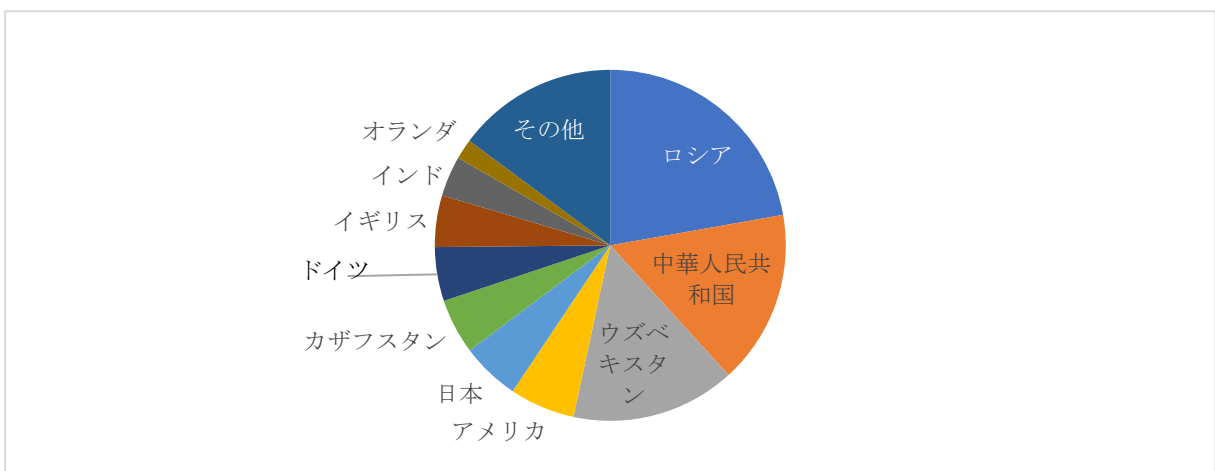


5. 出版国別の構成

上位3カ国のロシア、中華人民共和国、ウズベキスタンで刊行された資料が全体のおよそ半分を占めている。中央ユーラシアの国で他に上位にあるのはカザフスタンのみであり、「5 中央ユーラシア」の対象地域が極めて広範囲に及ぶなか、研究対象の国や地域からの資料の入手は、今後解決すべき大きな課題である。とりわけ旧ソ連諸国の出版物は、かつてはモスクワからの購入ルートが確立されていたが、ソ連の解体後、各国からの購入ルートはいまだに開拓されたとは言い難い。欧米諸国や日本と並んで9位に位置しているインドの刊行物は、チベット語や英語によるチベット仏教に関する資料のほか、アフガニスタンに関する歴史研究を多く含んでいる。

(表5) 出版国別の構成

出版国	点数	割合 (%)
ロシア	1,066	22.2
中華人民共和国	768	16.0
ウズベキスタン	726	15.1
アメリカ	289	6.0
日本	259	5.4
カザフスタン	244	5.1
ドイツ	238	5.0
イギリス	228	4.8
インド	178	3.7
オランダ	89	1.9
その他	712	14.8
合計	4,797	100.0



6. 資料の由来別の構成

中央ユーラシア資料の由来は、移管資料が 3,378 点（約 70.4%）、購入資料が 1,151 点（約 24.0%）、寄贈資料が 268 点（5.6%）である。

移管元部局のなかでは、人文社会系研究科・文学部からが 3,202 点で突出して多く、移管資料のうちの約 94.8%を占める。続く東洋文化研究所からは 154 点（約 4.6%）が移管された。なお、表とグラフには示されていないが、人文社会系研究科・文学部からの移管資料のうち

(表 6-1) 移管資料の由来別の構成

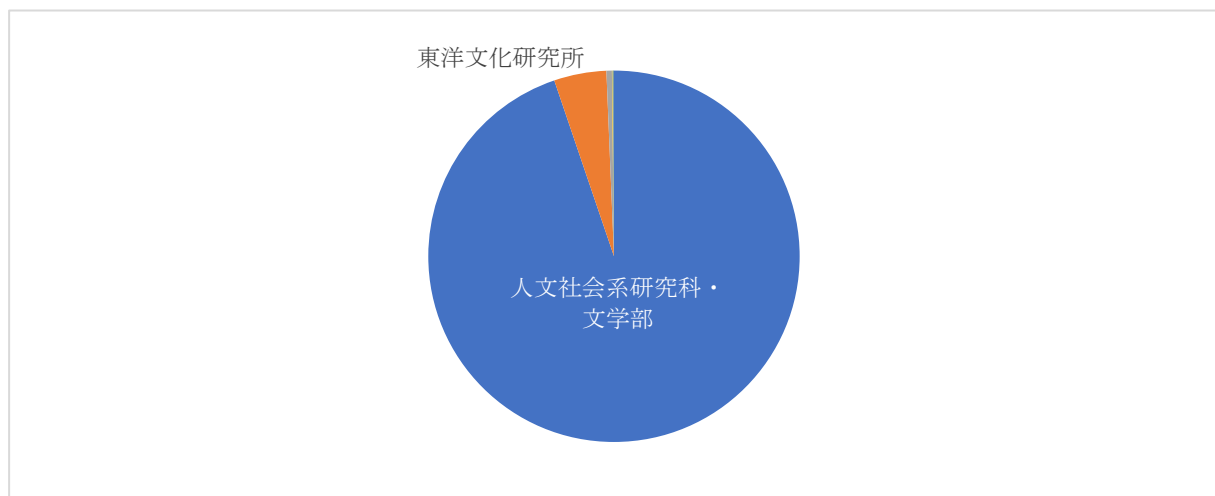
部局名	点数	割合 (%)
人文社会系研究科・文学部	3,202	94.8
東洋文化研究所	154	4.6
社会科学研究所	16	0.5
史料編纂所	2	0.1
法学政治学研究科・法学部	2	0.1
工学系研究科・工学部	1	0.0
情報学環・学際情報学府	1	0.0
合計	3,378	100.0

2,994 点が東洋史学研究室からであり、それだけで中央ユーラシア資料全体の約 62.4%を占めていることになる。このことは、上述したように、蔵書の主題別構成において「2 歴史」が大きな部分を占めていることにも大きく影響している。

資料全体に占める購入資料の割合が高いことも、中央ユーラシアの大きな特徴である。特に移管資料のなかで不足していた参考図書が 108 点購入されている。また、新たに購入した資料が多いことは、上述したように、出版年の新しい資料の割合が高い要因にもなっている。

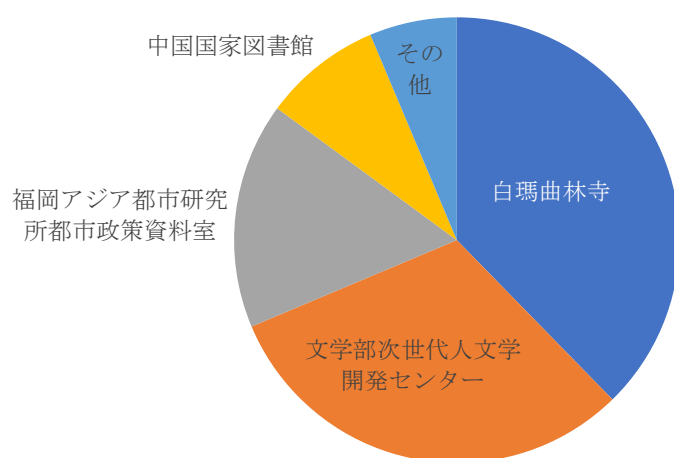
一方、中央ユーラシア資料全体に占める寄贈資料の割合は他地域に比べると低い。寄贈点数が最多の白瑪曲林寺（中華人民共和国チベット自治区）からは、チベット仏教僧 **Phyogs-las-rnam-rgyal** 著作全集 101 巻セットの寄贈を受けている。このほか、本学文学部次世代人文学開発センター（旧・文化交流附属施設）からは移管に先立って図録類（83 点）、福岡アジア都市研究所都市政策資料室からはチベット関連資料（44 点）の寄贈を受けた。また、表に示される中国国家図書館（23 点）はじめ各国の国家図書館（国際交換資料）や発行者からの寄贈を受けている。

総じて中央ユーラシア資料のなかでは、人文社会系研究科東洋史学研究室からの移管資料と購入資料が極めて大きな部分を占めていると言える。



(表 6-2) 寄贈資料の由来別の構成

寄贈者	点数	割合 (%)
白瑪曲林寺	101	37.7
文学部次世代人文学開発センター	83	31.0
福岡アジア都市研究所都市政策資料室	44	16.4
中国国家図書館	23	8.6
その他	17	6.3
合計	268	100.0



<6 西アジア> 徳原 靖浩 (U-PARL 特任助教)

1. 地域別の構成

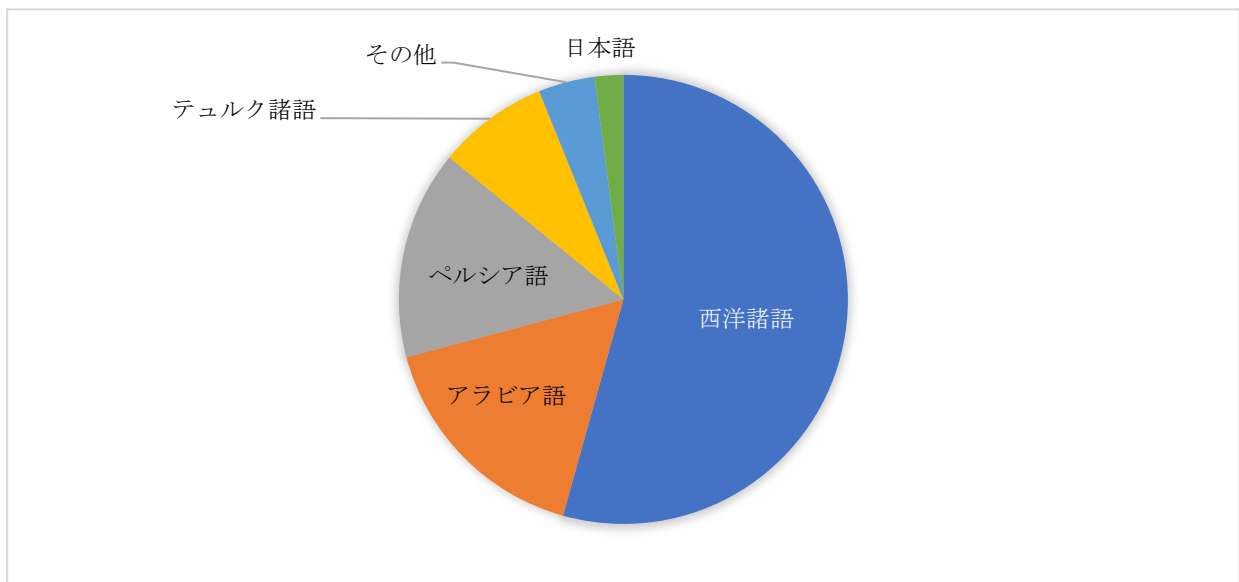
アジア研究図書館分類表における「6 西アジア」は、東はイランから、トルコ、中近東、湾岸諸国、北アフリカに関する資料を主な対象とする。隣接するヨーロッパ地域、サハラ以南のアフリカ、ソコトラ島とマダガスカルを結ぶ線より西側のインド洋地域に関する資料も、西アジアに分類する。中央ユーラシアと同様、地域別の細分はなされていない。

2. 言語別の構成

西アジアの蔵書の言語分類は、日本語 (J)、西洋諸言語 (W)、アラビア語 (XA)、ペルシア語 (XP)、トルコ語 (XT)、その他 (XX) からなる。言語分類上は、西洋諸言語が約半数 (5,211 点) を占めるが、この中の約 8 割が、西洋諸言語だけで書かれたものである。アラビア語は全体の 16.5%、ペルシア語が 15% とほぼ拮抗しており、トルコ語は 8% で今後より一層充実の余地がある。「その他」の多くを占めるのは、本文にヘブライ語を含むもの (342 点) であり、次にクルド語資料 (31 点) が続く。クルド語資料には、イラクで刊行されたソラニー方言によるクルディスタン書誌およびソラニー方言とクルマンジー方言による地方別百科事典 2 種(すべてアラビア=ペルシア文字によるもの)が含まれる。

(表 2-1) 一般図書の言語別の構成

言語	点数	割合 (%)
西洋諸語	5,211	54.3
アラビア語	1,584	16.5
ペルシア語	1,442	15.0
テュルク諸語	766	8.0
その他	390	4.1
日本語	197	2.1
合計	9,590	100.0

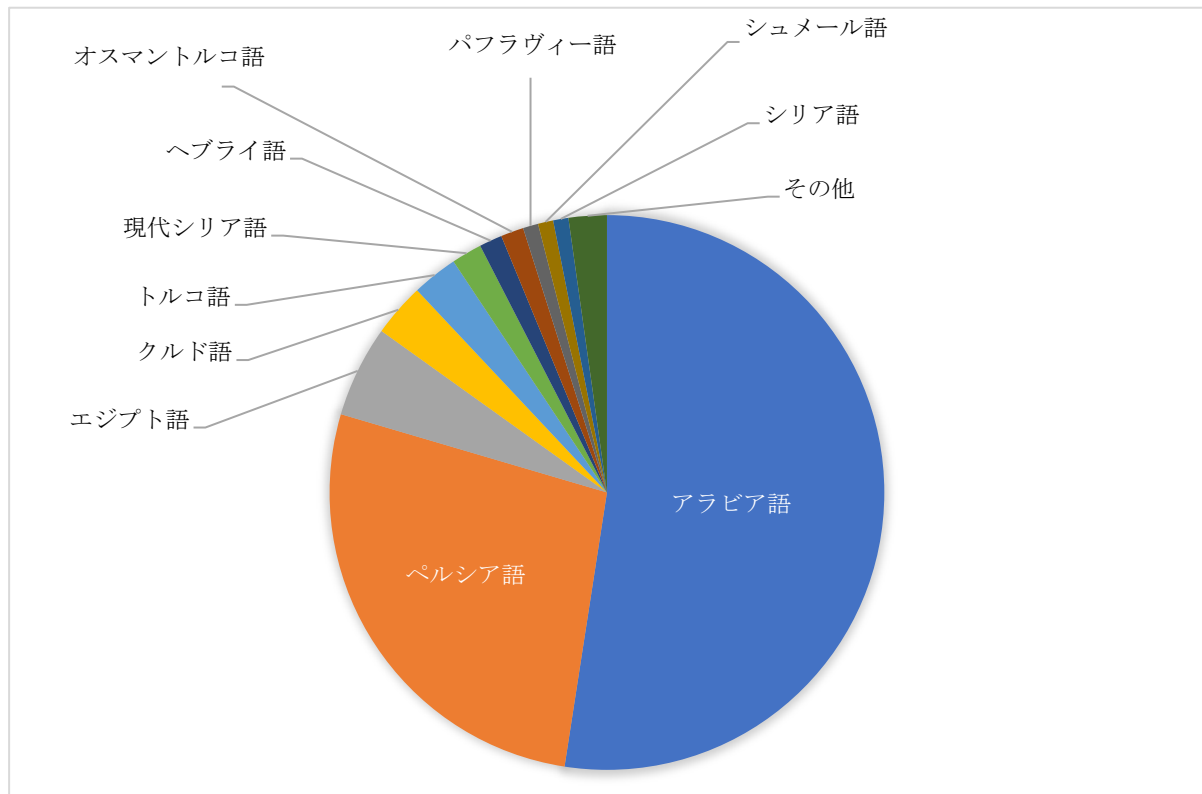


主に語学辞典からなる参考図書の言語別構成は、アラビア語が約半数であり、ペルシア語、エジプト語、クルド語と続く。ここでもトルコ語が不足していることが確認

できる。「その他」の内訳は、アラム語、アゼルバイジャン語、コプト語、ギリシア語、古代ペルシア語がそれぞれ 1 点ずつである。

(表 2-2) 参考図書の言語別の構成

言語	点数	割合 (%)
アラビア語	118	52.4
ペルシア語	61	27.1
エジプト語	12	5.3
クルド語	7	3.1
トルコ語	6	2.7
現代シリア語	4	1.8
ヘブライ語	3	1.3
オスマントルコ語	3	1.3
パフラヴィー語	2	0.9
シュメール語	2	0.9
シリア語	2	0.9
その他	5	2.0
合計	225	100.0

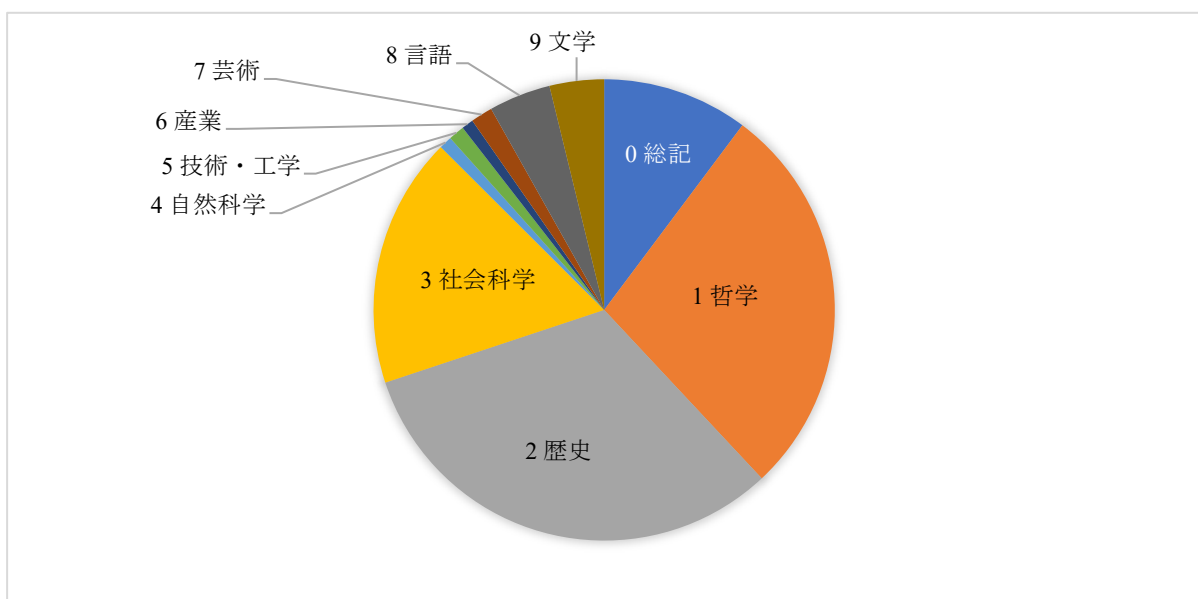


3. 主題別の構成

主題分類記号別に見ると、最も多いのは「200 歴史」であり、西アジア資料の25%を占める。これに「280 伝記」、「290 地理・地誌・紀行」を足すと3,056点となり、十進分類法の2類が31.9%に上がることが分かる。次に続くのは「190 キリスト教」で10パーセント、「167 イスラーム」（法学や建築、音楽などは除く）と「020 書誌・目録類」がそれぞれ9%、「199 ユダヤ教」が6%となっている。文学部や東洋文化研究所における歴史、宗教分野の研究蓄積を反映した比率と言えよう。これに比して、「310 政治」、「320 法学」（イスラーム法学を含む）はそれぞれ5%、言語、文学はともに4%であり、今後充実の余地がある。

(表3) 主題別の構成

主題	点数	割合 (%)
0 総記	981	10.2
1 哲学	2,666	27.8
2 歴史	3,056	31.9
3 社会科学	1,686	17.6
4 自然科学	86	0.9
5 技術・工学	107	1.1
6 産業	79	0.8
7 芸術	147	1.5
8 言語	416	4.3
9 文学	366	3.8
合計	9,590	100.0

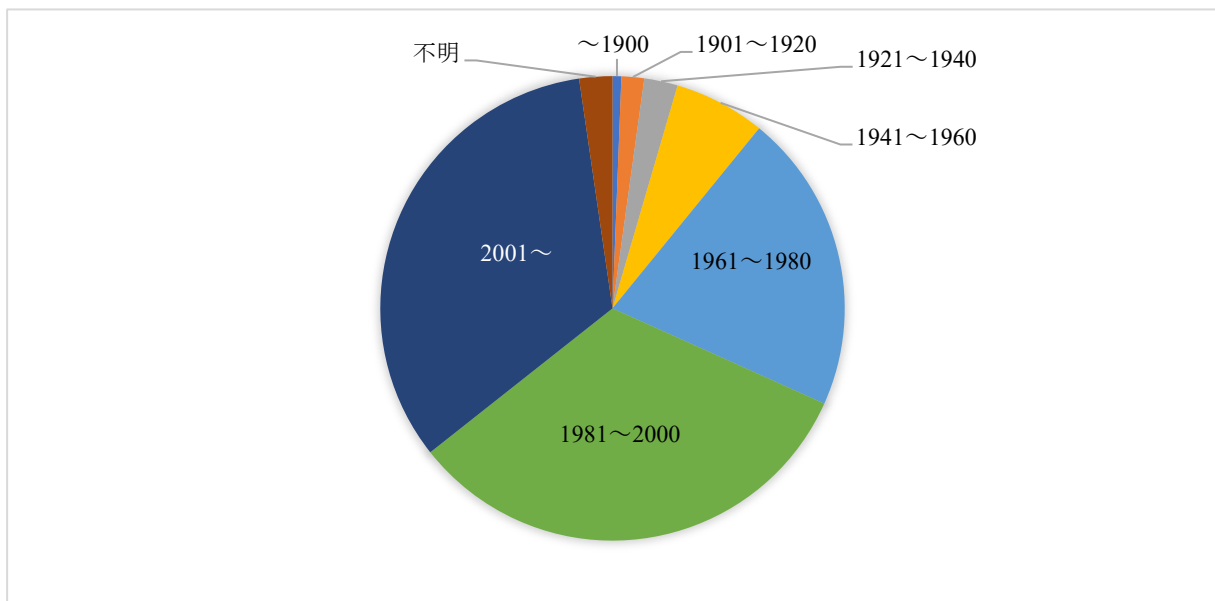


4. 出版年別の構成

出版年別に見てみると、最も多いのは1983年で287点だが、ここにはアッラーマ・マジジュリスイーMajlisī編 *Bihār al-anwār* (全111巻の内105点) や、アル＝フル・ル＝アーミリーḤurr al-‘Āmilī編 *Wasā’il al-Shī‘ah ilā taḥṣīl masā’il al-sharī‘ah* (全20巻) といった大部のハディース集が含まれるから、タイトル数ではこの年が特段多いとは言えない。多巻物の有無によって点数が大きく変わるので、年毎の数値に大きな意味はないが、年代別にみると、1800年代に出版されたものは59点で、イランで刊行された地理書 *Mir’āt al-buldān-i Nāṣirī* (全4巻の内3点) のほかは、英、独、仏語のいずれかによる洋書である。10年代ごとに見ると、2000年代が1,722点と最多であり、1990年代(1,687点)、2010年代(1,649点)が続く。

(表4) 出版年別の構成

出版年	点数	割合 (%)
～1900	60	0.6
1901～1920	155	1.6
1921～1940	229	2.3
1941～1960	624	6.4
1961～1980	2,046	20.8
1981～2000	3,203	32.6
2001～	3,272	33.3
不明	226	2.3
合計	9,815	100.0

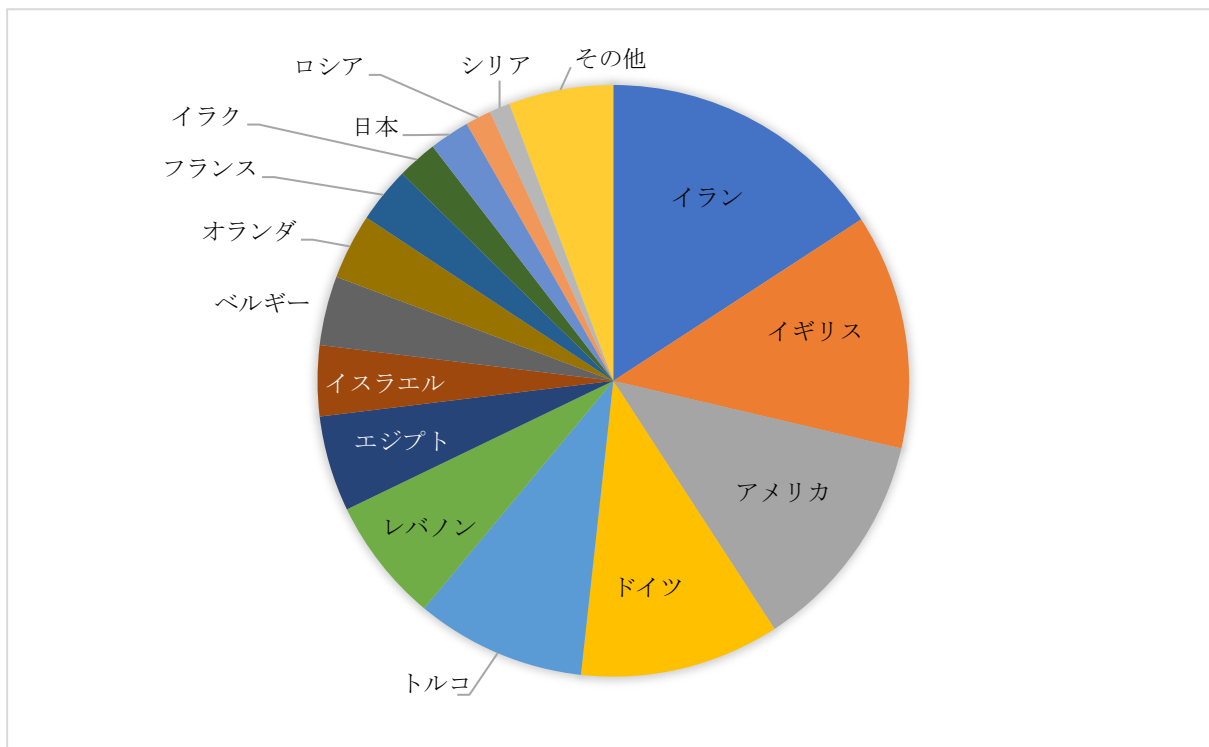


5. 出版国別の構成

出版国を地域別に見てみると、中東(湾岸諸国・北アフリカ含む)が4,565点、欧米(北欧、東欧・ロシア含む)が4,900点とほぼ拮抗しており、東アジア230点が続く。東アジアの内、216点は日本で出版された図書である。国別ではイランが1,552点と最も多く、アラブ諸国はレバノン668点、エジプト513点、イラク216点、シリア111点の順に多い。トルコは912点、イスラエルは379点で、言語別とほぼ比例した比率となっている。「その他」には100点に満たない国が含まれるが、その中で比較的多いのはインド、クウェート(各58点)、オーストリア、サウジアラビア(各54点)である。

(表5) 出版国別の構成

出版国	点数	割合 (%)
イラン	1,552	15.8
イギリス	1,262	12.9
アメリカ	1,193	12.2
ドイツ	1,072	10.9
トルコ	912	9.3
レバノン	668	6.8
エジプト	513	5.2
イスラエル	379	3.9
ベルギー	371	3.8
オランダ	352	3.6
フランス	299	3.0
イラク	216	2.2
日本	216	2.2
ロシア連邦	138	1.4
シリア	111	1.1
その他	561	5.7
総計	9,815	100



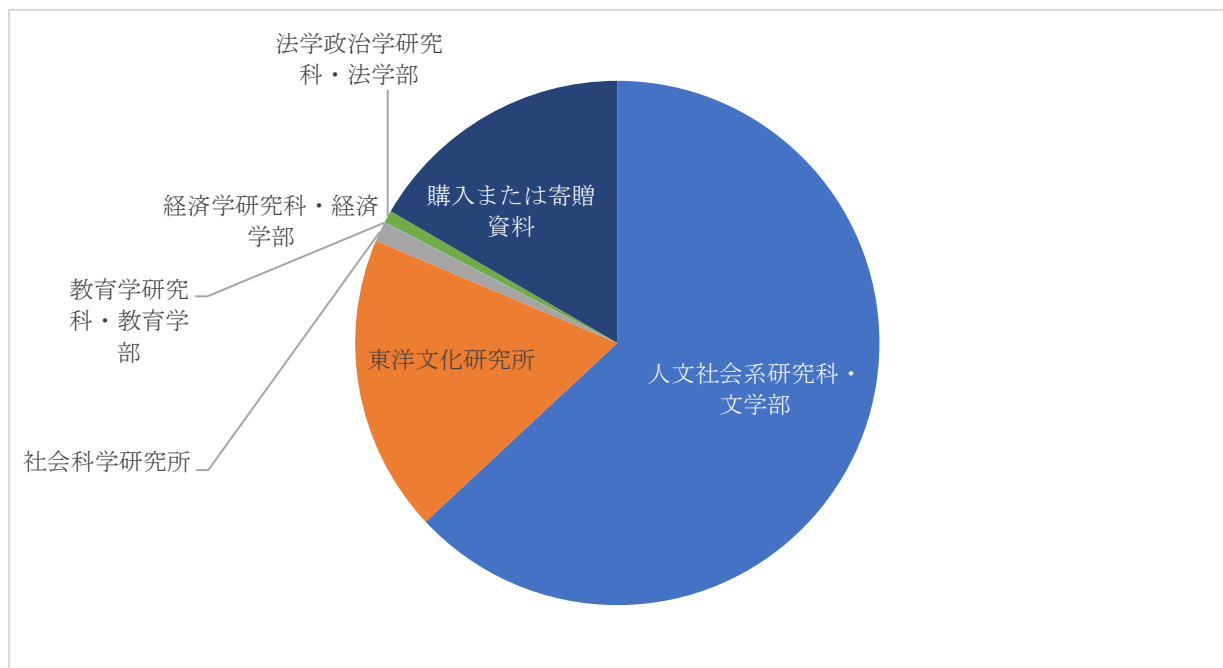
6. 資料の由来別の構成

西アジア図書の移管元は、文学部が 6,189 点と最も多く、次に東洋文化研究所の 1,798 点が続く。なお、購入、寄贈など移管以外のプロセスによって受入されたものは 1,631 点であり、そのうち、U-PARL およびアジア研究図書館による購入資料は 1,196 点である。

寄贈された資料には、柳橋博之氏（大学院人文社会系研究科教授、2023 年退職）からの寄贈図書 260 点（うち 246 点がアラビア語図書）、イラクの Ghadir 社から寄贈されたシェイヒー派の神学関係文献（アラビア語およびペルシア語）が 84 点、また、移管に先立って文学部次世代人文学開発センター（旧・文化交流附属施設）から寄贈された図書 50 点（すべて西洋諸言語）が含まれる。

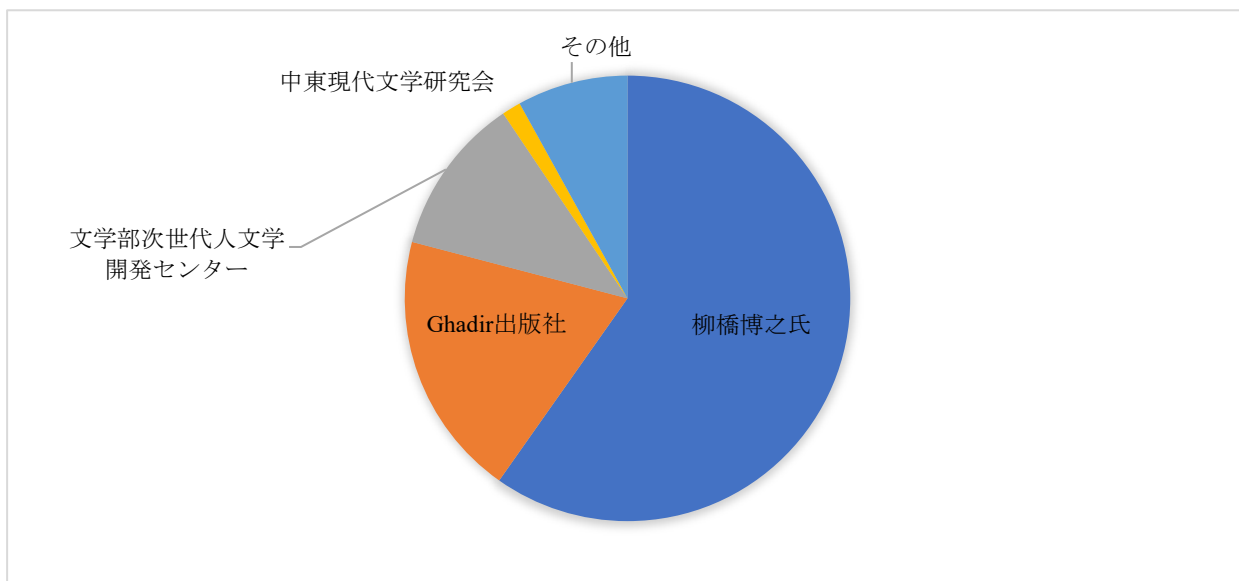
(表 6-1) 資料の由来別の構成

部局	点数	割合 (%)
人文社会系研究科・文学部	6,189	63.1
東洋文化研究所	1,798	18.3
社会科学研究所	118	1.2
教育学研究科・教育学部	1	0.0
経済学研究科・経済学部	5	0.1
法学政治学研究科・法学部	73	0.7
購入または寄贈資料	1,631	16.6
総計	9,815	100.0



(表 6-2) 寄贈資料の由来別の構成

寄贈者	点数	割合 (%)
柳橋博之氏	260	59.8
Ghadir 出版社	84	19.3
文学部次世代人文学開発センター	50	11.5
中東現代文学研究会	6	1.4
その他	35	8.0
合計	435	100.0



東京大学アジア研究図書館「辛島昇文庫」について

足立 享祐

(東京外国語大学 世界言語社会教育センター 講師)

〈辛島昇(1933-2015) 略歴〉

- 1958年 東京大学東洋史学科卒業
- 1961年 東京大学大学院人文科学研究科修士課程修了
- 1964年 東京大学大学院人文科学研究科博士課程中退
- 1964年 東京大学文学部東洋史学研究室助手
- 1967年 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所講師
- 1971年 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所助教授
- 1974年 東京大学文学部東洋史学科助教授
- 1981年 東京大学文学部東洋史学科教授
- 1989- 国際タミル学会会長
- 2010年
- 1993年 東京大学文学博士
- 1994年 東京大学定年退官、東京大学名誉教授
- 1994年 大正大学文学部国際文化学科教授
- 1995年 放送大学客員教授
- 1996- 日本南アジア学会理事長
- 2000年
- 2003年 日本学士院賞
- 2004年 放送大学退職
- 2008年 大正大学退職、大正大学名誉教授

2013年 インド政府パドマ・シュリー賞

〈受入の経緯〉

「辛島昇文庫」は、南インド古代・中世史の世界的権威であった故・辛島昇(東京大学名誉教授・大正大学名誉教授)の旧蔵書1,517点からなるコレクションである。これらは、辛島昇名誉教授の逝去後、ご遺族である辛島貴子夫人より東京大学アジア研究図書館に寄贈された。文庫印は松丸道雄・東京大学名誉教授の篆刻による。

辛島貴子夫人から、故・辛島昇名誉教授の蔵書を東京大学に寄贈の申し出を受けたのは2016年のことである。当時、東京大学では、東京大学附属図書館アジア研究図書館上廣倫理財団寄付研究部門(U-PARL)が第1期(2014~2018年度)の活動を開始しており、新設が予定されていた「アジア研究図書館」の構築と研究面での支援に取り組んでいた。

東京大学におけるインド史研究の学統を承け継いでいくことは、東京大学の内部のみならず、日本の南アジア研究においても重要な課題である。このため、U-PARLでは古代史を中心とする「辛島昇文庫」を、近現代史・社会経済史の水島司(当時、東京大学教授)、柳澤悠(東京大学名誉教授)からの寄贈図書と合わせて、新設されるアジア研究図書館の開館時における南アジア

研究資料群の核の一つとして受け入れるプロジェクトを開始した。

故・辛島昇名誉教授の研究上の主な業績は、刻文資料を用いた南インド古代史・中世史であるが、広く一般にはカレーなどのインドの食文化の紹介者としても知られている。2016年7月に実施した第1回の調査では、その学識の博さに応じて、鎌倉の自宅に残された蔵書はまさに載籍浩瀚であり、全てをアジア研究図書館で受け入れることは困難であった。

東京大学アジア研究図書館辛島昇文庫は、故・辛島昇名誉教授の蔵書の全体像でないことについては留意されたい。その思想を理解する上では、残された資料の散逸を防ぐことが理想的であったものの、東京大学アジア研究図書館への寄贈受入は、南アジア研究に資する図書・雑誌資料に留めることとした。また故・辛島昇名誉教授の手による刻文資料の調査記録については旧邸に残し、後日、然るべき機関へと寄贈を検討することとした。

上記の方針の下で2016年8月、辛島家からの搬出前に暫定的な選書を実施した。これについては南アジア研究の視点から下記の辛島昇門下の研究者が行った。

石川寛（東洋文庫研究員・早稲田大学教育学部非常勤講師）、井上貴子（大東文化大学教授）、太田信宏（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所准教授）、澤田彰宏（拓殖大学非常勤講師）、志賀美和子（専修大学准教授）、山田桂子（茨城大学教授） ※肩書きはいずれも当時、アイウエオ順

上記の選定を元に行われた受入作業においては、文学部図書室や東洋文化研究所図書室など、東京大学内に既に所蔵されている重複資料についてはU-PARL内で再び選書を行い、アジア研究図書館の蔵書として

望ましいものを受け入れた。東京大学へ移管されたもののうち、受入対象外となった重複資料については公益財団法人東洋文庫へと移管した。

これらの受入作業は、足立享祐、近藤隼人（いずれも当時U-PARL特任研究員）が中心となって行い、全体を富澤かな（当時、U-PARL副部門長・東京大学特任准教授）が統括した。目録情報システムへの登録については、谷口力光（東京大学人文社会研究科博士後期課程・文学部事務補佐員）、データ整理として澤田容子（当時、東洋大学東洋学研究所奨励研究員）、石川さくら（当時、東京外国語大学言語文化学部）らの支援を受けた。

〈コレクションについて〉

辛島昇文庫は1,517点の寄贈図書・雑誌資料からなる。受入時の調査において国内機関未所蔵であった図書資料945点が新たに将来されたことになる。1900年以前刊行の稀覯本としては、“The Life of Hyder Ally”（1786）、“Select Views in Mysore”（1794）、“A Catalogue raisonné of Oriental Manuscripts in the Government Library”（1860, 1862）、“A.M.D.G. Dictionarium Tamulico-Latinum”（1867）などは国内機関未所蔵であったものである。

言語別で見ると、全体のおよそ80%が英語を中心とする洋書資料の扱いとなる。ここには故・辛島昇名誉教授のご専門であった刻文史料研究の文脈に位置づけられる史資料が多く含まれている。

特に基本文献であるインド考古調査局（Archaeological Survey of India）が創設以来刊行してきた“Epigraphia Indica”、“Annual Report on Indian Epigraphy”、“Corpus Inscriptionum Indicarum”、“South-Indian Inscriptions”といったシリーズが、アジア研

究図書館においても利用可能になったことは利用者にとって大きい。また故・辛島昇名誉教授が専門とされた「南インド」を対象とする“South-Indian Inscriptions”シリーズの中には国内未所蔵であったものも含まれている。これらは今後の日本におけるインド古代史・中世史の研究基盤として活用されていくことだろう。

辛島昇文庫には、歴史研究のみならず、南アジア地域研究・インド地域研究全般において重要な資料も多く含まれている。当時、U-PARL では、新設されるアジア研究図書館の基本文献として、インドの各地域で刊行された地誌 (gazetteer) の網羅的な収集を進めていたが、南インド諸地域の州・県の地誌については、故・辛島昇名誉教授からの寄贈図書が大きな助けとなった。またコレクションには、故・辛島昇教授の長年に渡る研究経歴の中で収集された資料が含まれている。州再編以前にマドラス州と呼ばれた時代の州法の一部や、1970年代のタミル・ナードゥ州の後進諸階級委員会 (Backward Class Commission) 報告書などの資料はまさに現代史に関わるものである。

故・辛島昇教授の研究活動は国際的に知られており、その逝去時にはイギリス BBC のタミル語版や、インド国内の各紙でもそ

の訃報が伝えられた¹。中でも国際タミル学会 (International Association of Tamil Research: IATR) の会長職としての活動は、アカデミアを超えて広く報じられたものである²。辛島昇文庫に収められた IATR の国際会議プロシーディングズは、研究論文集であると同時に、当時問題となっていたインドにおける学術と政治との関係を示す、同時代記録とも言うことができるだろう。

故・辛島昇名誉教授の関心の広さを示す、一見、変わった系統の資料としては、“Amar chitra katha”と呼ばれるコミック・シリーズも含まれている。資料の性質上、本邦の大学図書館、特に研究図書館ではあまり収蔵されなかった資料であるが、インドの神話や歴史などを取り扱う本シリーズは、現代ではその思想的位置も含めて議論の対象となるものである。

受入作業時、旧蔵書に南インドのトラバラーズ・バンガローのリストや「電話帳」が含まれていたことが思い出される。故・辛島昇名誉教授が、インド古代史・中世史研究の中で膨大な刻文資料を用い、一部はそれらを統計的に処理するという、いわばデータ・サイエンスの先駆けのような研究を行ったことは知られている。これらの資料にも書き込みがあり、さまざまな資料を

¹ ‘Jappāṇiyat tamiḷaṇṇar nopōru karaṣimā kālamāṇār’, BBC News Tamil, November 26, 2015, https://www.bbc.com/tamil/global/2015/11/151126_noburuobit (最終閲覧日:2023年9月14日);

‘Inspirational Genius,’ The Hindu, December 9, 2015,

<https://frontline.thehindu.com/other/obituary/inspirational-genius/article7961642.ece> (最終閲覧日:2023年9月14日);

‘Sayonara Karashima-san: Tamil Loses Its Overseas Envoy,’ The Times of India, November 27, 2015,

<https://timesofindia.indiatimes.com/city/chennai/sayonara-karashima-san-tamil-loses-its-overseas-envoy/articleshow/49947273.cms> (最終閲覧日:2023年9月14日);

‘Noboru Karashima Opened a New Channel to the History of Ancient South India, Scholars Say,’ *ibid.*, January 25, 2016,

<https://timesofindia.indiatimes.com/city/chennai/noboru-karashima-opened-a-new-channel-to-the-history-of-ancient-south-india-scholars-say/articleshow/50722113.cms> (最終閲覧日:2023年9月14日);

‘Eminent Japanese historian Noboru Karashima Passed Away,’ Jagran Josh, November 28, 2015,

<https://www.jagranjosh.com/current-affairs/eminant-japanese-historian-noboru-karashima-passed-away-1448683978-1> (最終閲覧日:2023年9月14日)。

² <https://www.thehindu.com/opinion/op-ed/IATR-and-the-World-Classical-Tamil-Conference/article16206321.ece> (最終閲覧日:2023年9月14日)。

分析の対象としていたことを窺い知ることが出来たのは、生前、聲咳に接したことのない整理担当者としては興味深いことであった。

タミル語資料（アジア研究図書館ではXdTで始まる言語分類にあたる）は、およそ20%を占める。ここには『トルハーッピヤム（古き文典）』、『エットウトハイ（八詞華集）』、『パットウパーットウ（十の長詩）』、『ティルックラル（聖なるクラル）』、『シラッパディハーラム（踝環物語）』、『マニメーハライ（「宝石の帯」）』などのタミル文学が含まれている。また数としては限られているものの、カンナダ語の“Epigrāphiya Karnāṭika”や マラヤーラム語の小説など、タミル語以外のドラヴィダ諸語の資料が含まれている。

ドラヴィダ諸語資料については、既に東京大学インド語インド文学研究室（文・印文）が研究基盤を構築しているが、辛島昇文庫に含まれる資料はそれらを更に補う形となる。

ロバート・コールドウェル（Robert Caldwell, 1814-92）による「ドラヴィダ」語族概念の提唱以降、「北インド」とは異なるものとしての「南インド」の研究は、時にドラヴィダ・ナショナリズムと結びつきつつ大きく進展した。

歴史的な環境に基づいた活発な南インド研究の中心は、考古学・歴史学であったが、もう一つの中心は文学であった。U・V・スワミーナータ・アイヤル（U. V. Swaminatha Iyer, 1855-1942）に代表されるタミル知識人たちは、自らの文化を発掘し、多くの文献を出版した。すなわちタミル文学史上、「タミル・ルネサンス」と呼ばれる古典の再発見の時代である。辛島昇文庫にはこれらの成果として出版されたタミル語文学が多く含まれている。

辛島昇文庫には、図書館・文書館のカタログ類も収蔵され、今後の調査研究の入口として大きな助けとなるものである。チェンナイに置かれた「スワミーナータ・アイヤル図書館（U. V. Swaminatha Iyer Library）」は同じくチェンナイの「政府東洋写本図書館（Government Oriental Manuscript Library）」、ならびにタンジャーヴールの「サラスワティー・マハル図書館（Saraswati Mahal Library）」と並ぶタミル語写本の重要な所蔵機関である。この「スワミーナータ・アイヤル図書館」のカタログもまた、辛島昇文庫として新たにアジア研究図書館に将来されたものである。

今後、東京大学アジア研究図書館「辛島昇文庫」を通じて、東京大学におけるインド史研究の学統が受け継がれ、また故・辛島昇名誉教授がその生涯を通して収集した資料群が、日本の南アジア研究の研究基盤の一つとして、さまざまな世代の研究者に利用されていくことを願っている。

辛島昇先生のご研究と教育について

澤田 彰宏

(東洋大学 東洋学研究所 客員研究員)

南インド古代・中世史研究の世界的権威で、東京大学名誉教授、大正大学名誉教授の辛島昇博士(以下、辛島先生)は、2015年11月26日に82歳で、ご自宅のある鎌倉市内の病院で亡くなった。逝去後は、東京大学大学院で辛島先生の指導を受けた門下の研究者やインド人研究者による追悼文がいくつも発表されている。また、インドの複数のメディアでもその訃報と業績が伝えられた。

辛島先生は1933(昭和8)年4月24日に東京で生まれた。父は福岡県出身の中国文学者の辛島驍(1903-1967)で、父方は大分県の宇佐八幡宮の神職も輩出した家系だった。

母方は漢学者の家系であり、祖父は東京帝国大学の中国文学教授だった塩谷温(1878-1962)、塩谷温の妻で、先生の祖母の節は佐原伊能家の出身だった。辛島先生の母は塩谷の長女の悦で、父の驍はその塩谷の弟子そして女婿であった。驍が京城帝国大学の教官であったため、生まれてまもなく辛島先生もソウルに移ったが、1945年太平洋戦争終戦の数カ月前に帰国し、しばらくは疎開生活を送った。

辛島先生は神奈川県立旧制湘南中学(卒業時は新制高校)を卒業後、1954年に東京大学に入学し、文学部東洋史学科に進学した。当時はまだ南アジア史関係の講義は同大でも開講されておらず、学部では中国史

の西嶋定生教授と中央アジア史・トルコ学の護雅夫教授のゼミで漢文史料を読んでいた[辛島 2001:162][東方学会 2006:114-115](大学院1年時に荒松雄先生のインド史の授業を受講し、これが東大最初のインド史の授業だったという[東方学会 2006:114-115])。辛島先生は卒業論文では南インドのチョーラ朝の碑文(刻文)研究について取り組み、1958年に文学部を卒業。同年の同大大学院への進学後は、東南アジア史の山本達郎教授の指導を受けた。同大博士課程在学中の1961年にアメリカのハーヴァード大学の奨学金を得てインドに留学し、マドラス(現タミル・ナードゥ)州のマドラス大学(現チェンナイ大学)大学院で1年間、次いでウーティ(ウータカマンド)のインド政府の碑文史料編纂所で2年間学んだ。

辛島先生は、1964年インドからの帰国後は東京大学文学部の助手に着任し、次いで1967年から1974年までは東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所に勤務され、講師、助教授を歴任した。この間1969年からの3年間インドに二度目の留学をし、マドラスに1年間と碑文史料編纂所が移転していたマイソールに2年間家族で滞在している(このときの生活の様子は夫人の貴子氏の著書『私たちのインド』(北洋社、1976年、および中公文庫、1983年、に詳しい)。そして1974年には東京大学文学部の助教

授に、次いで81年には教授となった。1993年に学位論文“South Indian Society under Vijayanagar : Towards a New Formation”により、東京大学から博士(文学)を取得している。

1994年東京大学文学部の定年退官後は、大正大学文学部に教授として着任した。当時開設されたばかりの同大の大学院文学研究科比較文化専攻での教育にもあたり、2001年から04年には大学院文学研究科長も務めた。更に同時期1995年から2004年まで放送大学の客員教授として南アジア関連の講義を2つ担当した。そして、2004年満70歳での大正大学の定年後も、特任教授としてさらに同大大学院で2008年まで指導を続けた。この間、同専攻での修士論文および博士論文の執筆指導と審査も多く担当したが、インドの大学での博士論文審査の依頼を受けることもあった。辛島先生が審査を担当したインド人の学位申請論文を、筆者も先生の書斎で拝見したことがある。

辛島先生の南インド史研究の中心的な史料はヒンドゥー寺院の壁などに残されたタミル語の碑文であった。先生はときに自ら拓本を取りに現地へ赴くなど、未刊行のものも含めた膨大な数の碑文を読み込み、さらにはコンピューターを使用して計数的処理も行っていた。そうして史料にもとづく緻密な古代・中世の南インド社会と文化についての研究報告を、辛島先生は早くから英語で行い世界に問うていた。それはインドのオックスフォード大学出版会(OUP)からの複数冊の単著・共著の出版にも表れている。また、インド洋の海上交易史にも強い関心を持ち、南インドやスリランカの海岸の遺跡で中国陶磁器の発掘作業も行っていた。

一方、国内では専門の研究論文に留まらず、インド・南アジア文化の概説である『イ

ンド入門』(1977年、東大出版会)、『インド』(新潮社、1992年)、南アジア通史の『地域からの世界史 南アジア 5』(朝日新聞出版、1992年)、『新版世界各国史 7 南アジア史』(山川出版社、2004年)、など、一般向けのインド/南アジア(史)の書籍の出版にも力を入れていた。他にも、『南アジアを知る事典』(平凡社、初版1992年)では筆頭の監修者となり、高等学校の世界史教科書(『新世界史』およびその改訂版、山川出版社、使用年1995~98、1999~2004年)の編著者を務めたこともあった。

教育者や組織者としても、辛島先生は日本では皆無だった南インド研究のパイオニアとして、同地域の研究の基礎を確立した。早くから「南インド研究会」を主宰し、やはり編者となった『ドラヴィダの世界』(東大出版会、1994年)や『世界歴史大系 南アジア史 3 南インド』(山川出版社、2007年)などで、この地域の研究の重要性を学界に強く示してきた。辛島先生の南インド史研究・教育の集大成ともいえるのが、長年の念願であったマドラス大学のニーラカンタ・シャーストリー教授の南インド史叙述を改める、*A Concise History of South India* (OUP, 2014年)の編纂・出版だった。この本では先生の共同研究者やかつて指導した門下の研究者を執筆陣に迎えて、シャーストリー教授の本では扱われていなかった近現代史までを含めた、南インド通史の叙述に成功している。このように、東大東洋史学科で南インド史を専門とする研究者を多く養成し、さらに学界では広くその他の分野の南インド地域研究者さらには南アジア研究者たちを組織したのだった。

同時に辛島先生は国内外の諸学会での要職就任も数多かった。日本では、史学会の理事長(1993年)や東方学会の常務理事(2001~06年)を務めたが、日本南アジア

学会では1988年のその結成において大きな役割を果たし、その後理事長を二期務めた(1996~2000年)。さらに日本学術会議の会員(2000~03年)にも就任した。インドではインド碑文(刻文)学会と国際タミル学会(IATR)などの会長職も務めた(前者は1985年、後者は1989~2010年)が、外国人である辛島先生がインドの学会の会長職に選ばれたのは、その研究への高い評価はもちろんだが、インド人研究者たちにも自分たちの組織の長にふさわしい人物として認められていたことを示している。しかし、同時に現地タミル・ナードゥ州政府によるIATRの政治利用に対して、研究組織としての立場を守るために長年尽力していたことを私も伺ったことがある。

学術研究関連での受賞も多く、例えば、1995年に福岡アジア文化賞の学術研究賞、2003年には著書 *History and Society of South India : The Cholas to Vijayanagar* (OUP, 2001年) に対して第93回日本学士院賞、2007年には文化功労者に選ばれた。さらに2013年にはインド政府からパドマ・シュリー賞が授与された。

ここで筆者自身の経験を述べさせていただくと、辛島先生には筆者の大正大学大学院文学研究科比較文化専攻の修士課程入学時から博士課程の途中、先生が特任教授を退職されるまでの6年ほどの期間ご指導をいただく機会に恵まれた。当時の辛島ゼミは史学専攻でも南アジア地域研究専攻でもなかったので、そこで私たちが読んだものは、先生の専門の歴史学や南インド研究のものは実は多くなく、人類学関係の論文が比較的多かった印象がある。おそらく当時の辛島先生には歴史叙述との関連で、人類学での民族誌叙述方法についても強い関心があったように筆者は感じた。毎週のゼミでは論文を1本選んで、それを担当者がレ

ジュメにまとめ発表した後、ゼミ生全員で議論し、最後に先生が全体にコメントをするというのが普段の流れだった。最後の先生によるコメントは常に通時的にも共時的にも広い視野からのもので、院生間の議論ではなかなか見えてこなかったその論文の意義と問題点を捉えていて、論文とはどのように読むものなのか、そして良い論文とはどういうものなのかを示す、まさにお手本であった。

辛島先生は国際研究プロジェクトも頻繁に組織されていたが、インドから研究者が来日したときにはそのときの指導学生に命じて、休日に案内や買い物に同行させていた。これは日本に不慣れな外国人研究者への気遣いはもちろんだが、若い日本人の院生たちに現地の研究者とコミュニケーションを取らせるという面もあったようだ。先生自身が若いころにそういう経験をもったことからの方針だった[東方学会 2006: 131]。

辛島先生は70歳を過ぎたころから体調不良のために年に一度ほどのペースで入院するようになったが、病室にもノートパソコンと本を持ち込んで研究を進めていた。そのような時は筆者に対しても「図書館から何々の本を借りて持ってきて欲しい」といった依頼があった。

世界の学界で活躍する歴史家である一方で、一般には辛島先生は「カレー博士」としてよく知られていたようだ。漫画『美味しんぼ』の「カレー勝負〈3〉」の回に、「カレー博士の東大インド史教授」として出たこと(コミックは1990年出版)がきっかけかと思うが、それだけでなく自身でも、夫人の貴子氏との共著の『カレーの身の上』(1986年)と『カレー学入門』(河出文庫、1998年)や、単著の『インド・カレー紀行』(岩波ジュニア新書、2009年)などを著し

た。そして、NHK 総合のテレビ番組「爆笑問題のニッポンの教養」(2011年2月)でインド・カレーを取り上げた「マジカルカレーツアー」の回では解説役として出演し、手でカレーを食べる様子も見せていた。ただし、辛島先生のインド・カレー文化論は料理そのものの紹介や啓蒙にとどまるものではなく、カレー料理を通じて、インドの多様性と統一、すなわちインドの各地域の文化の独自性とそれらが融合して全体としてインド文化を形成していることを示すものだった。つまり先生のカレー文化論は歴史研究ともつながっているのだった。絶筆となったエッセイも、そのような視点から記されている[辛島 2016]。

辛島先生は、東大教官のときから鎌倉のご自宅に内外の研究者や学生を招いて議論をし、共同研究を行っていた。夫人の貴子氏によると、長く共同研究者だったインド人のスッパラーヤル教授(タミル大学)やシャンムガム教授(チェンナイ大学)をはじめとして、南インドの中世国家論をめぐる論争相手だったアメリカのバートン・シュタイン教授(ハワイ大学)も辛島家に宿泊したことがあったという。訪れた外国人研究者は「50人や60人ではきかない」そうである[辛島 2016: 12]が、そのようなときに来客を迎えるのは玄関入ってすぐの広い部屋で、ここには横に長い窓側に沿って作り付けのベンチのようなものがあり、大勢の来客でも座れるサロンのような役割も果たしていた。その際には貴子氏によるさまざまな種類のインド・カレーが用意され、特に食習慣に厳しいインド人研究者を喜ばせたようだ。

このように先生のインド史研究の交遊関係は学界では世界中に広がっていたが、それ以外のものもひとつここに記したい。この辛島昇文庫では蔵書全てに寄贈印が捺さ

れているが、これは中国古代史家の松丸道雄東大名誉教授が篆刻されたものである。松丸先生と辛島先生は学部時代に東洋史を学び始めたときの同級生であり、その後は東大教授として同僚となり、辛島先生が亡くなるまで親しくされていたご関係であった。

辛島先生の研究と教育双方での実績と影響は今後とも長く残っていくことは疑いなく、それは先生の卓越した能力と絶え間ない努力の成果であることはいうまでもない。しかし、それだけでなく夫人の貴子氏の存在があったからではないかとも筆者は感じている。あくまで筆者が知るわずか十数年の期間ではあるが、先生はインド渡航にはいつも必ずといってよいほど貴子氏を伴っていたし、国内の出張でも同様だった。辛島先生が研究に打ち込み世界的な業績をあげたその背後には、貴子氏による長い間の心身両面でのサポートがあった。そのような夫妻二人三脚での研究人生の歩みだったのでないかと筆者は思っている。

辛島先生の研究を支えた一端であるこの辛島昇文庫が、先生の意志を継ぐこれからの南アジア研究者に広く利用されることを願っている。

辛島昇先生への追悼文(筆者が確認できたものに限る)

栗屋利江 2016「追悼 辛島昇先生」『史学雑誌』第125編第2号, pp. 291-293.

太田信宏 2016「辛島先生の研究について」『インド通信』第449号(追悼特集 辛島昇氏), pp. 3-4.

志賀美和子 2016「辛島先生の思い出」『インド通信』第449号(追悼特集 辛島昇氏), pp. 4-5.

スッパラーヤル, Y 2016「追悼: 辛島昇

教授」「インド通信」第449号(追悼特集 辛島昇氏), p. 3.

水島司 2016A「辛島昇先生追悼文」『東方学』第131号, pp. 217-219.

水島司 2016B「辛島先生への悼辞」『インド通信』第449号(追悼特集 辛島昇氏), pp. 1-2.

Champakalakshmi, R. and Subbarayalu, Y. 2015. “Inspirational Genius.” *Frontline*, December 25.

Hamashita, Takeshi. 2018. “Obituary: Last Books Edited by the Late Professor Karashima Noboru.” *Memoirs of the Research Department of the Toyo Bunko* vol. 76, pp. 139-40.

Menon, Parvathi. 2016. “Noboru Karashima: An Obituary.” *Review of Agrarian Studies* vol. 6, no. 1, pp. 160-165.

Mizushima, Tsukasa. 2016. “Noboru Karashima, 1933-2015.” *Review of Agrarian Studies* vol. 6, no. 1, pp. 156-159.

Subbarayalu, Y. 2016. “Obituary: Noboru Karashima, 1933-2015.” *Indian Historical Review* vol. 43, no. 1, pp. 201-205.

〈参考文献〉

東方学会 2006「学問の思い出——荒松雄博士を囲んで——」『東方学』第112号, pp. 106-138.

辛島昇 2001「山本達郎先生のご逝去を悼む」『東方学』第102号, pp. 162-164.

辛島昇 2016「カレー料理とインド研究交遊録」『季刊民族学』155号, pp. 3-47.

〈謝辞〉

本稿の執筆にあたり夫人の辛島貴子氏から多くのお話を伺うことができました。記して感謝申し上げます。

アジア研究図書館活動報告

「アジアの資料をむすび、ひらくーデジタルコレクションの可能性ー」開催報告

荒木 達雄

(附属図書館アジア研究図書館上廣倫理財団寄付研究部門 (U-PARL) 特任研究員)

2023年3月6日から3月12日にかけて、人文社会科学系組織連絡会議連携イベント「人文社会ウィーク 2023」が開催された。アジア研究図書館は「アジアの資料をむすび、ひらくーデジタルコレクションの可能性ー」と題するイベントを開催し、企画・運営はU-PARLが担当した。

本企画は展示と記念セミナーの2種からなる。

展示は、①U-PARLが運営する「東京大学アジア研究図書館デジタルコレクション」(以下、デジタルコレクション)にて公開中、公開予定の資料および関連の深い資料の現物(原資料)展示、②デジタルコレクションの解説パネル掲示、③デジタルコレクションに関わる研究事例を紹介するパネルの掲示を行った。この展示は、より多くの方々にご覧いただくべく、人社ウィーク閉幕後も4月21日まで開催した。

開幕日である3月6日は記念セミナー「東京大学所蔵『水滸伝』諸版本について」(報告者:荒木達雄)と題し、デジタルコレクション内のコンテンツ「水滸伝コレクション」を題材とした大学生・大学院生を対象とした文献学セミナーを実施した。

パネルの題目は右の通り。すべて全期間掲示した。

展示は全4期にわけて行った。展示資料一覧は次頁に掲げる。

< 掲示パネル一覧 >

1. アジア研究図書館長挨拶
2. 「アジア研究図書館デジタルコレクション」について
3. 碑帖拓本コレクション
4. 水滸伝コレクション
5. U-PARL セレクション
6. IIF とは?
7. エジプト学研究のためのデジタル資源
8. デジタルコレクションを活用した水滸伝研究
9. IIF を活用した古代エジプト文字研究の事例
10. アラビア文字 OCR とデジタル資料の活用



展示の様子 (第1期)

第I期(3/6~3/10) 貴重書展示週 開放時間 9:00~17:00

第II期(3/11~3/22) 総合図書館の開閉館時間に準じる

第III期(3/24~4/16) 総合図書館の開閉館時間に準じる

第IV期(4/17~4/21) 貴重書展示週 開放時間 9:00~17:00

*総合図書館休館日は非開放

展示 番号	資料名 現所蔵機関、請求記号(*は貴重書指定 ☆はU-PARL購入資料)	出展会期
1-1	*洛神賦十三行 総合図書館,青洲文庫 A00:6078	I
1-2	*曹全碑 総合図書館,南葵文庫 A00:5603	I
1-3	*顔氏家廟碑 総合図書館,南葵文庫 A00:6258	I
1-4	☆金麟厚草書千字文 アジア研究図書館 OPAC未登録	II、III
1-5	☆朴彭年草書千字文 アジア研究図書館 OPAC未登録	II、III
1-6	☆古今歴代法帖 アジア研究図書館 OPAC未登録	II、III
1-7	*集字聖教序 総合図書館,南葵文庫 A00:5938	IV
1-8	*拙先塋記 総合図書館,青洲文庫 A00:6222	IV
1-9	*停雲館帖 総合図書館,青洲文庫 A00:6100	IV
1-10	*古今歴代十八史略 総合図書館,南葵文庫 A00:4313	I
1-11	*元氏長慶集 総合図書館,青洲文庫 A00:5824	IV
1-12	☆争春園全伝 アジア研究図書館 OPAC未登録	II、III
2-1	*新刻全像忠義水滸誌伝 総合図書館,鷗外文庫 A00:6371	I
2-2	*鍾伯敬先生批評忠義水滸伝 総合図書館 A00:6267	IV
2-3	*忠義水滸全書 総合図書館 A00:6376	IV
2-4	水滸伝全本 総合図書館 E46:386	I、II、III
2-5	忠義水滸全書 総合図書館,南葵文庫 E46:214	I、II、III
3-1	八旗氏族通譜 総合図書館 G30:495	I、II、III、IV
3-2	☆ダカオのバゴダ アジア研究図書館 OPAC未登録 <i>Pagode de Dakao</i>	I、II
3-3	五経節要演義 総合図書館 B60:1505	III、IV
4-1	北路紀略四卷 アジア研究図書館 OPAC未登録	II、III、IV
4-2	*左伝節要 総合図書館,南葵文庫 A00:5872	IV
4-3	論語諺解 総合図書館 B60:567	I、II、III
4-4	*論語諺解 文学部漢籍コーナー(言語学研究室),小倉文庫 言語:漢籍小倉:4753	I
5-1	エジプトおよびエチオピアの記念碑 総合図書館 BG222:1-13 <i>Denkmaeler aus Aegypten und Aethiopien</i>	I、II、III、IV
5-2	ヒエラティック古書体学 アジア研究図書館 6 W:800 X:mol 1-mol 4 <i>Hieratische Paläographie</i>	I、II、III、IV

第I期、第IV期は総合図書館の指定する貴重資料を中心に、第II期、第III期はU-PARLが選定し購入したアジア研究図書館資料を中心としている。

期間中実施した観覧者アンケートでは、このような資料が存在することを知らなかった、普段見られない貴重資料が見られてよかった、興味のある分野のものが展示されていたので楽しめたなどの好意的な意見が寄せられた一方で、珍しいものを並べているだけのように感じる、資料の活用方法や研究的価値が見えないなどの厳しい感想も頂戴した。

U-PARLとしても、「デジタルコレクションの可能性」との副題に合うべく、展示資料はなぜデジタル化にふさわしいのか、なぜ他の資料より優先してデジタル化したのか、これらの資料がどのような研究に用いられているのかを資料解説文、掲示パネルなどに盛り込んだつもりではあった。しかしながら、展示室中央に置かれた資料と、壁に掛けられた掲示パネルとの間の連携が必ずしもうまくいってはいなかったこと、また、学外の方々も含め多くの方にご覧いただきたいと考えていたにもかかわらず専門外の方への配慮が不十分であったのではなかったかなど、反省すべき点も多く残った。

「デジタルコレクション」は今後もアジア研究図書館の主要事業のひとつとして成長させていかねばならないものとU-PARLでは考えている。コンテンツを提供するばかりでなく、それぞれの目的に応じた活用方法の紹介にもより力をいれていきたい。

アジア研究図書館利用案内

<https://www.lib.u-tokyo.ac.jp/ja/library/asia/user-guide>

場 所	総合図書館4階
開館日／閉館日	総合図書館の開館日・閉館日に準じます。
開館日	以下閉館日を除くすべての日
閉館日	年末年始(12月28日～1月3日) 定例休館日(おおむね毎月第4木曜日) 夏季の一斉休業日(2日間) 試験等大学行事のための閉館日 その他臨時閉館日

開館時間

曜日等	通常期	8月・3月
月～金曜日	8:30～22:30	8:30～21:00
土・日・祝日	9:00～19:00	9:00～17:00

学外の方もご利用いただけます。詳しくはホームページをご覧ください。

<https://www.lib.u-tokyo.ac.jp/ja/library/general/user-guide/outside/gakugai>

次号の予定

第14号は令和六年一月八日に発行予定です。

ニューズレターへの情報提供、投稿や、記事へのご要望があれば、東京大学アジア研究図書館 ([asialib\[at\]lib.u-tokyo.ac.jp](mailto:asialib[at]lib.u-tokyo.ac.jp))までお知らせ下さい。

編集後記

第13号をお届けします。

本号では、弊館選書委員会の各委員による蔵書分析を掲載いたしました。今後も定期的に同種の分析を行う予定です。また弊館所蔵の辛島昇氏旧蔵資料について、二名の先生がたから貴重な報告を御寄稿いただきました。同旧蔵資料については別途書誌目録を準備中です。(J)